

表紙に寄せて

小澤 實 樹

人類がはじめて月にランディングしたその日、地球上では異常な興奮の輪が広がりました。でも一方で、古くから語り継がれてきた、月に兎が住んでいるという「月とうさぎ」のロマンは静かに消えてしまいました。それは1969年のことです。その年、東京蜘蛛談話会誌「KISHIDAIA」が、数人の仲間の歓喜の声に迎えられて誕生したのです。タイトルにはヨツボシワシグモの目がキラキラと輝いています。そしてこちらは消えるどころか、むしろ年毎に成長を続けました。

その第1号に「キシダイア発刊にあたって」と題して、萱嶋泉先生が書かれています。その中には東京蜘蛛談話会の誕生期のこと、岸田久吉先生のこと、会誌キシダイア発刊のことなどに続いて、最後に「誰でも読める楽しいものにするのが私共の念願である」とあります。やがて、会誌は号を重ね、クモ報文は多岐にわたり、2年目には早くも図版まで掲載されています。

談話会が5周年を迎えて、発行された「KISHIDAIA」No.26-28/記念号の巻頭に萱嶋先生は「未知の世界の多いクモであれば、どんなささいな観察でも貴重な文献であり、後世に記録されるべきことであると思う。…小さな記録を無駄にせず、こつこつと収録することが大切であり…」と書かれています。また、この記念号を機会に、会誌「KISHIDAIA」の書体も新たになり、印刷はタイプ孔版ながら、会誌の体裁もかなり整ってきました。

さらに何よりも嬉しいことは、この頃から会員が年毎に増えて、クモ情報が果敢に行き交い、クモ情報もさることながら、会誌の充実と共に、クモを愛する素晴らしき人間の輪が広がったことです。のちに千国安之輔先生は『写真日本クモ類大図鑑』（偕成社）刊行にあたって、「未知なるを探り真実を追究して発見の喜びに浸る」と、言われました。それは、会員の誰もが共感する言葉だと思えます。

30周年は、それを回顧するのではなく、むしろこれを土台とした21世紀へのスタートの年とも言えると思います。東京蜘蛛談話会の発展と会誌「KISHIDAIA」が未知なる世界を目指して、ますます充実することを祈念するものです。そんな思いで30周年記念号の表紙を描きました。そしてこの節目に参加できたことを光栄に思います。

(1998年10月記)

東京蜘蛛談話会発足の前後の事情

萱 嶋 泉

先日、新海明氏より KISHIDAIA の誕生から 30 年になるので、次の事柄を企画してみた、それは KISHIDAIA の 76 号と 77 号を 30 周年記念号 ・ として発行することである、については東京蜘蛛談話会の発足前後の事情について書いて頂きたいとの依頼があった。私はこの企画に大賛成であるので、即座に承知したが、30 年も前のことであるので、当時の日記、メモ帳、集會覚え書帳等を読み直して書いてみたのである。また、新海栄一氏には原稿を見ていただいた。

私は昭和 38 年（1963 年）4 月に国立音楽大学に職を与えられて、宮崎県より上京してきた。予め指導を受けていた岸田久吉・植村利夫の両先生から直接に教えを受けることができ幸いであった。

上京して日の浅い私を、岸田先生は東京都文化財保護委員に、植村先生は日本生物教育会の理事と東京都生物研究会の幹事に推薦して下さり、それらの仕事を通して多くの生物学の先生方を知ることができて、東京の中・高生の様子を伺うことができた。しかし、その先生達が口を揃えて、最近の中・高生は自然ばなれをして、動植物に興味を示さなくなったと話されるので驚いた。田舎暮らしをしてきた私には考えられないことであった。そこで植村先生にその理由を尋ねてみた。先生はこの現象はかなり以前から現われていた、だが近年自然破壊がはげしくなり、中・高生の考えが Out door から In door に変わりつつある、このことも原因の一つと思うと話された。その当時、東亜蜘蛛学会は独自の大会を持っていなかったで、動物学会の大会が開かれた時に、その大会に出席しているクモの関係者が集って話し合う状態であった。それで一般のクモ学会々員と話す機会がなかった。そのためか若い人の会員が少なかった。この有様では多くの人々に、クモを知って頂くことができない、どうしても若い人に参加してもらって、クモは愛すべき虫で人とも密接な関係のあることをみんなに知って頂く運動を起さねばと考えるようになった。

私は昭和 39 年（1964 年）7 月にサ・エ・ラ書房より『クモの生活』という本を出版した。その本が幸いにも NHK のラヂオ番組の私の本棚にとりあげて頂いて、ラヂオによって放送された。後日この本について植村先生と対談をすることになり、ラヂオで放送した。すると、放送直後から 10 名ばかりの方から電話を頂いた。その中にクモのことをもっと知りたいから後日手紙を書くという人が幾人かいた。

昭和 40 年（1965 年）8 月 5 日に日本生物教育研究会があつて、その会の後でクモの仲間が会合を持った。その席には福井玉夫、岸田、植村、関口晃一、志賀卯助、松本誠治、新海栄一等の方々がおられた。この時はじめて松本（大学生）・新海（高校生）の両名に会ったのである。会の終る時に我家の路順と電話番号を渡して、是非遊びにくるようにと話して別れた。この年の 11 月上旬、新海君が竹野光春、小滝研児の両君をつれて、我家にきてくれた。東京においても若い友達ができたので嬉しくてたまらなかった。新海君に今度くる時は松本君を誘ってくるようにと頼んだ。すると早速次の日曜日に 2 人で尋ねてきてくれた。若い人のすることは誠に早い。その日は話が弾んで午後 1 時から午後 8 時までつづいた。途中でおむすびとたくわんで夕食を取った。私はしゃべりっぱなしであったので疲れたが、私よりも聞いてくれた 2 人の方がもっと疲

れたことと思った。このようにして松本・新海の両君とは、頻繁に集って語り合った。私の日記によると大学で講義のない日は Week day でも、2人がきてくれたと記している。

昭和41年(1966年)の4月になると、東京農業大学に入学した大河内哲二君が参加してくれた。大河内君は高校生の間に調べたクモの論文を持参してきたのが最初であった。私は彼の論文を読んで、高校生でよくもこのような観察ができたものと感心した。とにかく根気よく丁寧に観察されているので、今まで見落してきたものを、はっきりと我々に示してくれている。全く頭の下がるものであった。昭和41年8月25日の Dr. Marples 夫妻の歓迎会でもこの両名が参加してくれた。

そうして集るたびに葉書に寄書をして、八木沼健夫先生、吉倉真先生、齋藤三郎先生、宮崎県クモ研究グループ等に出した。この寄書に対する反応は大きかった。八木沼先生は「羨ましい。同好の士が、心おきなくクモについて、長時間にわたって話し合える、なんて素晴らしい集りであろう。これからもつづけて下さい」。吉倉先生は「楽しそうですね。貴重なものは雑談から産まれることが多いものです。また寄書を下さい」。齋藤先生からは「東京はいい所だ。さいはての札幌は淋しい。寄書のくるのを待っています」。このように諸先生方は寄書を喜んで下さったのである。宮崎県のクモ研究グループの面々も、「寄書がくるたびに刺激を受けている。東京に負けずに頑張る」という便りをよこしてきた。

昭和42年(1967年)になると、宇都宮大学に在学中の浜村徹三君が、クモの集まりの度に遠い所からきてくれた。この拙宅でのクモの集りは、しばらくこの4名でつづけた。日曜日の午後には話すことがあってもなくても集るのだと言って、我家に集ってきてくれた。集れば何か得るものがある。遠い所からきて多少しも苦にならないと言ってくれるので、愚妻は張り合いがあると大喜びであった。このように集りが発展してくると、きちんとした名前がほしくなって、皆んなで智恵をしばった名が東京蜘蛛談話会であった。

私は会名の出来たことを療養中の岸田先生に報告した。先生は非常に喜ばれ、談話の談は言べんに災であるから、大いに論じ合って災のように燃えてもらいたい、全く良い名をつけたものだとしてほめて下さった。

昭和43年(1968年)になると、優秀な新人が、このクモの集りに加わった。国見裕久、小林久俊の方々である。お互いに語る事柄も学問的になってきた。寄書は必ず書いて諸先生方に送った。その数も増えて毎回15通出すようになった。

一方、岸田久吉先生の病気は次第に重くなり、昭和43年(1968年)10月4日、遂に不帰の人となられた。このことは私共にとって最大の悲しい出来事であった。

10月19日土曜日、御子息の岸田正吉氏より、相談したいことがあるので来て欲しいとの電話があった。急遽お宅に参上した。相談とは先生の蔵書の件であった。正吉夫妻は共に文科系の方であるから、理科系の多い蔵書の整理は貴方達でしてほしいと言われて、先生の部屋、その他の各室の本棚、押入、物置等にある本を見せて下さった。私はその膨大な書籍に唖然として、しばしば本の前にたたずんだ。正吉夫妻は父が苦勞をして買い集めたものであるから、整理後はその蔵書を有効に利用して頂ける所に寄贈したいと言われた。私は早速、東京蜘蛛談話会のメンバー

に集ってもらい、岸田先生の蔵書の整理の件を相談した。松本・新海の両君をはじめ全員が、この仕事は東京蜘蛛談話会のせねばならぬことと受け止めて、毎週土曜日の午後岸田先生宅に集合して整理をしてはどうかということになった。このことをお知らせすると喜ばれて、「昼食は当方で用意するから是非東京蜘蛛談話会でして頂きたい、整理の開始は10月下旬からお願いしたい」とのことであった。

蔵書の整理の第1回目は10月26日(土)で、先ずクモに関する書籍と文献を選び分けて、先生の部屋の隅に置き、他のものは5冊づつ紐でしばり、玄関側の部屋に奥の方からきちんと置いた。この日は午後4時まで仕事をしたが、先生の部屋の3分の1しか出来なかった。第2回目は11月2日(土)で午前10時から午後4時まで休憩をとらずに皆で頑張って先生の部屋を仕上げた。正吉夫妻はその働きぶりを見られて、「ほんとうに素晴らしい学生さん達ですね、父もきっと喜んでいるでしょう」と言われた。第3回目は11月9日で5名であった。今までは各自がパンを持参して昼食にしていたが、里子夫人からこれからは私の作った昼食を食べるようにと言われて、おいしい昼食を頂いた。そのためか全員が岸田一家に親近感を持てるようになり、楽しい雰囲気の仕事が捗った。

第4回目は11月16日(土)、第5回目は11月30日(土)、第6回目は12月7日(土)とつづいた。この間、蔵書を引き取ってくれる所を探していたが、大河内君の世話で東京農業大学の図書館に岸田先生の寄贈図書として収納することが決まった。私は大河内君を通して農業大学の沢田玄正先生に寄贈図書を引き取って頂く期日の相談をしていたが、いよいよこちらの準備ができたので、農大に向いて直接に沢田先生に、こちらの準備完了を報告に行った。沢田先生は喜ばれて12月14日にトラックで受け取りに行くとのことであったので、沢田先生に感謝しつつ帰った。第7回目が12月14日で、何時もより早く新海栄一君と岸田先生宅に行った。私達が到着して間もなく、農大図書館の大型トラックが2名の職員と来てくれた。午前10時には、談話会の常連がそろったので、先ず寄贈図書をトラックに積むことから始めた。午前中に積み終えて、図書館の職員の2人は次のような感想を述べられた。「このように多方面にわたる貴重な書籍を寄贈して頂いて感激である。早速岸田先生寄贈図書目録を作り、御遺族に進呈したい」と丁寧に挨拶されて帰られた。私共はクモに関する書籍と文献を松本君の車に積み込んだが、まだ積み残しがあったので、後日頂きにお伺いすることを約して帰り支度をしていると、正吉夫妻がお礼の意味で共に食事をしたいと、襖を開けると「お寿司」が用意されていた。私共全員が心を合わせて楽しく働くことができ、いろいろと教えられる事が沢山にあったので、こちらから正吉夫妻にはお礼を述べるべきだったのである。その「お寿司」のうまかったことは忘れられない。東京蜘蛛談話会のメンバーは、この仕事をしたお蔭で、お互いの絆が非常に強いものになった。そうして我々でもやれば出来るという自信がついたのである。この結束は岸田久吉先生のお蔭と感謝している。

第8回目は12月28日で、クモの文献の残部を運ぶため、松本君と新海君と小野展嗣君の3人と一緒に先生宅に伺った。その時、里子夫人が部屋の隅に積んであるダンボール箱4個を指して、あれは父が大切にしていたもので机の引き出しや収納箱に入っていた品々である、未発表の

原稿も図もある，よろしければお持ち帰り下さいと言われた．かなり古いものもあったので，丁寧に拝見すると，ほんとうに貴重なものばかりであった．私共は喜んで頂戴することにした．そのダンボール箱の4個はそれぞれに宝がぎっしりと詰まった玉手箱であった．私共は昭和43年10月から12月まで長い間，岸田正吉ご夫妻に大変お世話になった．久吉先生が大切にしておられた書籍・文献等を頂いたのであるから，これらの貴重な物を活用し，先生の恩に答えねばならない．この好意に報ゆるべく決意を新たに先生宅を後にした．

実は，蔵書整理の最後12月28日の一週間前の12月21日（土），拙宅で談話会の例会を開いたときのことである．私はこのたびの仕事のねぎらいをすると共に，会員に今後の会の運営等を相談した．その席でここまでこの会が発展してくると，会の規則と機関誌がほしいという意見が出るようになった．しかし，会則は現在の会員数ではもう少し待ったほうがよいということになった．だが機関誌については，岸田先生の蔵書と文献の整理を我々の手で成し遂げ，クモに関するものは責任をもって，この談話会が保管することになった，それで早急に蔵書と文献の目録を制作して発表せねばならないし，さらに岸田先生の未発表のものを公にする場がほしい，そのためにはどうしても東京蜘蛛談話会の機関誌を作り，始めのうちは目録，先生原稿等を載せ，だんだんと会員の研究論文，会員の動静等を載せて，クモを愛好する同志を増やす役目もこの機関誌が果たしてくれればこれに勝るものはないということで，機関誌の発刊が決まった．さて，機関誌の名称であるが，談話会の常連が，岸田先生の業績を後世に伝える誌名にはこれ以外にはないと決めたのが KISHIDAIA である．

KISHIDAIA の由来については創刊号に書いたので参照されたい．

以上のような経緯で，東京蜘蛛談話会の機関誌として KISHIDAIA が1969年（昭和44年）2月28日に誕生し，発行されたのである．今，振り返って思うことは，岸田先生の蔵書の整理という仕事を皆でしたお蔭で，クモの集りのメンバーの心の結束が固くなり，自由に話し合いができるようになった．その結果，東京蜘蛛談話会という会名と機関誌も生れたのである．この時に得たものすごいエネルギーが，やがて東亜蜘蛛学会に独自の大会を持つ原動力になったと思う．

東京蜘蛛談話会には有能な若い会員が多数いて，その方々の働きで立派な会則も出来たのである．その時々々の役員がしっかりしていたお蔭で今日の東京蜘蛛談話会が存在する．若い人々に感謝しつつ筆を措く次第である．

（1998年11月記）

[K I S H I D A I A] 発刊の頃の思い出

大河内 哲二

東京蜘蛛談話会会誌「KISHIDAIA」No.1 (1969, 1) ロウ原紙とガリ版を使って手書きした, B5版6ページの小さな冊子を久しぶりに書棚から出してみた。これを書いたのが当時大学生だった私である。内容は「キシダイアの発刊にあたって」(萱嶋 泉), 「クモの称呼」(岸田久吉遺稿), 「談話会ノートより」, 「岸田久吉氏蔵書目録」, 「文献紹介」となっている。

第3号(1969, 4)まではガリ版印刷, 第4号からタイプ孔版印刷になり, 第5号(1969, 5)からは表紙も付き, なんと八木沼先生の原稿も載っている。年末までに12号, つまり月1回の割合で発行したわけである。『クモについては何でも見てやろう, 知りたい』という思いや, 『我々の活動を広く知ってもらい, クモ愛好の仲間を増やしたい』というメンバーの若さと情熱を随所に見て取ることができる。

「談話会誌『KISHIDAIA』が発刊30周年になるので, 記念号の原稿を」との手紙をいただき, 一瞬「えっ」と思った。というも私にはそんな長い時間が経過した実感がなかったからである。それだけバタバタと過ごしてきたと言ってしまうことであろうか。と同時に「クモ中心の生活から離れてそんなに時間がたってしまったのか」という思いにも駆られてしまった。第1号と30年後の第75号を比べると「KISHIDAIA」の発展はまさに目を見張るものがあり, 談話会自体の存在意義も単なる同好者の集いでなく, 押しも押されもせぬ日本のクモ学推進の機関になっていることが改めて感じられた。

しかしその一方で, 談話会初期の「何でも見てやろう, 知ってやろう」という精神が談話会の基本的な姿勢として受け継がれ, 生き続けていることは大変うれしいことである。これは一般の人たちのクモへの興味・関心を高め, クモに親しみを持ってもらおう上で欠くことのできない談話会運営の重要な方針であると思う。このような談話会に育てあげるために, 終始指導をいただいている萱嶋泉先生, そして会をまとめ, 会誌の編集・発行にあたってこられた多くのメンバーの方々に, 改めて敬意と感謝の意を表する次第である。

私と談話会の関わりは, 高校時代の観察記録を萱嶋先生に見ていただきたくお送りし, そのことが縁で, 談話会発足と同時に誘っていただいたことに始まった。当時は原色蜘蛛類図鑑が発行されていたものの, 勉強するにも参考文献が手に入らない状況であった。従って休日に行われる談話会でのクモを愛する仲間とのクモ談義が大変新鮮で知識欲を大いに刺激し, とても充実した楽しい時間であった。また毎回, 集まったメンバーが寄せ書きをして, それを各地のクモ仲間や先生方に送ってきた。多くの方々から返事もいただき, 我々の視野は関東から全国区へ広がっていったものである。このアイデアは萱嶋先生の発案であるが, 今考えると若いメンバーや送られた相手の研究意欲をかき立て, またクモ愛好者の組織作りや底辺拡大に刺激を与える上で実に有効な手段だったと思う。その後全国各地にクモ談話会が発足したことから, 萱嶋先生の先見性に改めて敬服している。

初期の [KISHIDAIA] に見られるように, クモ情報に飢えていた我々は, 雑誌や新聞記事を

はじめ、あらゆるクモに関する情報を集め提供し合っていた。小さな観察記録や採集リスト、文献紹介なども大変重要な情報になった。また、日本のクモ学の第一人者であられた岸田先生が亡くなられ、その蔵書の整理に携わることができたことも、一流の研究者の存り方から学ばせていただく貴重な機会であった。おそらく、この機会を与えて下さった萱嶋先生には、この仕事で若者が自分の大きな目標を抱き、貴重な何かを吸収できるという読みがお有りだったのだろうと思う。そうした温かいご配慮の中で、我々は本当に有意義な時間を過ごさせていただき、文献だけでは決して得られない知識やエネルギーを蓄積することができた。私は埼玉から日野の萱嶋先生のお宅まで長い道のりを通ったわけだが、何の若労も感じなかった。帰りに電車の中で、メンバーや先生の話をも反芻し「今度はあれを見てやろう、こういう実験をしてみよう」と、次にフィールドに出る時の目標や計画を立てたものだった。

その後談話会に顔を出した人の中から、現在日本を代表するクモ学の専門家がたくさん生まれている。このことも、この会の凄いところであるが、また、私のようにクモ中心の生活から離れた者にとっても、自然との接し方や自然を見る目など、人の生き方に関わるたくさんのお話を身に付けることができたことは確かである。

私は現在中学校に在職しているが、今の生徒たちの「理科離れ」や「理科嫌い」が盛んに言われている。しかし、元来子どもたちは自然に接することは大好きであり、今の子どもたちもそれは変わっていないと確信している。ただ、じっくり自然の中に浸れる場と時間がなくなっており、何か一つのことに熱中することが厳しくなっているのは事実である。

環境教育が声高に叫ばれる今こそ、我々が経験してきた野外での遊びや生活、植物や昆虫やクモなどをじっくり観察し発見する楽しさや喜び、仲間と共通のことに取り組んだり話し合ったりする充実感。こうしたものを意図的に子どもたちに伝えていかなければならない。また、萱嶋先生からごく自然のうちに教えていただいた、子どもや若者をその気にさせて育てる極意も発揮していかなければならないと思っている。それが、私自身が談話会で育てていただき、クモに接してきたことの許の一つだと考えている。授業を持たなくなった今、学校の私の部屋の廊下に、季節にちなんだテーマで掲示や展示をし、生徒が興味や関心を持って自然の中に目を向けられるような、小さな取り組みをしている。生徒が生き生きした目で、虫を持って私の部屋へやって来るのがとてもうれしいこのごろである。

昔はごく身近に観察できたゴミグモやカラスゴミグモ、ハツリグモ、そしてオニグモやジョロウグモでさえ減ってきている現状に危機感を感じているが、うれしいことに先日は校内でアシナガグモの網にシロカネイソウロウグモが数頭いるのを発見し、昔クモを見つけに野外を歩いていたときの感激を再び味わうことができた。こんな思いができることも幸せなことである。

私にとって東京蜘蛛談話会は人生の方向性を決めたといいても過言でない存在であり、いつか必ず、クモたちと親しく接する時間を持つことを自分自身の最大の楽しみにして、また、自然の中で生きていることを実感できる生徒たちを育てることを仕事上の目標にして歩んでいきたいと思っている。そのときのためにも談話会や「KISHIDAIA」の情報は大切にしていきたい。

東京蜘蛛談話会そして「KISHIDAIA」の益々の発展を心から祈念している。

談話会通信発刊のころの思い出

松本誠治

KISHIDAIA 発刊「30周年記念号」の企画に、「談話会通信発刊のころの思い出」との題で原稿作成のお誘いを受けましたので、キーボードに向うことにしました。

KISHIDAIA が創刊されたのが1969年1月ですから、その5年と10ヶ月後に談話会通信(以下、通信と略します)は作られたこととなります。会誌のKISHIDAIA(以下、会誌と略します)の発行に加えて、通信を作ろうとしたのは、発案者の私にはそれなりの理由があったからですが、当時運営委員の人たちや会員の方々がどのように思われていたか、25年も前のことですので、記憶が薄らんでいます。運営委員の中にはわざわざ出すことはないと言った人もいたと思います。そこで、当時の会員56名全員(1974年度会員名簿によっています)に意見を伺ったところ、40名からの回答があり、タイプ孔版の会誌だけでよいとする方が10名、ガリ版の連絡誌を発行してよいという方が18名いました。その他に、連絡誌の発行には触れずに、会誌の印刷をタイプ孔版よりよくするという方が2名、連絡誌を発行して会誌の印刷をよくするという方が1名、会誌をガリ版にするという方が8名、この件には無回答の方が1名いました。ここでガリ版というのは手書きの孔版印刷のことですし、印刷をよくするというのはタイプオフセット印刷か写植オフセット印刷、あるいは活版印刷を想定していたと考えられます。この結果を現在の会員の方々はどのようにみるでしょうか。当時の会員の方々に意見を伺ったのはこの他に、会誌や通信の発行回数、発送の頻度、発送形式、会誌・通信の名称、会誌・通信のページ数などでした。以上は、1974年9月7日付けの談話会通信アンケート集計結果によりますが、発案者としては、18名の意見を重要視して、1974年10月25日付で第1号を発行した次第です。その後は、12月24日、1975年1月17日、3月12日、5月10日、7月31日、9月13日、11月15日、とほぼ2ヶ月に1回の割合で1977年2月28日付けの第15号まで発行して、第16号からは編集・製版を田中理恵さんをお願いすることになりました。この第16号からは、発案者の手を離れたわけですから、談話会通信の歴史も第2期目に入ったと言えるでしょう。

第1号を発行したところ、近藤昭夫先生から「字の大きさや書体はこれでよいが、パンチでの穴開けが可能な程度に周辺の余白を多くしてほしい」「名称は談話会通信が最適。ニックネームは不要」「用語解説はクモ学分野でどのように適用されているかの解説を」「発行責任者を明確に」との意見を戴き、第2号では早速、余白を2cmと倍にしました。文字についてはいくら丁寧に書いても悪筆は改善できず、第16号の田中さんが書いてくれるまで、読みづらいままとなっていました。

[近藤先生といえば、昨年7月22日にご逝去の知らせを受けて以来、今もって気持ちの整理がつかず、追悼文も書けないままになっています。先生とは私が大学生の時に発生学実習を指導していただいたから、1996年11月9日、先生の還暦記念パーティでお会いした時まで、毎年何回かは会って、あれこれと指導を受けました。還暦記念パーティでは、クモの研究仲間として紹介していただき、当日急用で欠席された大学の先輩の代わりにお祝いの言葉を述べさせていただきました。近藤先生との関わりは、その一つ一つがかなり強い思い出となっています。]

どんなことでもと思いますが、何かを始める時はその情熱に任せて動き出すことはできますが、それを続けていくことはかなりの努力が必要かもしれません。通信の発行も同様だと思いますと、田中理恵さんを初め、通信の発行を引き継いで下さった方々の努力は大変なものと思っています。四半世紀経った今、通信の内容、体裁、発行頻度、その他を見直してみてもどうでしょうか。「×、×」の回答を葉書とするアンケートなら、多くの返信が期待できるようなと思います。だんだん本題から離れてきています。本題に戻って、これ以上「思い出」を書いても、紙面を無駄に使うばかりかもしれません。通信を出す意味は、全国にいる会員が如何に談話できるか、談話をしているという気持ちになれるか、通信を読んで「東京蜘蛛談話会の会員である」と実感できるかということだと思います。これは、談話会が会員数 56 名だった頃の、しかし、その時には既に全国組織となったことからの、そして、それでも「談話」会でありたいと思ったことからの気持ちです。

昭和 43 年 12 月 21 日 (KISHIDAIA 発行を決定した日)

新 海 栄 一

1999 年は KISHIDAIA が発行されて 30 年目の年になる。発行した 1969 年 (昭和 44 年) には、30 年後のことなど全く考えたことはなかったが、東京蜘蛛談話会も KISHIDAIA もずっと継続されているであろうこと、そしてこのメンバーが日本のクモ学会全体をリードしているであろうことだけは確信していた。

東京蜘蛛談話会は、1965 年 (昭和 40 年) 8 月 5 日に行われた東亜蜘蛛学会懇親会の席において、萱嶋先生が松本誠治さんと私に声をかけてくださったときから始まったといえる。この時、松本さんが大学 1 年、私が高校 2 年であった。翌月の 9 月 18 日、19 日にかけて私の高校の文化祭が開かれた。当時海城高校生物部では 1 教室全部をクモの展示に使っていたため、クモ班 4 名では手が足りず、松本さんに応援に来ていただいた。萱嶋先生のお宅に何う約束をしたのはこの折だったように記憶している。

11 月中旬、松本さんと二人で初めて萱嶋先生のお宅をお訪ねした。この日から 1981 年まで連絡係として、また談話会発足後は総務・会計として 16 年間事務局を担当した。

萱嶋先生、松本さん、新海の 3 名の談話会を始めて 3 ケ月目、「埼玉県の高校生がすごい研究をまとめている」と、萱嶋先生より原稿用紙数百枚にわたる研究報告を見せていただいた。この報告書は印刷発表されることはなかったが、その中には、後に KISHIDAIA 誌上で発表された新発見のクモの習性等が既に多数含まれていた。研究報告をまとめた大河内哲二さんは、東京農大に入学した 1966 年 (昭和 41 年) 4 月より会合に参加されるようになり、4 名となった。

4 名の時代は約 1 年半続いたが、その間、1966 年 8 月 25 日には太平洋学術会議に出席され

ていたニュージーランドのマーブルス氏，韓国の白甲耀氏歓迎会がダイヤモンドホテルで開催された．また 1967 年（昭和 42 年）6 月 1 日には正式に東京蜘蛛談話会を発足している．1967 年 12 月 26 日第 10 回の会合が開かれた．この日は以前より出席をお願いしていた宇都宮の浜村徹三さんが初めて参加され，カネコタテグモとエソタテグモ（浜村さんが雌の最初の発見者）の採集話，水田のクモに関する話題を持ってきていただいた．

1968 年（昭和 43 年）は談話会としての活動が大きく広がった年であり，会としての組織化を図る一方，今後の方向性を協議し決定する年となった．さらに東亜蜘蛛学会の大会開催を想定して，松本，大河内，新海の 3 名は，動物学会，昆虫学会，応動昆，動物分類学会などの大会に出席して運営方法を研究した．

4 月 13 日，植村利夫先生が校長をされていた都立城南高校において，初めての大規模な談話会を開催したが，これが現在の例会の原型となっている．当日の参加者は，植村利夫，八木沼健夫，篠原圭三郎，青木淳一，大野正男の諸先生から高校生まで 20 名であった．この日初めて出席し，後に談話会の中核となった方が国見裕久さんと新海 明の 2 人である．またこの年から会合にお客様が見えるようになり，1 月には沖縄の下謝名松榮先生，6 月には八木沼先生が参加されている．

1968 年の最大の活動は 10 月 4 日にご逝去された岸田久吉先生の文献の整理であった．萱嶋先生の指揮の下 10 月 26 日から 12 月 28 日までの各土曜日 8 回（11 月 23 日は休み，12 月 21 日は例会），練馬区東大泉の岸田久吉先生のお宅に伺って，膨大な量の蔵書の分類作業を行った．KISHIDAIA はこの作業中に岸田先生の蔵書目録を出すことを目的に，萱嶋先生より提案された話が元になっている．蔵書整理中の 11 月 16 日に玉川大学の小林久俊さんが新たに参加された．小林さんの例会への参加は卒業までの 1 年半と短かったが，後輩からは，権田重雄，石山鉄幸，田中理恵，松田まゆみ，加藤笑子，近藤恭子さんなど，多くの方が入会している．

蔵書整理が一段落した 12 月 21 日，萱嶋先生宅で談話会を行った．この例会は今後，会（組織）として活動していくため，運営方針と活動内容（採集会，例会，会誌，役職など）を決めた重要な会議で，会誌 KISHIDAIA の発行もここで決定している．KISHIDAIA は翌 1969 年（昭和 44 年）2 月 28 日に大河内さんによって第 1 号が発行された（当初 1 月中の発行を目指したため，表紙は 1969.1 となっている）．以来，多くの会員の努力で記念すべき 30 周年を迎えることができたことは，談話会創立者のひとりとして関係した皆様に厚く御礼申し上げたい．

なお，この昭和 43 年 12 月 21 日の例会には新たに 1 人の中学生が参加された．国見さんが学習院の文化祭に行きつけてきた小野展嗣さんであった．小野さんのその後の活躍を見ると，この KISHIDAIA 発行を決定した日は，二重の意味で談話会史上最も重要な日であったと，この原稿を書きながら思い起こしているところである．

いつかどこかで（４）編集，編集，また編集

小野展嗣

1969 年秋から暮れ

前の年の 10 月に岸田久吉先生が亡くなって、談話会がその蔵書や遺稿の整理にあたり、その縁でできたのが、この「キシダイア」という雑誌である。1969 年 1 月創刊。はじめは、岸田先生のご遺族が談話会にご寄贈下さった文献の目録や、埋もれていた貴重な原稿を載せていた。ガリ版刷りやタイプ孔版、あるいはオフセット印刷と、それぞれスタイルは不統一であったが、機関銃のように、ほぼ月刊誌のペースで発行されていった。配布先も少ないし、薄いものだったから、それが可能だったのである。編集者も毎回違っていた。当時、三羽鳥といわれていた、松本誠治、新海栄一、大河内哲二の大学生 3 人が飛ぶ鳥を落とす勢いで、高校 1 年のわたしは、おみそであった。ところが、それが、じつに当然という感じで、わたしにも順番がまわってきた。日本蜘蛛学会の第 1 回大会が開かれてまもなくの頃のことである。

渡された原稿は大河内さんの「奄美大島のクモ」1 編、それに自分で書き足して 4 頁にすればよいのである。表紙は別に刷りだめしてあるのがあった。といっても、右も左もわからない。当時わたしは、1 本足りない東京の目黒区五本木というところに住んでいた。祐天寺から歩いて 10 分ほどで、ちょっと行くと、世田谷区の下馬である。学校から家へ帰る途中にタイプ印刷の看板を出している店があった。店といっても、ほとんど、普通の民家の裏口という感じの構えだった。奥さんがタイプを打って、旦那さんが輪転機をまわす。典型的な家内工業。わからない方もおられると思うので、蛇足をつけると、当時は和文タイプライターという機械が存在し、こういう印刷所がたくさんあった。

自分の原稿は、ほとんど国語の作文をしているのと同じ感覚であった。人に読まれるのだからとガチガチになって、精一杯背伸びをして、いま考えるとおかしなことを書いているが、とにかく、クモのことについて、なにか出版物に書いたのはこれをはじめたかもしれない。原稿ができると、さっそく、その印刷屋さんに持ち込んだ。たしか 3 千円くらいだったと思う。印刷代が。それで、お任せしますといって、3、4 日して、出来上がったものを取りにいった。

うれしくて、家に帰って、ながめていると、何やら間違いが多い。1 頁に 20 箇所くらいのタイプミスがある。しょうがないなと思いつつ、萱嶋泉先生に提出した。しかし、そのあと、だんだん、これでいいのかなと思いはじめて、これは刷り直しだと決心するのにそう時間はかからなかった。決定的だったのは、大河内さんが「哲三」となっていたことである。そのときわたしは、印刷屋に原稿を持ち込めば自動的に印刷物が出来上がると思っていた。真っ赤に訂正を入れたものを持って、もう一度印刷所を訪れ、刷り直してもらった。わたしの責任だから、小遣いがすこし減ったことはいうまでもない。こうして出来上がったキシダイア刷り直しの 11 号を萱嶋先生のお宅に届けてほっと一息ついた。

世の中に、「校正」という作業があると知ったのは、この後のことである。

この年、クモのことにのめり込んでラグビー部を退部したことで担任の体育の教師ににらまれ

て、理科系への進学を阻まれたりしたので、よく覚えている年である。

1972年～1976年

三羽鳥が、就職や蜘蛛学会のほうの世話で忙しくなり、ふたたびキシダイアの編集の役目が回ってきたのは、33号、大学の1年のときであった。このころから、だんだん大河内さんは遠ざかっていき、談話会は実際には新海さんと松本さんのふたりが、切り盛りしていた。おふたりはそれぞれ竜・虎と称して張り合った。わたしは「高みの見物」というわけで、「鷹」と称した。編集のほうは、すこしは上達していた。それに、目白の「小山タイプ」という親切な印刷所と仲良くなっていた。いつもくわえ煙草のおじいさんとその娘さんの家内工業だが、わたしがもっていく原稿は上手な下請けのタイピストに出してくれた。

このころ、わたしたちは「昆虫と自然」のような商業誌をイメージしたこともあった。そういう雑誌の普及効果は絶大なのである。しかし、クモ研究者の数から原稿もそうはこない。毎号ペラペラなものが続いた。表紙だけは、すでに小澤實樹さんが描いて超一流になっていた。そうしたなか、38号のときにはじめて Dragline をつくった。短報なら、原稿がくるだろうと考えたからだ。それから、原稿がないのなら、頼んで書いてもらうという知恵もついた。それで、どうせならと八木沼健夫先生や、吉倉真先生にお願いしたら、すぐに書いて下さった。また、皆で集まってワイワイやっているときの噂話をそのまま記事にした「10大ニュース」は大いにうけた。

突然というべきか、ふしぎなことに39号、40号と、かるうじて雑誌かなと思われる厚さになり、それは今日まで維持されている。

1983年～

1976年の秋にドイツへ行くことになり、キシダイアの編集は熊田憲一さんにバトンタッチした。しかし、そのやりかたが、ぶっきらぼうだったらしい。熊田さんは、わたしのことを生意気な奴だと思ったのだろう。しかし、熊田さんの編集で、つぎつぎに楽しい記事が集まり、キシダイアは軌道にのったと思う。

わたしのほうは、日本語を忘れる数年が続き、この年に帰国した。博物館に就職して、蜘蛛学会にも直接関与する機会が増えるにつれ、編集の仕事を依頼されることが多くなった。松本さんと二人三脚で編集した *Atypus* や、その「100号廃刊」に立ち合ったこと、*Acta arachnologica* の改革など、蜘蛛学会の会誌のことは、別のところで、詳しく書くつもりなので、ここでは、省略するが、編集に関してはいろいろな思い出や事件がある。

わたしに活字印刷による編集、印刷上のさまざまなテクニックを教えてくれたのは、上野俊一先生である。今は退官されてしまったが、数年前までは直接の上司でもあったので、なかば、業務命令としているいろいろたたきこまれた。上野先生は、印刷所へ出向いて、そのひとつひとつの工程をすべて自分の目で確認し、どの工程にどれだけ手間がかかるか承知した上で、仕事を依頼する。印刷屋のほうはいいわけがきかないから、たまったもんじゃないが、そうやって、印刷屋さんとの信頼関係を築いていくわけである。誤植がなくてあたりまえ、発行期日は絶対守る、活字をひとつひとつルーペで拡大し、角がかけた活字は容赦なく取り替えさせる。論文の内容も含め

て、掲載と体裁は全部編集者の責任というのを信条とされている。わたしもまったく同感だが、実践には並大抵の体力では挑めない。

1998年11月

しかししかし、その活版印刷さえも、もう古くなってしまった。蜘蛛学会誌では、最後の最後まで頑張ったが、コンピューターによる技術革命が起きて、電算写植印刷が主流となり、活字はあっという間に消滅してしまった。長所短所があるが、写植では活字や図版の醸し出す「味」はなかなか出せない。そう感じるのは、LPレコードを懐かしむようなものである。いまでは、キシダイアも学会誌も、原稿から印刷までパソコンによっている。

こうして考えると、キシダイアも創刊以来あっという間の30年だったが、その間には、ガリ版刷りや和文タイプ孔版から始まって、電算写植にいたる、印刷技術のめまぐるしい変遷のなかを生き抜いてきている。それを支えてきたのが、クモ研究者の地道な観察によるものであることは、うれしいことである。

現在、たとえば、国際クモ学会では、「印刷物」のやりとりを、紙と郵便に依らずにやろう、ということを検討している。いまや電子メールをつかって、技術的には瞬時に世界中に情報を発信できるのである。キシダイアもひょっとすると、近い将来、テレビ画面と端子さえあれば、世界中の人が読める時代になるかもしれない。ガリ版刷りから30年でこうなったことを考えれば、机上の空論でもないであろう。それに、紙を使わなければ、資源の保護になるかもしれない。木を切らなければクモが増えるかもしれない。もっとうれしいことである。

東京蜘蛛談話会の活動記録

(1966 ~ 1999)

新 海 明

東京蜘蛛談話会が発足して今年(1999)で33年余りになります。設立当初の様子などはKISHIDAIA にたびたび書き留められていますが、それらは断片的なものでした。活動を支えていた往年の学生メンバーもすでに五十の峠を越す年齢になろうとしています。このあたりできちんとした活動の記録を残しておかないと、談話会の歴史の一部は永久に判らなくなってしまうおそれがあります。ここでは、KISHIDAIA や通信、そして設立当初の会員諸氏から知り得るかぎりの情報を集めて談話会の活動記録をまとめてみました。

1966年 東京日野市にある萱嶋泉宅にて「談話会」が始まる。設立当初の参加者は萱嶋泉、浜村徹三、大河内哲二、新海栄一、松本誠治の5名。1966年から70年までにおよそ50回ほど(k14に記事)開催された(新海栄一 私信)。この間に有志による採集観察会(東京都日原、養沢、高尾山など)が数回開催された(新海栄一 私信)。

1968年 都立城南高校(校長植村利夫)にて、「東亜蜘蛛学会」と「談話会」との合同の集会在開催された(4/13)(新海栄一 私信)。

岸田久吉先生逝去(10/4)。蔵書整理の傍ら「談話会」が開かれ、先生の蔵書目録と遺稿を残すために「KISHIDAIA」を発行することになった(k1)。

1969年 KISHIDAIA 創刊。当初は月刊の手書孔版パンフレット(松本 私信)であった。

1970年 第1回の例会が目黒区の大橋区民会館で開催された。

1971年 第1回の採集観察会が八王子市の滝山城址で実施された。

第1回の合宿が千葉県清澄山で実施された。

1972年 第1回の合同例会(クモ・ダニ・多足類)が目黒大橋区民会館で開催。

1974年 談話会通信1号発行。

1977年 採集会が年間を通して同じ場所で実施されるようになった。

1989年 合宿(愛知)を中部蜘蛛懇談会と共催。これ以後、関東周辺以遠の合宿が実施されるようになった。

KISHIDAIA 発刊20周年記念号発行。

1999年 KISHIDAIA 発刊30周年記念号 , 発行。

(1) 採集会・合宿・総会例会の記録

日付横の k 番号は KISHIDAIA の号数を，通番号は通信の号数を示す．* 印はリストなど未発表のもの．採集会・合宿の地名横の () 内は担当者を示す．

採集会	合宿	例会など	合同例会
1969 年			
4/29 k5 (第3回採集会との記載あり．これはそれ以前の有志で行なわれた採集会を含めての回数の中で，その後公式上は71年の滝山城址を第1回とすることになったという)(新海栄一・松本 私信)			
1970 年			
		東亜蜘蛛学会の例会が大阪で開催され(8/23)14名の会員が参加した．k19 第1回例会(目黒区大橋)11/29 k22	
1971 年			
第1回採集会 東京都 滝山城址(談話会)5/23 k29 ~ 32	第1回合宿 千葉県 清澄山(談話会)8/4 ~ 6 k29 ~ 32 埼玉県 奥秩父(談話会)8/16 ~ 18 k29 ~ 32	開催されず k29 ~ 32	
1972 年			
東京都 杏林大学周辺* 5/28 新海栄一・梅林 私信	神奈川県 箱根* 7/29 ~ 31 新海栄一 私信 長野県 美鈴湖(途上事故で一部不参加)k34 千国・梅林・大利の3氏で実施 8/25 ~ 26 k37	例会 3/26 k34	第1回合同例会(同上) 12/24 梅林 私信 k35
1973 年			
神奈川県 飯山観音*(山川) 10/10 k37		実施せず 新海栄一 私信	12/27 k38
1974 年			
東京都 八王子城址*(談話会)5/12 k38, 39 通 番外 5/13 付	山梨県 富士山*(談話会有志)8/3 ~ 6 通 番外 9/7 付	実施せず 新海栄一 私信	12/22 k39
1975 年			
神奈川県 丹沢 ヒジリ峰(栗原)5/18 k40 東京都 滝山城址(新海栄一) 10/10 k40	山梨県 富士山(小野) 8/16 ~ 19 k40	6/15 通5	12/7 通9
1976 年			
神奈川県 日向薬師・広沢寺(高橋登)5/16 k41 千葉県 八柱 霊園(権田) 10/10 k41	静岡県 天城・石廊崎(新海栄一)8/2 ~ 4 k42	6/13 通12	12/26 通14 標本同定会(同上)第1回 2/29, 8/15 通10 通13

採集会	合宿	例会など	合同例会
1977年			
東京都 八王子城址(新海栄一他) 7/31, 10/9, '78 2/26, 5/12 k43		6/26 通17 標本同定会(同上) 4/10 通16	12/25 通21
1978年			
埼玉県 巾着田(嶋田・田中) '77 5/15, '78 4/16, 7/30, 10/8, '79 2/18 k45	群馬県 妙義山*(新海栄一) 8/5~7 通23	6/18 通23	12/24 通25
1979年			
神奈川県 城山(根小屋) (高橋登・松浦) 5/13, 7/29, 10/10, '80 2/27 k46	埼玉県 秩父*(新海栄一) 8/4~6 新海栄一・梅林 私信	6/24 通27	12/16 通27
1980年			
東京都 高尾山(新海栄一・蓮沼) 5/11, 7/27, 10/10, '81 2/23 k50	山梨県 富士山*(?) 8/1~3 梅林 私信	6/15 通32	12/21 通33
1981年			
埼玉県 天覧山(嶋田・鈴木勝) 5/10, 7/26, 10/18, '82 2/21 k51	群馬県 赤城山(林) 8/7~9 k48	6/7 通34	12/20 通36
1982年			
神奈川県 神武寺*(熊田) 5/16, 7/25, 10/17, '83 2/20 通37~40	静岡県 天城山(熊田・加藤輝代子, 以下加藤輝) 7/30~8/1 k55	6/6 通38	11/28 通40
1983年			
東京都 広徳寺(熊田・加藤輝) 5/15, 7/24, 10/16, '84 2/19 k54	神奈川県 箱根(熊田・加藤輝) 7/29~31 k55	4/17 通42	12/4 通44
1984年			
神奈川県 枅形山*(松浦) 5/13, 7/15, 10/14, '85 2/17 通44~48	千葉県 内浦山(浅間) 7/28~30 k55	4/15 通45	11/11 通48
1985年			
神奈川県 高麗山(池田) 5/12, 7/14, 10/13, '86 2/16 k54	長野県 安曇野(熊田・千国) 7/27~29 k57	4/14 通49 標本同定会 3/24, 9/8 通49 通51	11/24 通52
1986年			
山梨県 扇山*(松浦) 5/25, 7/6, 10/12, '87 2/15 通54~57	山梨県 丹波山*(井上) 7/26~28 通55	5/11 通55	12/7 通56
1987年			
神奈川県 丹沢大倉(笹岡) 5/17, 10/18, '88 2/21 k58 (7月の観察会は合宿として実施)	神奈川県 丹沢大倉(井上・稲葉) 7/25~27 k58	6/14 通60	11/15 通61

採集会	合宿	例会など	合同例会
1988年			
東京都 町田市 野津田(谷川・熊田) 5/22, 7/24, 10/23, '89 2/19 k63	神奈川県 真鶴半島(池田) 7/30~8/1 k59	6/12 通63	11/20 通65
1989年			
東京都 八王子城址(新海明) 5/21, 7/16, 10/22, '90 2/18 k61	愛知県 足助町(板倉) 7/29~31 k60	4/23 通66	11/26 通68 駒場住区センターへ (キシノウエトタテグモ探蛛会 6/17) 通66 k59
1990年			
神奈川県 神武寺(熊田・谷川) 5/20, 7/22, 10/21, '91 2/17 k63	長野県 白馬*(新海栄一・貞元) 7/28~30 通69・70	駒場住区センター 4/22 通69	11/25 通71
1991年			
埼玉県 巾着田(平松) 5/19, 7/14, 10/13, '92 2/16 k64	福島県 裏磐梯(新海明・蓮沼) 7/27~29 k67	4/28 通72	12/1 通74
1992年			
東京都 五日市 横沢入(笹岡・新海栄一) 5/17, 7/19, 10/18, '93 2/21 k64	静岡県 雲見(新海明・高橋祐子) 7/25~27 k69	4/26 通75	12/6 通77
1993年			
神奈川県 飯山観音(木村・高橋祐子) 5/16, 7/11, 10/17, '94 2/27 k71	三重県 熊野(新海明) 7/24~26 k69	4/25 通78	12/5 通80 (だんわ会清澄山 6/26~27 通78)
1994年			
埼玉県 西吾野(平松) 5/15, 7/10, 10/16, '95 2/19 k73	神奈川県 丹沢 寄(池田) 7/23~25 k71	4/24 通81	12/11 通83
(だんわ会 銀座 3/28 通80, 見沼 7/3, 銀座 8/29 通81)(だんわ会講演会 11/20)			
1995年			
東京都 田無(東大演習林) (笹岡・宮下) 5/14, 7/9, 10/15, '96 2/18 k73	高知県 夜須町*(平松) 8/5~7	4/23 通84	12/3 通86 (だんわ会映写会 12/10 通85)
1996年			
神奈川県 三浦半島 小網代(安田・谷川) 5/19, 7/14, 10/20, '97 2/23 k73	茨城県 常陸大子(笹岡) 8/4~6 k73	4/28 通87	12/1 通89 (だんわ会 見沼 10/10 通88)
1997年			
千葉県 船橋民の森*(貞元他) 5/18, 7/13, 10/19, '98 2/22	沖縄県 名護市(新海明他) 7/25~28 k74	4/20 通90	12/7 通92
1998年			
埼玉県 飯能市天覧山*(平松) 5/17, 7/12, 10/18, '99 2/21	埼玉県 秩父周辺*(新海明他) 7/25~27	4/26 通93	12/6 通94

(2) KISHIDAIA と談話会通信の発行年の記録

号数横の()内は編集担当者を示す.

KISHIDAIA (1969年創刊)	談話会通信 (1974年創刊)
1~9号までは手書孔版. 10~40号までは タイプ孔版. 41号以降はオフセット印刷.	1~58号までは手書き, 59号からはワープロ編集.
1969年	
1(大河内), 2(松本), 3(新海栄一), 4(大 河内), 5, 6(新海栄一), 7(松本), 8, 9(大 河内), 10(萱嶋), 11, 12.	
1970年	
13, 14, 15, 16/17, 18, 19(以上大河内. ここまでは特に編集者は定めなかった. 番号 に続く名前は作成者.), 20/21(この号から 編集者定める.) 松本私信	
1971年	
22, 23/24, 25, 26~28,(以上大河内)	
1972年	
29~32(新海栄一・松本), 33(小野), 34(松 本・小野).	
1973年	
35(松本・小野), 36, 37.	
1974年	
38	番外5/13, 番外5/14, 番外9/7, 1, 2
1975年	
39, k1~39 総目次 熊田氏による手書孔版, 3, 4, 5, 6, 7, 8. 6pp 松本私信	
1976年	
40,(以上小野)	9, 10, 11, 12, 13, 14.
1977年	
41(熊田・山川), 42.	15(以上松本), 16, 17, 18, 19, 20.
1978年	
43	21, 22, 23, 24, 25.
1979年	
44,(以上熊田)	26(以上田中), 27, 28, 29.
1980年	
45.	30, 31, 32, 33.
1981年	
46(以上嶋田), 47(新海栄一).	34(以上松浦), 35(熊田代行), 36.
1982年	
48(貞元), 49.	37, 38, 39.
1983年	
50.	40, 41, 42(熊田代行), 43.
1984年	
51	44, 45, 46, 47, 48(以上鈴木勝).
1985年	
52, 53,(以上嶋田)	49, 50, 51, 52(以上井上代行).

KISHIDAIA	談話会通信
1986年	
54.	53, 54, 55, 56.
1987年	
55.	57, 58 (以上鈴木勝), 59, 60.
1988年	
56 (以上熊田), 57.	61 (以上, 板倉), 62 (熊田代行), 63, 64.
1989年	
58, 59.	65, 66, 67.
1990年	
60.	68, 69, 70.
1991年	
61, 62.	71, 72, 73.
1992年	
63, 64.	74, 75, 76.
1993年	
65.	77, 78, 79.
1994年	
66 (以上谷川), 67.	80 (以上池田), 81, 82.
1995年	
68, 69.	83, 84, 85.
1996年	
70.	86, 87, 88.
1997年	
71 (以上木村), 72.	89, 90, 91.
1998年	
73, 74, 75 (以上木村・池田継続中).	92, 93, 94 (以上笹岡継続中).

(3) 東京蜘蛛談話会の役員と会費の記録

役員などの初期の記録はまったく不明であったが、幸い新海栄一氏と梅林力氏が保管していた総会の記録や会計報告から、当時の状況が判明した。

1974年以降は談話会通信や KISHIDAIA に掲載された記録によった。

	代表 会長	総務 事務局	運営委員	会計	会計監査	会費
1966年	萱嶋泉	66～71年までは特に役員などは定めていないが、連絡係は新				なし
1967年	(代表)	海栄一氏が担当。運営には大河内哲二氏と松本誠治氏が係わった。				なし
1968年		さらに、69年からは国見裕久氏と小野展嗣氏が加わった(新海				なし
1969年		栄一私信)。				400
1970年				大河内哲二	新海栄一	500
1971年				大河内哲二	?	500
1972年	萱嶋泉	大河内哲二	石山鉄幸・大河内哲二	大河内哲二	梅林 力	500
1973年			小野展嗣・国見裕久 権田重雄・新海栄一 松本誠治		熊田憲一	700

	代表 会長	総務 事務局	運営委員	会計	会計監査	会費
1974年	萱嶋泉	松本誠治 (事務局)	石山鉄幸・大河内哲二 小野展嗣・国見裕久 権田重雄・新海栄一 松本誠治	松本誠治	梅林 力 熊田憲一	700
1975年	萱嶋泉	新海栄一 (同上)	萱嶋 泉・熊田憲一 栗原輝代子・権田重雄	新海栄一	福本伸男 大河内哲二	700 1000
1976年			嶋田順一・新海栄一			1500
1977年			高橋 登・田中理恵 松本誠治・山川 守			
1978年	萱嶋泉	新海栄一 (総務)	萱嶋 泉・熊田憲一 栗原輝代子・権田重雄	新海栄一	大熊千代子 国見裕久	1500 2800
1979年			嶋田順一・新海栄一 高橋 登・田中理恵 蓮沼克巳・松浦祐司			
1980年	萱嶋泉	新海栄一 (事務局)	萱嶋 泉・国見裕久 熊田憲一・栗原輝代子	熊田憲一	大熊千代子 小澤實樹	2800
1981年			貞元己良・新海栄一 鈴木勝浩・高橋 登 蓮沼克巳・松浦祐司			
1982年	萱嶋泉	加藤輝代子	萱嶋 泉・国見裕久 加藤(栗原)輝代子	高橋 登	小澤實樹 林 俊夫	2800
1983年			貞元己良・嶋田順一 鈴木勝浩・高橋 登 蓮沼克巳・堀越雅弘 松浦祐司			
1984年	萱嶋泉	松浦祐司	萱嶋 泉・国見裕久 加藤輝代子・小池牧子	小池牧子 井上房枝	小澤實樹 林 俊夫	2800
1985年			嶋田順一・鈴木勝浩 高橋 登・蓮沼克巳 林 秀行・松浦祐司			
1986年	萱嶋泉	松浦祐司	萱嶋泉・国見裕久 加藤輝代子・小池牧子	小池牧子 井上房枝	小澤實樹 林 俊夫	2800
1987年			嶋田順一・鈴木勝浩 高橋 登・蓮沼克巳 林 秀行・松浦祐司			
1988年	萱嶋泉	熊田憲一	池田博明・板倉泰弘 小野展嗣・熊田憲一	熊田憲一	林 俊夫 松浦祐司	2800
1989年			笹岡文雄・新海 明 高橋 登・谷川明男 萩本(井上)房枝			
1990年	萱嶋泉	熊田憲一	池田博明・板倉泰弘 小野展嗣・熊田憲一	熊田憲一	加藤輝代子 松浦祐司	2800
1991年			笹岡文雄・新海 明 高橋 登・谷川明男 萩本房枝・稲葉茂代			

	代表 会長	総務 事務局	運営委員	会計	会計監査	会費
1992年 1993年	萱嶋泉	熊田憲一 谷川明男 代行	池田博明・稲葉茂代 小野展嗣・木村知之 熊田憲一・笹岡文雄 新海 明・高橋 登 高橋祐子・谷川明男 萩本房枝・平松毅久	熊田憲一 谷川明男 代行	加藤輝代子 鈴木成生	2800
1994年 1995年	萱嶋泉	平松毅久	池田博明・稲葉茂代 小野展嗣・木村知之 久保田克哉・笹岡文雄 高橋 登・高橋祐子 谷川明男・萩本房枝 平松毅久・安田明雄	平松毅久	笠原喜久男 鈴木成生	2800
1996年 1997年	萱嶋泉 (会長)	平松毅久	池田博明・小野展嗣 木村知之・久保田克哉 笹岡文雄・高橋 登 佐々木(高橋)祐子 谷川明男・萩本房枝 平松毅久・安田明雄	安田明雄	笠原喜久男 鈴木成生	2800
1998年 1999年	萱嶋泉	平松毅久	池田博明・小野展嗣 木村知之・久保田克哉 笹岡文雄・高橋 登 佐々木祐子・谷川明男 萩本房枝・平松毅久 安田明雄	安田明雄	笠原喜久男 鈴木成生	2800

(4) 会員数の動向の記録

初期の会員数は KISHIDAIA 中の記載や梅林 力氏の手元に残されていた会員名簿から調べたものである。82 年以降は原則として会計報告の記載や総会資料によった。発足当初と 1972・73・81 年だけはどこからもその情報を得ることはできなかった。

1966～1969年 6名 k1	1980年 115名(会員名簿)	1990年 129名 通69
1970年 31名 k18	1981年?	1991年 145名(総会資料)
1971年 44名 K25	1982年 120名 通38	1992年 158名(総会資料)
1972年 1973年?	1983年 112名 通42	1993年 178名 通78
1974年 56名(会員名簿)	1984年 108名 通45	1994年 188名 通81
1975年 65名(会員名簿)	1985年 113名 通50	1995年 201名 通84
1976年 70名余り k42	1986年 118名 通56	1996年 209名 通87
1977年 79名(会員名簿)	1987年 122名(会員名簿)	1997年 207名 通90
1978年 95名(会員名簿)	1988年 120名(総会資料)	1998年 201名 通93
1979年 110名(会員名簿)	1989年 121名 通66	1999年

<活動の記録をまとめてみて感じたことを以下に記す>

談話会はいつ始まったのか

私はk1(1969)に記されていた「東京クモ談話会が誕生して2年になる」という記録に基づき発足年は1967年と思っていたのだが、設立当初からいた会員によると談話会の発足はその前年の1966年だという。当時はまさに「談話会」であつたらしく記録は個人のノートに記されていただけだったようだ。

ことほどさように、設立からの数年間の記録はほとんど不明であった。しかし、1974年から「談話会通信」が発行されるようになると事情は一変する。ここに記された活動の記録からKISHIDAIAからだけでは読み取れなかった情報が次々と明らかになった。「通信」の存在の大きさを知った次第である。どのような活動でもここに記す必要があると改めて思った。

会員数の動向と会計報告

この記録などは別にあってもなくても構わないものかもしれない。しかし、談話会の活動のひとつの目安になるかもしれないので興味があった。だが、いざ調べだすと難渋を極めた。確か例会で毎年会員数の動向が発表されていたと記憶していたのだが、完全ではなかった。例会・総会の記録は可能ながざり「通信」に掲載したほうがよいと思う。せめて会計報告の中に「会費×会員数」の記載くらいは記しておくとういだろう。当然のことながら会計報告は毎年「通信」に記す必要がある。会計報告がない年が数年間あるのを今回発見した。

役員の一覧と規約の掲載

役員と編集委員の一覧表はKISHIDAIAの各号の巻末にでも掲載しておくとういだろう。同じく、規約の掲載も必要だと思った。これは毎号載せなくてもよいが、2~3年に一度くらいは記したほうがよいだろう。現在の会員の中には「規約なんかあったの?」と思っている方が多いのではなからうか。これはこれでとても良いことだとは思うのだが。

活動記録の報告

当たり前のことなのだが、採集会や合宿、総会・例会などの活動の記録は「通信」やKISHIDAIAを通じて発表せねばならないだろう。今回まとめてみて、それらの記録が発表されていないものがかかなり多くあることが分かった。特に、採集会と合宿の記録は我々の活動の根幹をなすものであるから必ず報告せねばなるまい。実際には、その負担は担当者に多くかかるので、担当者は複数であるほうが少しは楽になるだろう。担当者の苦勞はよくわかるが、遅れてもよいから採集したクモの記録は是非残すようにしたいものだ。

その他

初期のKISHIDAIAや通信を読んでいると、当時の担当者たちの熱気が伝わってくるようだった。失礼な言い方かも知れないが記事そのものの内容はあまりたいしたことはないかも知れない。だが、面白がって雑誌を創っていることがよくわかった。クモに対する疑問、研究の方法、珍品の採集の報告など会員の情熱は今の談話会にはないものを感じた。時代が移れば変化するのは当然ではあるが、過去の談話会に学ぶべき点も数多くあると思う。私はいつも談話会は老若男女がそろい、いろいろなタイプの研究者が集う場として存在して欲しいと願っている。珍品ばかり狙う人、写真家、グッズ収集家、「クモ研究者」を観察する人、そして、分類学、生態学、発生学などの専門家の人達がいまって、より実り多いクモの研究が進展して欲しいと思う。アマチ

ユアはプロの知識や方法を，プロはアマチュアの情熱と情報をうまく活用しあう場所として談話会がさらに飛躍してもらいたいと願っている．

謝辞

本稿をまとめるにあたり，梅林力・新海栄一・松本誠治の各氏には談話会設立当初からのさまざまな情報をお寄せいただいた．これらの方々のご協力なしにはこの記録は完成できなかった．ここに御礼申し上げる．

オオクマヒメドヨウグモの生態観察

泉 宏 子¹⁾

Observations of Habits of *Dyphia okumae*

Hiroko Izumi

1998年2月22日の船橋県民の森での観察会で、オオクマヒメドヨウグモ *Dyphia okumae* が多数見つかりましたが(平松 1998),その後5月に千葉市若葉区中野町の自宅から1km程離れた雑木林にも、多数生息しているのを見つけました。そこで、この1998年11月までの野外観察・飼育観察でわかったことを報告します。

1. 生息環境

やや暗い林の中の地面から15cm位の低い位置で、杉の枯れ葉やキヅタなどの下草の間に網を張っている。大部分の個体が上に葉が覆っていない場所を選び網を張っている。狭い場所にまとまって生息しており、1頭がいるとその近辺30cm程の所にもう1~2頭いることが多い。

2. 網

直径5~6cmの斜めの円網だった。雄の成体では円網は張らず、わずかな糸で不規則網を作る。



写真1. オオクマヒメドヨウグモと円網



写真2. 卵囊

1) 〒265-0051 千葉市若葉区中野町 241

3. 卵嚢と卵数

野外では確認できなかったが、飼育していたうちの3頭が、いずれも1回ずつ産卵した(5月下旬・6月上旬・7月下旬)。卵嚢は飼育容器に入れてあった杉の枯れ葉や不規則網の途中に造っていた。直径3~4mmの球形で、クリーム色の卵を白い糸でふんわりと包んでいる。3個の卵嚢の卵数は12~31個だった。いずれの個体も未交配であったのか、フ化しなかった。

4. 成体出現期

2月に船橋県民の森から採ってきた1亜成体が3月下旬に雄の成体になり、4月下旬に死亡した。自宅近くの林では、観察を開始した5月中旬から7月下旬まで雌成体が確認された。(最も多かった日は6月上旬に25頭)。雄成体は、5月下旬に雌の網に采っていた1頭をようやく確認したのみであった。尚、この雄は飼育下で6月下旬に死亡した。

以上のことから、成体出現期は3月下旬~7月下旬と推測する。なお、8月になり野外では雌成体は見られなくなったが、飼育していた雌(7月下旬に1回産卵した個体)は、8月15日まで生存していた。

5. 幼体出現期

7月下旬から、林内ではフ化して間もないと思われる幼体が見られた。

6. 習性

網のこしきにとまっているクモに指で触れるとすぐ下に落ち、間もなく(遅くとも1分以内に)こしきの所に戻ってくる習性がある。

7. 体色変化

野外では朱色をしている個体ばかりであったが、飼育していると、どれも腹部が黒色になっていった。餌としてセスジユスリカを与えていたのだが、これを与えないうちは体色変化をしなかった。この体色変化は餌によるものと考えられた。野外の生息場所ではヤブカが多く、セスジユスリカは見られなかった。また、いったん黒化すると、その後はヤブカを与えていっても色は変わらなかった。



写真3. 右: セスジユスリカを与え続けた個体 左: 餌を与える前の個体

8. 考察および今後の課題

体色変化については、以前ホシミドリヒメグモを飼育していたとき、セスジユスリカを与える
と体色がやや黒くなったことがあったが、そのときは他の餌にするとまた元の体色にもどった。
セスジユスリカ自体は黄緑色をしており、黒くはないのだが、これを食べるとクモの体色が黒化
するのは興味深い。

7月下旬に採集して飼育を続けている1幼体が11月までに2回脱皮し、2mm近いサイズに
なった。2月下旬に亜成体でいたことから考えて、年1化性のクモと思われる

野外での観察期間が5月半ばからであり、雄が1頭しか見つかっておらず、交接も見られな
かったので、交接時期についてはっきりしない。卵嚢も何度も探しに行ったが見つからなかつた
ので、どのようなところに産卵するのか是非解明したい。また、局所的に発生するクモかどうか
など、その他の詳しい生態について今後も継続して観察していきたい。

参考文献

平松毅久, 1998. 船橋県民の森にオオクマヒメドヨウグモ. *Kishidaia*, (75): 24 - 25.

トゲグモの卵のうと越冬

加藤 むつみ

The Second Instar in Egg Cocoon of *Gasteracantha kuhi* in Winter

Mutsumi Kato

1995年から1998年にかけてのトゲグモの飼育（継代飼育ではない）と、野外での卵のう観察によって、トゲグモがクサグモなどと同じように、卵のう内で幼体越冬をすることを観察できたので報告する。

材料と方法

観察・飼育材料には1995年10月22日と11月18日および1997年3月20日に丹沢（神奈川県松田町寄）において、また1997年12月10日に丹沢（神奈川県秦野市大倉）で、さらに1996年10月6日に奥多摩（東京都あきる野市五日市）で採集した卵のうを用いた。採集時には前の4個には幼体が多数はいっており、後の1個に卵が2~3個あった。飼育方法は、「トゲグモの成長に伴う形態変化と脱皮型の変化」（加藤1997）と同じである。また平行して、同地域での卵のうの観察を断続的に行った。

結果と考察

トゲグモの卵のう（図1）は樹幹表面に産みつけられ、外観は地衣類に似ていた。卵のうの外観は、母グモの体調・その他の原因、および風雨にさらされた年月で多少変化する。しかし、比較的新しい標準的なものは、卵を包む白い糸球の部分とそれをカバーするモスグリーンの少々密な部分とからなり、その上に白っぽい糸が荒くかけられていて図1のような外観を作り出していた。このような見つけづらい外観の卵のうが、葉でなく樹幹表面に産みつけられることが、卵のうの長期の維持を可能にしているものと思われた。



図1. 卵のうの外観図（加藤1996より）

飼育下およびフィールドで観察されたトゲグモの季節的生態をまとめたものが、図2である。飼育下の産卵日は8月24日、9月1日、9月2日、9月5日、9月15日、10月6日、10月10日、10月16日、10月29日であった。ふ化は、97年度産で成長した1個体の産卵した卵のうちのみで少数確認したが、他は未交配その他の原因でふ化したものがなく、今後の検討が必要である。

また、10月22日、11月18日、3月20日に丹沢(松田町寄)および12月10日に丹沢(秦野市大倉)で採集した卵のうちには、腹部背面黒地に白い十字架を持つ幼体が存在していた。さらに10月6日に、奥多摩(あきる野市五日市)で採集した卵のうちには、剥がれかかった状態のもので、中に2~3個の卵が残されていた。そのため育つと思えず、詳しい観察記録を残していないが、後に1匹が幼体になったことを記憶している。後にふ化した幼体が卵のう内の脱皮以前に黒化しないことも観察した。卵のう内の脱皮殻の存在および色で1令か2令を判断できるとす

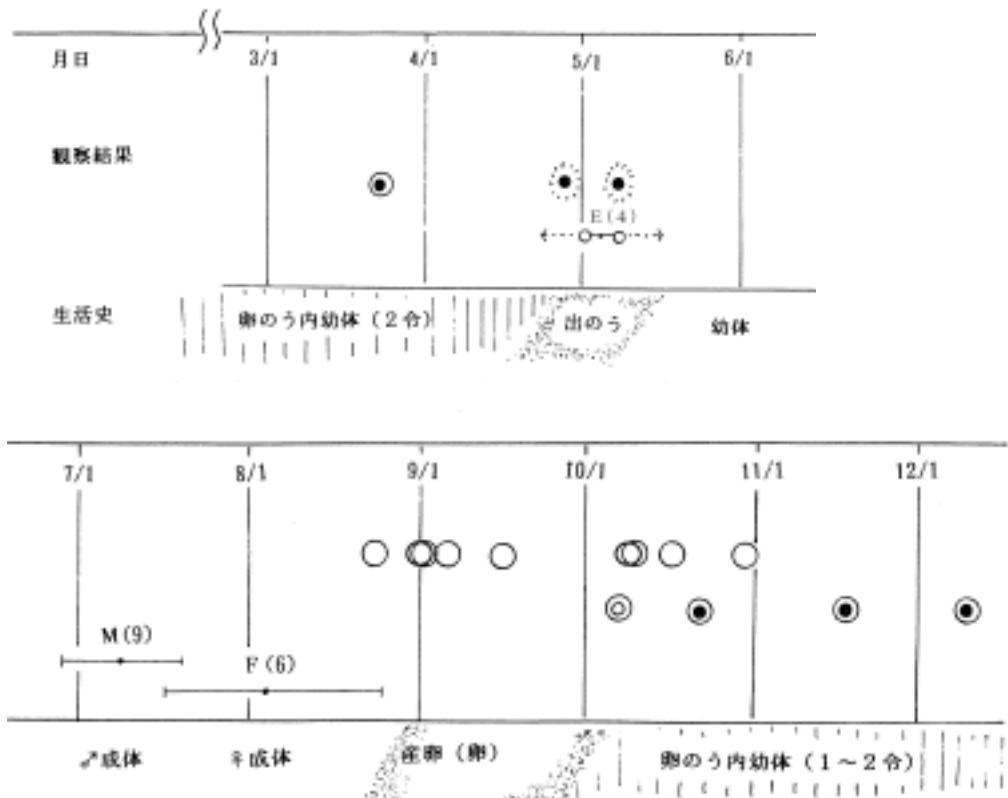


図2. ○ : 飼育下の産卵日. ● : 卵のうの採集日で中に卵があるもの. ⊙ : 卵のうの採集日で中に幼体があるもの. ⊕ : 野外において触ると幼体が出るような卵のうを観察した日. Eは出のう日(直線は最も早い出のう日, 平均日, 最も遅い出のう日を表す. 点線の幅は平均日の前後に平均出のう期間23日間を足したもの). Mは雄の成体脱皮日(最も早い日, 平均日, 最も遅い日. N=9), Fは雌の成体脱皮日(最も早い日, 平均日, 最も遅い日. N=6).

ると、10月22日、11月18日、12月10日、3月20日の卵のう内には2令幼体が出たことになる。

つまり、この結果からトゲグモは、8月下旬から10月にかけて産卵し、その後早々に卵のう内で脱皮していることになる。憶測になるが、トゲグモの生息地の状況から考えて、産卵は遅くとも10月の始めまでになるのではないかと考える。

室内で出のうは4個の卵のうにおいて観察したが、最初の幼体が出てから最後の幼体が出るまで長いものでは1ヶ月を要した。出のう日を判断しづらいので、最も出のう数が多い日を出のうピークとすると、4個の平均の出のうピーク日は5月4日(±3日)となった。さらに平均23日の出のうに要する日数を考慮して、実際に野外で幼体が出のうする日を予想すると4月24日から5月15日の間ということになった。

出のうに関して野外では、1998年の4月29日には松田町寄において、5月9日には大倉において、触るとすぐ出のうする少数の幼体が残された卵のうを確認した。大倉においては、この日他に2個の卵のうを採集したが、出のう済みだった。

このことから室内のような刺激の少ない飼育環境では、出のうは、少々遅れ気味にガラガラ行われる可能性があるが、ここで予想した出のう日と野外のものはそれ程大きな差がないことを示していると思う。

さらに1998年8月5日現在、飼育下3年間で成体になった雄9匹・雌6匹に関して、成体になった平均日を調べると、雄は7月8日(±11日)、雌8月3日(±18日)ということもわかった。

これらの結果から、トゲグモの一年間の生活史は図2下段のようになると考えられた。つまり、5月の始め頃、出のうした子グモは、雄は2ヶ月、雌は3ヶ月を要して成体になり、10月位までに産卵する。産みつけられた卵はふ化した後、卵のう内で脱皮し、幼体は翌年の5月までの7~9ヶ月間をその中で過ごすことになる。

謝辞とあとがき

トゲグモの野外調査には、工藤泰恵さんと笠原喜久雄さんにおつきあいいただいた。本当に心から感謝している。

さて、関東においてトゲグモは決して個体数の多いクモではない。これらのクモの生息調査は、悪意のない学問的なものであっても、調査そのものが淘汰圧として働く場合があると考えられる。そのために、彼らが生息していた証しになり、且つトゲグモの負担にならないような証拠として、空の卵のうを用いられないかと考えて、この文を書いた。

参考文献

加藤むつみ、1996。トゲグモの卵のう。Open door Spiders, (41)

加藤むつみ、1997。トゲグモの成長に伴う形態変化と脱皮型の変化。Kishidaia, (72): 22 - 26.

加藤輝代子、1989。冬の眠り。IN クモのはなし。p.175 - 178. 技報堂出版。

苦節 9 年，ハヤテグモの生息環境と婚姻給餌発見まで

板倉 泰弘¹⁾

The Note of habits of *Perenethis fascigera*

Yasuhiro Itakura

1998 年 8 月に立命館大学で開催された日本蜘蛛学会に飛び入りで参加した折り，キシダグモ科 Pisauridae の一種であるハヤテグモ *Perenethis fascigera* が婚姻給餌を行う事実について，何名かの方にお話した．筆者は，今年 7 月に発見して 7 例しか行動を観察していないし，詳しく調べて，学会での発表の後に，正式に報告しようと考えていた．しかし，「その経緯を Kishidaia に書いてほしい」と，勧められたので，採集例の少ない本種の生息環境についての情報も交えて報告する．

筆者がハヤテグモに関心を持ったのは，1989 年の日本蜘蛛学会宮崎大会の後，有志数名で九州南部を採集して回った時に鹿児島県の吹上海岸で卵嚢を保持した雌を初めて採集した時からである．枯れかけたススキ *Miscanthus sinensis* の株がパッチ状に散在した環境で，枯れススキの株の根本をかき分けたり，ピーティングしていたらこの見慣れないキシダグモが採れた．こんな海岸の吹きさらしの乾燥した環境にいるのかと驚いたのを記憶している．乾燥しすぎた場所らしく，アズマキシダグモ *Pisaura lama* やイオウイロハシリグモ *Dolomedes sulfureus* といった，他のキシダグモ類は確認されなかった．

早速，出嚢した子グモの飼育を開始したが，他種と比較して幼体が背甲長 0.7 mm，体長 1.4 mm と小形で（スジアカハシリグモ *Dolomedes saganus* の場合は，背甲長 0.9 mm，体長 2.0 mm），適当な餌を確保できずに，飼育に失敗した．成功していれば 1990 年には婚姻給餌が観察できたはずであった．

その後，アズマキシダグモやスジアカハシリグモの観察をしつつ，ハヤテグモも探していたが，どうしても採集できなかった．他の方に伺っても「見たことがない」と言われることが多く，各地のリストにも見当たらなかった．唯一，萱嶋泉先生が「キャベツ畑を徘徊する」とおっしゃったが，30 年前の東京の畑はマンションになって消えていた．

1993 年，静岡県の菊川河口より 17 km の左岸側河川敷でハヤテグモを発見した．川岸からわずか 2，3 メートルのところにある乾燥した草地で，6 月であるにもかかわらず，枯れ草の上に

20 cmくらいの草丈のイネ科の草が疎らに生えているだけの環境。この15メートル四方の狭い所にだけ、体長5 mmほどの本種の幼体が見られた。周囲には、ススキ、セイタカアワダチソウ *Solidago altissima*、クズ *Pueraria lobata* の高茎草が広がり、大きなアズマキシダグモやイオウイロハシリグモが見られたが、本種と同じ場所には見られなかった。これがどういうことなのか、調べるのは将来の課題である。筆者は別の休日に菊川まで行ったが、古い橋を掛け替える工事のために埋め立てられ、クモはいなくなっていた。上流側、下流側、右岸側も探したが、見つけることができなかった。

1998年4月29日、筆者は矢作川河口から1 kmの左岸側（碧南の火力発電所の反対岸）でクモを採集していた。大河川で高水敷に広大な草が広がる。クズやセイタカアワダチソウの高茎草の端に灌木があり、その周囲には背丈の低いイネ科の柔らかな草が地面に積もった細い枯れ草の間から生えていた。周りとの環境が異なるため、そのクモを見ようとしゃがんだ筆者の目に、枯れ草の上を走るハヤテグモが飛び込んできた。体長5-6 mmの幼体であった（この環境でも、アズマキシダグモやイオウイロハシリグモは確認されなかった）。筆者は9頭の幼体を捕らえて帰途についた。

1998年7月19日、成熟した雄3頭、雌5頭のハヤテグモを用いて求愛行動を観察した。花瓶に花を生けた上に雌雄のクモを放って行動を観察した。ギフトを保持していなくても、*Pisaura* 以外の他種のクモ同様に、雄は雌のしおり糸に触れると性行動を起こした。隣り合った脚を擦り合わせたり、前方の脚を持ち上げて震動させながら、ギクシャクした歩き方でしおり糸をたどり始めた。歩き方や求愛行動は、全体としてアズマキシダグモによく似ていた（板倉1993）。雌雄同大で、共食いは起こらず、他個体と接触するとお互いが走り去るのも、アズマキシダグモと同様であった。筆者は、まさか、婚姻給餌など行わないだろうから、アズマキシダグモが婚姻給餌行動を獲得する前の、オリジナルなキシダグモの求愛と交配が見られると思って観察していた。やがて、雄は雌の所に辿り着くと……、筆者は驚いた。雄は、雌の体に触れた後、歩き回って近くに落ちていた4 mmにも満たない昆虫の羽を拾って、ラッピングして雌の所へ持っていき、求愛した。後日、雄が餌をあらかじめ保持している場合には、それをギフトとして用いることも確認した（Itakura 投稿中）。

苦節9年、そればかりを待っていたわけではなかったが、こんな行動が見られるとは！しかも、アズマキシダグモとは異なる *Perenethis* 属である。キシダグモ類の歩んできた道の道標に一歩近づけたように思った。

ハヤテグモの婚姻給餌行動については、いずれ、詳細を発表する予定である。また、生息場所の問題についても、追いつ追いつ調査しようと考えている。

特に、生息場所については、時期やクモの成長に伴って変化していくようである。筆者は、室内飼育と併せて野外の個体群の成長を追って調べているが、ハヤテグモの網を造る小さな幼体と、成長して徘徊するようになった幼体、成体とでは、それぞれ見つかる環境が異なることに気づいた。小さな幼体は、8月頃、高茎草地内の地表から最高60 cmの高さのクズの枝の分岐などに造網していた。成長した幼体は、9月から翌年5、6月まで草地の縁部に近いイネ科の枯れ草の地



写真1．ハヤテグモの生息環境
本種はイネ科の植物を好むようである．

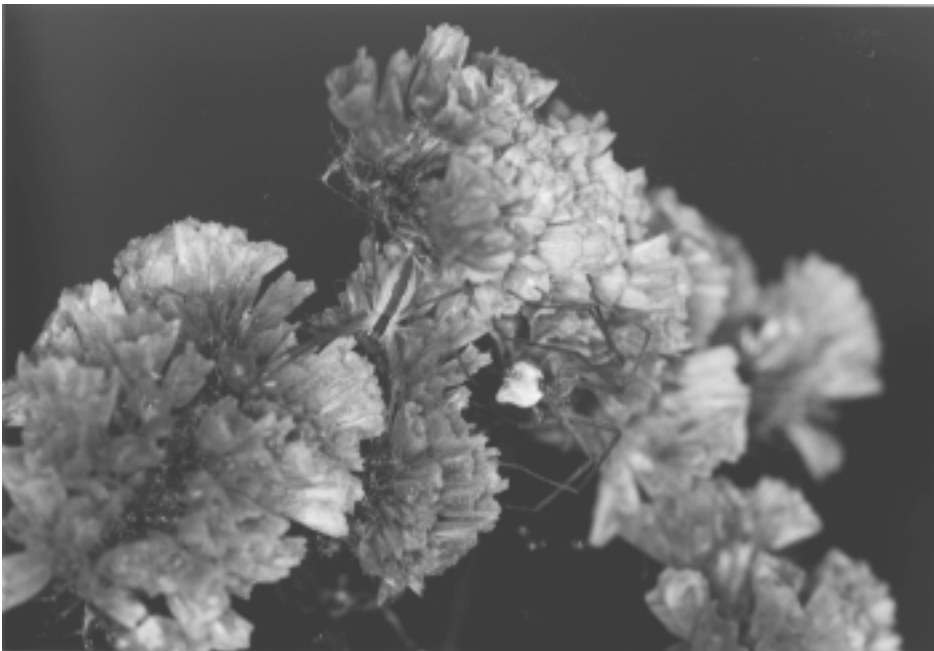


写真2．求愛するハヤテグモ
口器にギフトを保持した雄（右）が雌（左）の脚を叩いている．

表から 20 cm以下の所で見つかった。成体は、高茎草地内のススキの根本から採集されたのである。ハシリグモの *Dolomedes triton* では、大きな幼体や成体による共食いを避けるためか、小さな幼体は水に降りず、水際から数メートル離れたところで見られるという報告がなされている (Zimmermann & Spence 1989)。これと同様のことは、筆者自身、スジアカハシリグモやアオグロハシリグモ *Dolomedes raptor* において観察・調査しており、報告する準備を進めている。本稿を書くよう勧めて下さり、日頃ご教導賜っている池田博明氏に紙上を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 板倉泰弘, 1993. アズマキシダグモの生活史と婚姻給餌. インセクトリウム, **30**(3): 4 - 9.
- Itakura. Y., in press. Discovery of nuptial feeding in the spider, *Perenethis fascigera* (Araneae: Pisauridae) from Japan. *Acta arachnologica*, **47**, 投稿中.
- Zimmermann. M., & Spence. R. S., 1989. Prey use of the fishing spider *Dolomedes triton* (Pisauridae, Araneae): an important predator of the neuston community. *Oecologia*, **80**: 187 - 194.

クモの網の展示標本の作り方

船 曳 和 代

台紙の色や糸の色は好みでよいが、今回はブルーの台紙に白の網、四つ切の写真用のマットパネルに貼り付けて仕上げることにします。

．用意するもの

- 1．ボール紙（縦35cm，横30cm）
- 2．ラッカースプレー（ブルー，白，透明）
- 3．洗濯用の水糊
- 4．スポンジまたは刷毛
- 5．写真用の四つ切のマットパネル

．標本の作り方

- 1．ボール紙にブルーのスプレーラッカーを吹き付け、色を付ける。

一口にブルーといっても、メーカーによっていろいろな色が出ている。濃いめの方が網が引き立つ。また、クモの網の大きさは様々なので、パネルの大きさに合わせて、紙の大きさを切り、色付けをしておくことと便利である。色紙を使ってもよいが、薄いことやりにくい。

- 2．展示標本にする適当な網を見つけ、クモを追い出しておく。

クモの追い出しはしっかりしておかなければならない。糸を引いて下にさがった場合には、引き糸を切っておく。粹糸を通して上や横へ逃げた場合は、もどれないところまで追っておく。十分に追い払っておかないと、またもどってくることもある。

- 3．網に白いラッカーを吹き付ける。

近づけすぎたり、強く吹き付けたりすると、横糸が切れたり、網が破れたりする。特に子グモの網はデリケートで、少し強く吹くと切れてしまう。粹糸の部分もきれいに出るように、まんべんなく吹き付ける。

- 4．紙に水糊を塗る。

洗濯用の水糊はあらかじめ更に水を加え、伸ばしておく。それを刷毛またはスポンジに付け、

紙に伸ばす。

5. 網を紙に移す。

糊を塗った紙を後方から網にあてがい、一方の手で紙を支えながら、もう一方の手で余分の枠糸をていねいに切り離す。

6. 糊をよく乾かし、透明ラッカーを吹き付ける。

透明ラッカーは一度にたくさん吹き付けしないで、乾いたら吹き付ける作業を二三次繰り返す。

7. マットパネルに貼り付ける。

網を移し採った紙をマットパネルに貼り付けて完成。パネルの種類は色々売られています。枠の部分の色もいろいろありますし、枠に厚みがあり、高級感のあるものもあります。私はカッターナイフで手軽に枠を広げられるものを使用しています。

以上が、私がクモの網の展示標本を作る方法です。台紙の色を工夫したり、網に色を付けるのも楽しいと思いますが、網に色を付け、透明ラッカーを吹き付けますと、色が薄くなって、白のような迫力が出ません。スプレーラッカーの種類を変えたり、透明ラッカーを変えたりしていますが、いまひとつ納得のいくものが仕上がりにません。

みなさんも試みて、良い方法があれば、教えていただきたいと思います。

八丈島のジョロウグモ消滅か？

徳 本 洋¹⁾

伊豆諸島の中の一つの島である八丈島のジョロウグモが、かつては多数生息していたらしいのに、現在は姿を見ず、消滅したのではないかとと思われるので、そのことについて以下に記したい。

八丈島産クモ研究史の中のジョロウグモ

八丈島は伊豆諸島の中では青ヶ島について本州から遠く、緯度から見れば四国の足摺岬や九州の延岡市ほどに相当する。この島の真正クモ類については加藤正世（1940）による9種の記録から始まり、仲辻耕次（1942）、植村利夫（1951, 1965）などの報告が続き現在までに60種の分布が明らかにされていて、その種リストは大野正男（1994）によりまとめられている。この大野の著の中には同島の真正クモ類に関する文献9編が記されており、また自らが同島でこれを上回る種数を採集していて、同島産のクモは80種を越すことが明らかだが、その内容は未発表であるとも記されている。

ところで、この島にジョロウグモがいることを最初に記録したのは植村利夫（1951）で、藤山家徳氏が1948年、1949年に3回渡島した際の採集品の中に本種の幼クモがあったことを記している。また植村利夫（1965）にはジョロウグモが「全島にきわめて普通でおびただしくすんでいる」と記してある。これは同博士が1965年7月7日から11日にかけて島嶼教員研修会講師として招かれて同島に渡ったときのクモ類調査結果を記した報文の中である。

八丈島のジョロウグモの現状

私は前記のような過去の記録からこの島にジョロウグモが多数いると予想して1995年11月5・6日と1997年9月24・25日に島内を回った。レンタカーを使って移動したが、それほど大きな島でもないのので、島内でおよそこのクモがいそうな場所はほとんど見回ったつもりである。しかし、ついにこのクモの姿を見ることができず、網の形跡らしきものさえも認めることができなかった。第一回目渡島を11月上旬におこなったのは、同緯度地域である四国南岸や南九州ではこのころがジョロウグモの産卵直前個体の最盛期で、特に海岸付近地域では高い密度でこのク

1) 〒921-8116 金沢市泉野出町 1 - 2 - 6

モが見出される時期だからである。ところがその時期のこの島で一個体のジョロウグモの姿さえも見出せず、狐につままれたような気持ちであった。この島では何か特殊な事情があってジョロウグモが他の地域より早く没姿するのかもしれない、次回は時期を早めて9月に調査したが結果は同じでやはりまったく発見できなかった。

ただこの1997年渡島の際、一つの収穫があった。それは島の中央部にある都立八丈植物公園を訪れたときである。この園は島の原植生を残すことを目的とした総面積40万 m^2 の広いもので、樹林がよく残されているが、樹林のない部分も広く各所に散在しており、ジョロウグモの生息にはうってつけの環境に見えた。しかしここでもこのクモはまったくみつからない。この園の管理事務所には島の自然について解説、展示する部屋があり、研究もおこなっていて、昆虫を専門とする職員の方がおられた。その方がいわれるには、クモはまったく調べていないが、ジョロウグモらしいものは見たことがないとのことである。園では殺虫剤はやむを得ない場合に小範囲の散布することはあっても原則的には散布しないという方針をとっており、殺虫剤散布でこのクモがいなくなるということはないだろうという。

この後で園内を回っているときに散歩していた50歳ほどの女性に会った。そこで円網を張る大きなクモを見たことがないか尋ねてみた。知っているというので誘導質問にならないよう極力注意して、自発的にそのクモの大きさ、色、形、網の大きさや張る位置をいってもらった。彼女の表現はジョロウグモのイメージにきわめて似ていた。そして島ではそのクモを「ヤマグモ」と呼び、子供のころは竿の先に竹を曲げて作った輪をつけ、これでこのクモの網を張り付けて虫採りに使ったという。そして、若いころはこのクモがよくいたし、この園内にもいたのだけれども、そういえばこのごろは見ませんね、という。ジョロウグモと間違えられそうなクモとしてはナガコガネグモがこの島から記録されており、私もそれはこの島で見た。しかしこの女性のいうクモは造網位置が高く、草間や田畑に多いナガコガネグモとは違うように思われる。

私が島で使った民宿の主人は60歳を少し出た感じであったが、私がこんなクモを探しているという、そんなクモなら宿の回りにもいたことがあるという。しかし近辺をいねいに探しても見当たらなかった。2回目の渡島するとき、あなたの探しているクモがいた、というので案内してもらったら、ナガコガネグモであった。

また、島で別の年輩の人から、そんなクモならば牛小屋の付近でよく見たといい、牛を飼育している家も教えてくれた。しかしそこへいってもまったくジョロウグモはみられなかった。

考察 - 西表島のジョロウグモにも触れて

植村利夫博士が見られたジョロウグモは、時期的にみて幼体であろうが、同博士がこのクモを間違えて記録するようなことは考えにくい。このクモの網は幼クモがまだいから分散を始めた直

後のものでも、すでに目の細かい主網をもつ三重網というジョロウグモ独特の特徴ある構造をもっているから、野外ではそれを見ただけでもジョロウグモの幼体と分かるし、同博士が講習会講師として渡島された時期は7月であるから、ジョロウグモ幼体はさらに大きくなっており、同定困難という段階ではない。さらに島内いたる所におびたしい数がいたと明記されているのであるから、それだけ多数いるものを誤認するということはますますありえないのでなかろうか。だから当時この島に多数ジョロウグモがいたというのは確実な情報と見てよいと思う。また前記の島人の話でも昔はこの島にジョロウグモがかなりいたように思える。それなのに、私の時期を違えた二回の渡島で見た限りでは現在はこのクモがいる形跡がまったく見あたらないということは、このクモが島から消失したことによるとしか思えない。もちろん見落としということも考えられないわけではないから、そうであれば簡単には見つけにくいほど極めてまれな存在になっているということであろう。しかし、この島の気候や植生などをみると、このクモがいたとすれば、多数が生息しそうで、そのようにかすかな存在が続いていることも不思議である。また、この島のすぐ北の島は御蔵島であるが、そのジョロウグモのことは情報がなくて分からないけれども、そのまた北にある三宅島にはとても多くのジョロウグモが生息していると、近年、同島に渡られたことのある宮下直博士から聞いている。

表 1. 年平均気温平年値 (1998 年気象庁資料より)

地名	気温
三宅島	17.4
八丈島	18.1
鹿児島	17.6
屋久島	19.1

クモの分布に大きな影響をもつと考えられる温度を見ても、この島の年平均気温は表 1 に示すように鹿児島市と屋久島の間に対応する。屋久島の低地にはジョロウグモは高い密度で生息している(徳本、未発表)から、そのことと比較しても八丈島には気温的にジョロウグモの生息に問題があるとは思えない。また八丈島の植生状況、開拓状況を見ても自然度は悪くなく、ジョロウグモが生息しにくい環境とは思えず、ましてや八丈島に環境的に大きな変動があったとは聞かないから、この消失はまことに不思議である。

生物の分布でよく見られることだが、ある生物の分布限界的地域では、その生物の個体数が少なくなったり、分布がまばらになったりすることがよくある。また移動性の大きな動物の場合は、そのような地域では年によって出現したり、しなかったりということもよくある。八丈島のジョ

ロウグモが消滅したのも，こういった分布限界地域としての現象なのであろうか．といっても具体的にどんな因子がその原因となっているのかは上記のようにまことに分からない．

八丈島と同じようにかつてジョロウグモの記録があるのに現在は見当たらない島の例には南西諸島の西表島がある．大利・樋山（1976）は1972年，1974年，1975年での先島諸島のクモ類調査記録の中で人家周辺に生息する種の一つとして西表島からジョロウグモを記録している．しかし谷川（1989，1991，1992，1996）が1983年3月以来継続して西表島で行った詳細なクモ類調査の結果報告の中にはジョロウグモは記録されていない．谷川氏の教示によれば，その後も現在に至るまで計15年以上も同島に足しげく渡って調査を続けているが，このクモはまったく見出されず，この島にはジョロウグモが生息しているとは思えないし，しかもそれが同氏が調査を開始する少し前には生息していたとはちょっと信じられないという．なお大利・樋山両氏の調査時にどれほどの数のジョロウグモがいたのかはその報文中に示されていないので不明である．また大利・樋山の調査より以前に西表島産クモ類を記録した報文中はいくつもあるが，その中にジョロウグモを記録しているものはない．たとえば，その一つとして村上（1969）らの西表島滞在は1969年7月24日～31日であるが，オオジョロウグモは記録していてもジョロウグモは記録していない．

西表島にかなり近い台湾のジョロウグモのデータはあまりないが，これまでに得た情報ではどうも低地・低山地にはいず，かなり山地に入らないと分布していないようである．そういう意味では，島面積が小さく，高い山地をもたない沖縄本島以南の島々はジョロウグモがかなり低い所にも生息する土地としては南の限界的地域といえる．そういう見方をすれば，西表島でも八丈島と同じく分布限界的現象としてのジョロウグモの一時的生息と消失が起こったのであろうか．

「いた」という記録と違って「いない」といいきることはきわめて難しいので，私もわずか2回の調査でジョロウグモが八丈島から「消失した」という自信はない．ただ上記のような状況なので，「かつては多数いた可能性が高く」，だとすればその後「消失した疑いが濃い」と見ている．今後，八丈島に渡る機会を持たれる方は，この島のジョロウグモの存否に気をつけていただきたい．また，こういうケースを見るにつけ，最近のように環境変化による種の増減が問題になることの多い時代でもあり，普通種でも，どこにどれくらい生息していたかを，機会あるごとにできるだけ具体的に記録しておくことの重要性を痛感させられる．

謝 辞

八丈島のクモ類についての文献を多数お世話いただいた東洋大学の野正男教授，三宅島のジョロウグモについて情報をいただいた東京大学の宮下直博士，西表島のジョロウグモについての情報，ご意見をいただいた神奈川県谷川明男氏，西表島のクモの文献の一部をお世話いただい

た岐阜県の須賀瑛文氏にあつくお礼を申し上げる。

文 献

- 加藤正世, 1940. 八丈島における採集品目録. 昆虫界, 8 (80) : 690 - 730.
- 村上 勝, 1969. チョウとクモを追って. 琉球先島諸島生物調査団報告, 33 - 36. 名古屋生物教育研究会.
- 中辻耕次, 1942. 伊豆七島産蜘蛛類について. 東京農大農学輯集, 1 (4) : 287 - 328.
- 大野正男, 1994. 動物. 八丈島自然公園内環境基礎調査報告書 IV, 256 - 321. 国立公園協会. 東京.
- 大利昌久・樋山御理夫, 1976. 先島諸島 (八重山群島・宮古群島) の真正蜘蛛類相とその生息域. *Atypus* (66) : 15 - 23.
- 谷川明男, 1989. 西表島のクモ類採集記録 I. *Kishidaia* (59) : 25 - 44.
- 谷川明男, 1991. 西表島のクモ類採集記録 II. *Kishidaia* (62) : 26 - 30.
- 谷川明男, 1992. 西表島のクモ類採集記録 III. *Kishidaia* (64) : 53 - 56.
- 谷川明男, 1996. 西表島のクモ類採集記録 IV. *Kishidaia* (67) : 21 - 23.
- 植村利夫, 1951. 八丈島及び青ヶ島の蜘蛛類. *Acta arachnol.*, 12 (3/4) : 78 - 83.
- 植村利夫, 1965. 八丈島産蜘蛛類に就いて. 城南紀要, (2) : 17-26.

ハナグモの生活史

宮下和喜¹⁾

Life history of *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)

Kazuyoshi Miyashita¹⁾

緒言

ハナグモ *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) は、ヨーロッパから中華人民共和国さらには日本に到る旧北区の広い範囲にわたって分布するといわれていて、日本では都市の庭からかなり高い山地にまで広く生息するごく普通の種である(新海・高野 1987)。また、このクモの生活史は、福島・宮藤(1970)が岐阜大学農学部で大変詳しい調査を行っているので、主要なところは分かっているといえる。しかし、福島・宮藤は幼体発育や産卵を 25 と 30 の定温条件下の飼育によって調べているので、ことによると野外での実態と少しずれているかもしれない。そこで、私はこの点を明らかにしてみる目的で、いろいろな時期に採集した幼体と成体を野外条件下に近い室内で飼育してみた。以下は、その結果の概要である。

材料と方法

この調査に供試した個体のすべては、千葉県我孫子市にある中央学院高等学校周辺の水田畦畔や雑草地で採集したものである。

越冬直前の成体：成体が越冬可能かどうかを確かめるため、1996年の9月15～18日に雄7匹と、9月29日～10月27日に雌10匹を採集し、以後それらを全個体が死亡する翌年の春まで個体飼育した。

越冬後の幼体：どんな令期にある幼体が越冬しているのかを確かめるため、1997年の4月8日に7匹、5月4日に5匹のできるだけ体の大きさの違う個体を採集し、以後それらが成体になるまで個体飼育した。

1) 270-1132 千葉県我孫子市湖北台 10-17-19
10-17-19 Kohokudai, Abiko-shi, 270-1132 Japan

繁殖時期の雌成体：季節的な雌成体の産卵に違いがあるかどうかを調べるため、1997年の4月初めより8月中頃にかけて、2~5匹ずつの雌成体を適当な間隔を置いて7回採集し、それらを死亡するまで飼育して卵のう産出と、出のう幼体数を調べた。なお、交接前だと思われた個体には、それぞれの時期に採集した雄と1日間同居させ、交接させた。

飼育した出のう幼体：幼体の発育経過を調べるため、1997年の5月10日、6月11日、および7月21日にそれぞれ産出された卵のうより出のうしてきた2令幼体を個体飼育し、成体になるまでの脱皮回数を記録した。

飼育容器：使用した容器は小型容器（2.5cm径、5.5cm高）と大型容器（3.5cm径、7.5cm高）のネジ蓋付ガラスびんで、前者は若令から中令の幼体に、後者は中令幼体から成体に用いた。クモの足がかりとして小型容器には巾5mm×長さ30mm、大型容器には巾8mm×長さ50mmほどに切った薄手のプラスチック板を斜めに入れた。産卵させる雌には大型容器の中に巾5mm×長さ130mmに切った同様の板をU字形に入れ、蓋を下にして置いた。

給餌：幼体に与えた餌は、水田の畦畔や雑草道を捕虫網ですくって得られたユスリカ、蚊、ハモグリバエ、ウンカとヨコバイの幼・成虫、カラバエ、タネバエであるが、若令幼体には小形なものを5~6匹、中令以後は体の大きさに見合った大きさのものを3~4匹ずつ、種類を混ぜるようにして与えた。成体には同様に上記の中の大きいものを毎回2~3匹ずつ与えた。給餌間隔は1日おきであった。ただし、降雨などにより、餌昆虫が採れない時には2日おきになったが、3日おきになってしまったことは全飼育期間を通じて3回しかなかった。卵のうを産出した雌成体は、幼体が出のうしてくるまで卵のうを守っているため、餌は獲らないように思われたが、餌を与えると良く食うものが多かったので、やはり1日おきにウンカがヨコバイの幼・成虫が大形のハエを1匹ずつ、食う食わないにかかわらず、与えるようにした。越冬期間中（11月20日から翌年の3月5日）には、餌は与えなかった。

温度および湿度：飼育びんは、私の家の冷暖房の無い室の日光の直接当たらず場所に置いた。また、室の換気にも十分気をつけ、電燈も一日中つけなかった。したがって、温度や湿度、日長条件は野外のそれにごく近かったものと思われる。ただし、越冬期間中はビンの内壁に5mm×5mmほどに切って水を含ませたクッキング・ペーパーを貼り付けておき、これを一週間ごとに取り替えたので、びん内部の湿度は外部よりかなり高かったと思われる。

結 果

成体の越冬：図1は、1996年の9月15~18日と9月29日~10月27日にそれぞれ採集した雄成体7匹と雌成体10匹を、翌年の春まで飼育した結果を示したものである。雄と雌の採集日がずれているのは、9月の採集時に十分発育したと思われる雌が少数しか採れなかったため

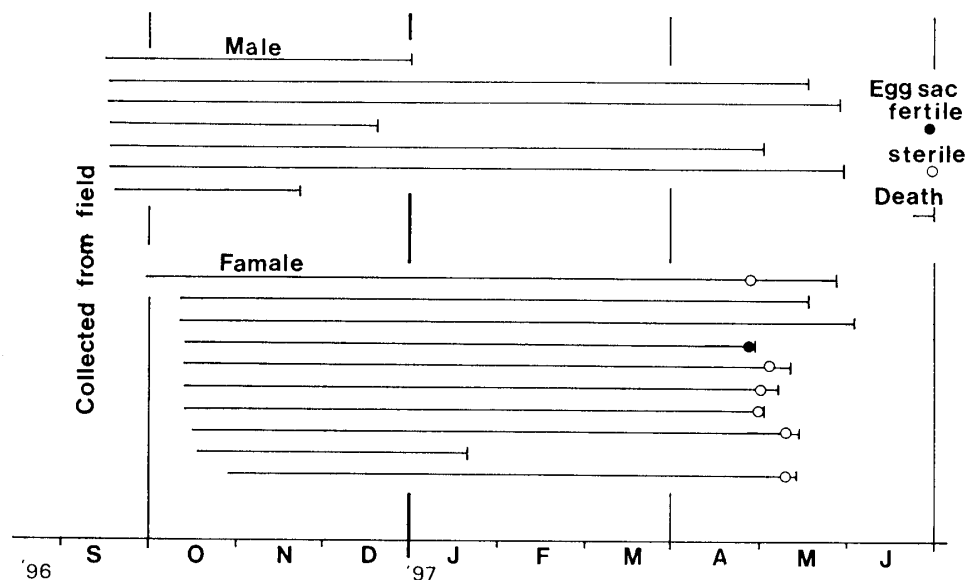


図1. 1996年の9月と10月に採集した雄と雌成体が越冬可能かどうか調べた飼育結果

Fig. 1. Rearings of male and female adults collected from field in September and October, 1996, in order to ascertain the possibility of overwinter.

ある．図1の通り，雄は越冬途中で3匹死亡したが，残り4匹は無事越冬して翌年4～5月まで生存した．雌は1匹を除いて，9匹が4～5月まで生存し，7匹が卵のうを産出したが，1匹を除き，不受精卵だった．したがって，秋の雌の大部分は交接前に越冬に入ることを示しているように思える．

初春の幼体の発育：図2は，1997年4月8日と5月4日に採集したいろいろな令期の幼体の飼育結果である．4月8日に採集した幼体は1匹だけが雄になった．3回脱皮をして5月の終わりに成体になったので，2令または3令で越冬に入ったものと推定された．一方，雌は1～3回脱皮をして成体になっている．雌が越冬に入った令は亜成体またはその1～2令前であったと言える．ただし，採集日以前の初春にすでに1回脱皮をすませている可能性もある．

雌の卵のう産出：図3は，4月から8月にかけてのいろいろな時期に，7回にわたって採集した雌成体の卵のう産出経過を示したものである．卵のう産出は，4～7月の採集個体ではかなり多数の個体が2回行っているが，8月の採集個体は1回であった．4～8月の飼育を通じ，不受精卵を持った卵のうしか産出しなかったものもかなりあったが，一度受精卵の卵のうを産出して

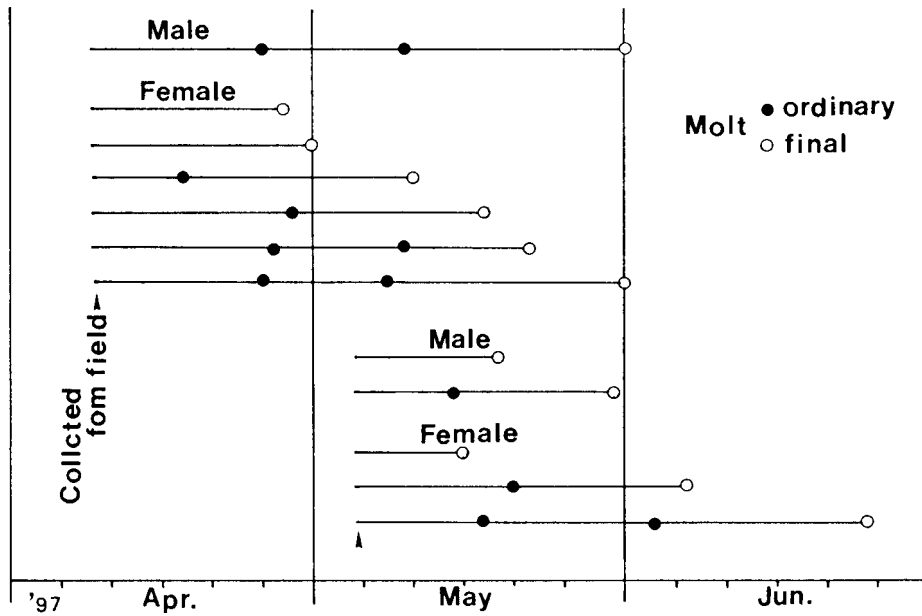


図2 . 1997 年の 4 月と 5 月に採集した幼体の越冬時の令期を調べた飼育結果

Fig.2. Rearings of nymphs collected from field in April and May, 1997, in order to ascertain instar at which overwintered.

も次に不受精卵のうを産出したり、野外採集した雄と交接させても不受精卵のうを産出するものもあって、卵のう産出の傾向は斉一ではなかった。飼育した 26 匹のうち、受精卵のうを産出したものは 16 匹で、このうち卵のうを 2 個産出した雌は 5 匹、3 個産出した雌は 1 匹であった。つまり、2 回以上受精卵のうを産出した雌は受精卵を産んだ雌のなかの 37.5%に過ぎない。受精卵のうだけについて卵のう当りの平均卵数（出のう幼体数で代用）と標準偏差は、1 個目の卵のうでは 80.2 ± 30.9 個であった。また、2 個目の卵のうでは 47.9 ± 15.9 個であった。一匹の雌が一生の間に産んだ総卵数は、 105.7 ± 46.0 個であった。

出のう幼体の発育：図4は、1997年の5月10日、6月11日および7月21日に産出された卵のうよりそれぞれ5月29日、6月28日、および8月3日に出のうした2令幼体の飼育結果である。5月の終りに出のうした幼体は、雄で3-4回、雌で4-5回脱皮をし、前者は6月の終り、後者は7月の初めに成体になっている。6月の終りに出のうした幼体は、雄で4-6回、雌で6-7回脱皮をし、雄一匹を除くと、8月の終りから9月の中頃にかけて成体になっている。さらに8月の初めにし出のうしたものは、雄で5回脱皮をして9月中に、雌で6-7回脱皮をして10月の初めに成体になっている。

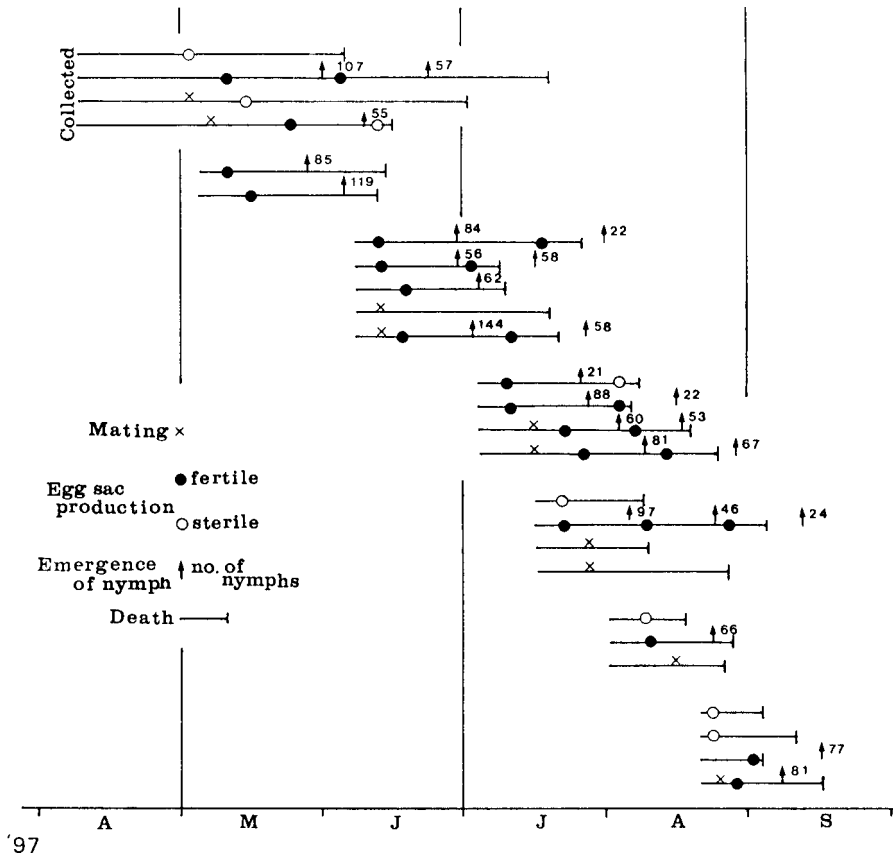


図3 . 1997 年の 4-8 月のいろいろな時期に採集した雌成体の卵のう産出と出のう幼体数

Fig.3. Egg sac production and number of nymphs emerged from each egg sac in females collected from field 7 times during the period from April to August, 1997.

要するに、5月に出のうした幼体は少ない脱皮回数で7月初め頃までには成体になってしまうが、6月に出のうしたものは脱皮回数が1-2回増え、8月の終りから9月に入ってから成体になる。また、それより遅く8月に入ってから出のうしたものは、脱皮回数は6月出のうのものと同様であるが、成体になる時期が6月出のうより若干遅いだけの9月中頃から10月初め頃になるのである。

考 察

図1と図2の結果によると、ハナグモは若令幼体から始まって成体までのいろいろな令期で越冬が可能である。福島・宮藤(1970)は、岐阜大学農学部農場での越冬中の個体としては成体が多量に多く、老・中令幼体がこれに次ぎ、若令幼体は少なかった、と述べている。大熊

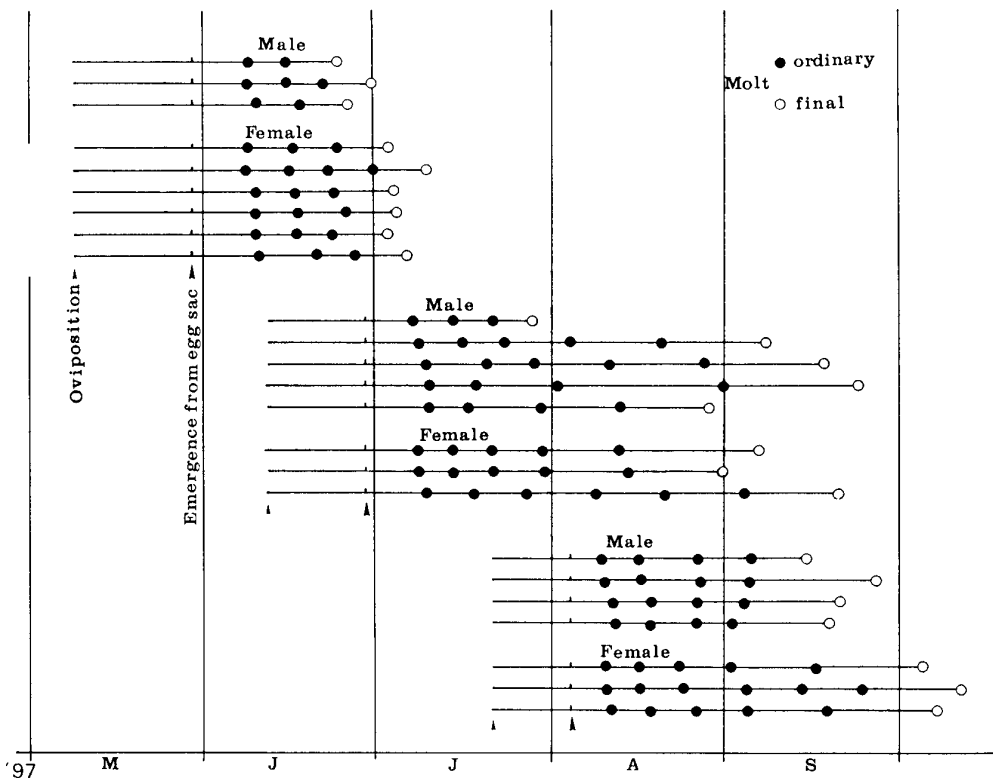


図4 . 1997年の5月29日, 6月28日, および8月3日に出土した幼体の发育経過

Fig. 4. Developmental processes of nymphs emerged from egg sacs on 29 May, 28 June and 3 August, 1997

(1977)は、福岡市の水田地帯でスーピング調査をし、若令幼体から成体までのいろいろな令期で越冬が行われていることから、このクモは年1-2回の発生をするだろう、と述べている。なお、図2で雌成体の多くは交配前に越冬に入るのではないかと疑われる結果を示したが、この問題はもっと多数の個体について調べてみなければ、明らかにはならない。

雌成体の卵のう産出は、図3に示した通り5月から8月まで認められたが、野外では4月中での産出もあるだろうし、9月に入っても産出が行われる可能性もある。5月初めや10月に入ってから雑草地などを捕虫網ですくうと、2令幼体と思われるものがかなり頻りに獲れることがあるからである。野外での1雌の卵のう産出回数は1-2回だと思われるが、条件が良かった時には2回目の産出頻度が高くなるものと思われる。福島・宮藤(1970)は、雌の卵のう産出は1回だけだと考えて調査を行ったように受け取れるが、図3に示した通り、かなり多くの雌が2回目の卵のうを産出することは確かである。しかし、卵のう当りの卵数は2回目の卵のうになると急に少なくなることが多いので、このクモの繁殖を大きくするのには、1回目の卵のう産出だ

と思われる。3 回目の卵のう産出は大変頻度が低いものと思われる。Zhao ら (1980) の中華人民共和国での調査によると、雌は頻繁に雄と交配し、卵のうは 3 回産出することもかなりあるという。

本調査での 1 回目の卵のう当りの平均卵数は 80.2 個であったが、福島・宮藤 (1970) は、5 月の終りから 7 月の初めにかけて産出された卵のうでは平均 161 個だったのに、8 月の終りから 10 月の初めにかけてのそれは 88 個であったと記している。このような産卵数の季節的变化が実際にあるのかどうかは分からないが、図 3 の結果からは、卵のう当りの卵数(出のう幼体数)が季節を追って減少傾向を示しているようにも見える。なお、Zhao ら (1980) によると、卵のう当りの平均卵数は 102.3 個だったという。

図 4 によると、春から初夏にかけての発育は脱皮回数も少なく早く、夏から秋の初めにかけての発育は、脱皮回数が増えて遅くなるのである。しかし、何故このような結果になるのかは分からない。いま考えられる要因としては、日長と気温の季節的变化が挙げられようが、これについては調査を欠くので詳しいことは不明である。福島・宮藤 (1970) は、25 と 30 の定温条件下での飼育で、雌雄とも多くは 6 回の脱皮で成体になったが、発育は 25 より 30 の方が少し早く、脱皮回数も前者では最多が 9 回だったのに対し、後者では 8 回だったと述べている。この結果は、上記した本調査の結果と相反するようにも見えるが、飼育時の日長条件や飼育幼体の採集日の記述が無いので、両者を比較してみるのは無理だった。

図 4 の結果からすると、5 月の終り頃出のうした幼体は、図の最上段に示した通り 7 月初めには成体になるので、それらが 15 日内外摂食した後産卵するとすると、幼体の出のうには 15 日前後を要するので、次世代の幼体は 8 月初め頃出のうすることになる。そうすると、それらの幼体はちょうど図の最下段に示した飼育結果に相当する発育経過をたどることになるから、成体になるのは 9 月中か 10 月初め頃になる。つまり、5 月初め頃までに産まれたものは、年内にもう 1 世代繰り返すことができる(年 2 回発生)。しかし、図 1 と 2 で示したように、越冬は若令幼体から成体までいろいろな令期で行われるので、野外の個体群は 1 年を通じいろいろな発育段階にある個体が混じり合ったものになって、世代をはっきりと区切ることは無理になるとと思われる。Zhao ら (1980) によると、中華人民共和国湖北省の武昌市(北緯 30 度:日本の屋久島と同緯度)では、本種の年間発生回数は 2 回と一部 3 回であるという。

要 約

ハナグモの生活史を考察する目的で、いろいろな時期に野外で採集した幼体および成体を自然条件に近い室内で個体飼育した。その結果、以下のようなことが分かった。

1996 年の秋と翌年の春にそれぞれ採集した成体と幼体の飼育では、若令幼体から成体までの

いろいろな令期にある個体が無事越冬した。

1997年の春から夏にかけて採集した雌成体の飼育では、一生の間の卵のう産出回数は1 - 2回で、3回産出したものはごく少なかった。1回目に産出された卵のう当りの卵数の平均値は、80.2個であった。1雌が一生の間に産んだ総卵数の平均値は、105.7個であった。

1997年の5月の終り、6月の終りおよび8月の初めにそれぞれ出のうした幼体の飼育では、5月出のう幼体は雄で3 - 4回、雌で4 - 5回脱皮して7月初めまでに成体になったが、6月および8月出のう幼体は雄で4 - 6回、雌で6 - 7回脱皮して9月から10月初めにかけて成体になった。

これらの結果にもとづいて、このクモの生活史について若干の考察を行った。

謝 辞

池田博明さんには文献でお世話になった。厚くお礼を申し上げます。

引用文献

福島正三・宮藤守雄, 1970. ハナグモの生活史および習性. 北日本病害虫研究会報, (21) : 5 - 12.

大熊千代子, 1977. 福岡市津屋の水田地帯に生息するクモ類の発生消長に関する研究. 九大農学芸誌, 31 (4) : 133 - 144.

新海栄一・高野伸二, 1987. クモ基本 50. 128pp. 森林書房, 東京.

Zhao, J., F. Liu and W. Chen, 1980. Preliminary studies of the life history of *Misumenops tricuspidatus* and its control of cotton pests. *Acta Zool. Sinica*, 26 (3) : 255 - 261.

コシロカネグモのクモ食い

八 幡 明 彦

1998年9月12日、伊豆大島野田浜に近い家屋の軒先で、コシロカネグモがオオヒメグモの巣の中でオオヒメグモを捕食しているところを観察した。捕獲の瞬間をみていないが、状況から侵入してのクモ食いであることは間違いないと思われる。

コシロカネグモ、オオヒメグモは、同地での造網性クモ優先種であるが、コシロカネは「おとなしい」クモと考えていたので、驚いた。

キンヨウグモの擬死

平 松 毅 久

1998年10月18日埼玉県飯能市の天覧山で行われた東京蜘蛛談話会採集会で、キンヨウグモ *Menosira omata* Chikuni 1955 成体を捕獲、容器が他になかったのでビニール袋に入れてリュックサックのポケットにしまい持ち帰った。帰宅後、取り出して見るとクモは脚を縮めて動かず、さては圧死したかと思いつつ袋から出すと突然動きだし、脱兎のごとく逃げ始めた。あわてて捕まえたが、完全にだまされるところだった。後で大きな容器に移し替えた時も、底の方で約30分死んだふりをして横たわっていた。以上の観察結果からキンヨウグモは擬死をするとみてさしつかえないと思う。

オウギグモの求愛行動

平 松 毅 久

オウギグモ *Hyptiotes affinis* Bös. & Str. 1906 の求愛行動を一例観察したので、報告する。
1998年9月14日京都市北区鷹ヶ峯千束町で、道路沿いを流れる紙屋川の河原に下り、クモを探していると、薄暗い土手の低木や草の間に、同種の成体が数頭造網していた。午前10時45分頃、ある1頭の網付近(の斜め後方)の草の葉に成体がいるのに気付いた。Foelix (1982, 原図はWiehle 1927)によると、オウギグモ属の網は、捕虫域である扇の部分とクモの糸疣から出て後方に伸びて物に固定する1本の糸から成り、クモは4本のタテ糸が収束する1本の糸(a tension thread)即ち要の部分(第1, 2脚で保持、クモの体を隔てて糸疣から繰り出され枝や葉などに付着している糸(an attachment thread)を第4脚で手繰り寄せている(この糸はたるんでいるのでクモの動きで伸縮する)。したがって、クモの前方の捕虫部分とクモの後方の糸は断絶し“a living bridge”(宙吊り状態)になっている。オウギグモの網について述べるのが目的ではないので、これ以上触れないが、日本のオウギグモ *H. affinis* の網に言及した

DRAGLINES

細野 (1974) や中平 (1983) には宙吊り状態であることを示す (または窺わせる) 記述はない。筆者もル - ペがなかったため 100 % 確信は持てないが、ここでは Foelix (1982) に従い、以下に同種の求愛行動を列挙する。

10 時 49 分; の背後から接近した は、“an attachment thread” が付着しているシダの葉に到達すると、の糸疣付近の “an attachment thread” との間を 2 往復して、約 5 ~ 6 cm の交尾糸 (mating thread) を張った。

10 時 51 分; は左右第 1 脚で交互に交尾糸を弾いた。

10 時 54 分; が 2 cm 程前進すると はそれを追い、第 1, 2 脚で の腹部後端に触れた。

10 時 56 分; は再度第 1, 2 脚で の腹部後端に触れると、は少し前進した後、方向転換し、の方を向いた。は方向転換して から離れた。

10 時 59 分; が交尾糸を切断。はすぐ交尾糸を張り直した。

11 時 00 分; は向かい合って互いに接近すると第 1, 2 脚を合わせて絡み合ったが、すぐに離れ は交尾糸を切断した。なお との絡みの際、“a tension thread” と “an attachment thread” は連結されていると思われるが、詳細は不明である。

ここまでは順調に推移し、前述の過程を何度か繰り返した後交尾に至ると思っていたところ、とんだ無粋な邪魔が入った。

11 時 02 分; の網に餌がかかり、は一連の餌捕獲行動の後、ラッピングした餌を触肢でかかえながら額に乗せて、“an attachment thread” が付着しているシダの葉に戻り、の存在を忘れたかのように食べ始めた (11 時 08 分)。は から少し離れた所で、ぶら下がったまま動かなかったが、11 時 16 分にまた少し から離れ、11 時 35 分にはさらに離れて別の植物の葉に移ってしまったので、再度求愛を行う可能性は低いと考えて観察を打ち切り、この哀れなを採集した。

こういうのを色気より食い気と言うのだろうか。

引用文献

Foelix, R.F., 1982. Biology of spiders. 306p. Harvard Univ., Cambr., Massachusetts and Lond., England.

細野善熙, 1974. クモの習性. 198p. りんどう双書. 信濃教育出版部. 長野.

中平 清, 1983. クモのふるまい. 著者自刊 (直接引用せず).

神奈川県津久井郡城山町のクモ

伴 満・大川秀治

この目録は大川が1996年夏から1998年夏までの2年間に神奈川県津久井郡城山町の山林で観察・採集したクモの記録です。この地域に棲息するクモの全貌ではありませんが、稀産種を含んでいますので、参考までに発表する事に致しました。本目録の作成について、池田博明氏から適切なご助言をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

目 録

*印は写真で確認したもの。()内は同一個体を示す。

Uloboridae ウズグモ科

Hyptiotes affinis Bös. & Str. 1906 オウギグモ 971001

Octonoba sybotides (Bös. & Str. 1906) カタハリウズグモ 980624

Pholcidae コウレイグモ科

Spermophora senoculate (Dyges 1836) シモングモ 980611, 980723

Theridiidae ヒメグモ科

Achaearanea oculiprominentis (S.Saito 1939) オオツリガネヒメグモ 980624

Anelosimus iwawakiensis Yoshida 1986 イワワキアシプトヒメグモ 980618

Argyrodes cylindratus Thorell 1889 トビジロイソウロウグモ 980708

Chryso argyrodiformis (Yaginuma 1952) オダカグモ

[*970808 &e, *970818 &ny, 970825], 980701

C. punctifera (Yaginuma 1960) ホシミドリヒメグモ 980425

C. venusta (Yaginuma 1957) コガネヒメグモ 980624

Episinus nubilus Yaginuma 1960 ムラクモヒシガタグモ 980701

Phoroncidia pilula (Karsch 1879) ツクネグモ 980428

Theridion chikunii Yaginuma 1960 バラギヒメグモ 980428

T. latifolium Yaginuma 1960 ヒロハヒメグモ 980428

T. subaduktum Bös. & Str. 1906 コケヒメグモ 980428

T. subpallens Bös. & Str. 1906 ハイイロヒメグモ 980428

T. yunohamaense Bös. & Str. 1906 ユノハマヒメグモ 980425

Linyphiidae サラグモ科

Arcuphantes delicatus (Chikuni 1955) オツヌヤミサラグモ 980624

<i>A. tamaensis</i> (Oi 1960)	タマヤミサラグモ	980425 , 980708
<i>Erigonidium graminicola</i> (Sundevall 1829)	ナニワナンキングモ	980408
<i>Floronis bucculenta</i> (Clerck 1758)	ハナサラグモ	970923
<i>Labulla contortipes</i> (Karsch 1881)	アシヨレグモ	980611
<i>Linyphia longipedella</i> Bös. & Str. 1906	アシナガサラグモ	970808 , 970604
Mimetidae センショウグモ科		
<i>Ero cambridgei</i> Kulcznski 1911	アオグロセンショウグモ	980623
<i>Mimetustestaceus</i> Yaginuma 1960	ハラビロセンショウグモ	971001 y
Theridiosomatidae カラカラグモ科		
<i>Theridiosoma epeiroides</i> Bös. & Str. 1906	カラカラグモ	980708
<i>Wendilgarda</i> sp.	ナルコグモ	980611
Anapidae ヨリメグモ科		
<i>Conculus lyugadinus</i> Komatu 1940	ヨリメグモ	980625
Araneidae コガネグモ科		
<i>Acusilas coccinneus</i> Simon 1986	ハツリグモ	980611
<i>Arachnura logio</i> Yaginuma 1956	キジロオヒキグモ	960819
<i>Araneus ejusmodi</i> (Bös. & Str. 1906)	ヌサオニグモ	980718
<i>A. ishisawai</i> Kishida 1928	イシサワオニグモ	980715
<i>A. pentagrammics</i> (Karsch 1879)	アオオニグモ	980425
<i>A. pseudocentrodus</i> (Bös. & Str. 1906)	トガリオニグモ	980728
<i>A. punctiger</i> (Doleschall 1857)	コゲチャオニグモ	970904 , 980715
<i>A. semilunaris</i> (Karsch 1879)	マルヅメオニグモ	980618
<i>Araneus</i> sp.	ヤミイロオニグモの近似種	980506
<i>A. uyemurai</i> Yaginuma 1960	ヤマオニグモ	960819 , 980502 , 980708
<i>A. variegatus</i> Yaginuma 1960	ニシキオニグモ	*970818 y , 970911 , 970923
<i>A. viperifer</i> Schenkel 1963	カラオニグモ	980428
<i>A. viridiventris</i> Yaginuma 1969	ハラビロミドリオニグモ	980425
<i>Argiope boesenbergi</i> Levi 1983	チュウガタコガネグモ	980506
<i>A. minuta</i> Karsch 1879	コガタコガネグモ	970817
<i>Chorizopes nipponicus</i> Yaginuma 1963	ヤマトカナエグモ	980611
<i>Cyclosa atrata</i> Bös. & Str. 1906	カラスゴミグモ	980611

<i>C. laticauda</i> Börs. & Str. 1906	キジロゴミグモ	980611
<i>C. monticola</i> Börs. & Str. 1906	ヤマゴミグモ	980425
<i>Cyrtarachne induta</i> Yaginuma 1960	ソメワケトリノフンダマシ	980718
<i>C. nagasakiensis</i> Strand 1916	シロオビトリノフンダマシ	980718
<i>C. nigra</i> Yaginuma 1960	クロトリノフンダマシ	980718
<i>C. yunoharuensis</i> Strand 1916	アカイロトリノフンダマシ	980718 赤色, 黒色
<i>Cyrtophora moluccensis</i> (Doleshall 1857)	スズミグモ	*960819 e
<i>Gasteracantha kuhlii</i> C.koch 1838	トゲグモ	*960819 , 980705
<i>Ordgrius hobsoni</i> (O.P-Cambridge 1877)	マメイタイセキグモ	[*970825 1e, *970907 2e, 970911], 980611 y
<i>O. sexspinosus</i> (Thorell 1894)	ムツトゲイセキグモ	960819 , [*960819 , 971006]
<i>Paraplectana sakaguchii</i> Uyemura 1938	サカグチトリノフンダマシ	980426 y
<i>Poltys illepidus</i> C. Koch 1843	ゲホウグモ	980506
<i>Zilla astridae</i> (Str. 1916)	サガオニグモ	980408 , 980425
<i>Z. Sachalinensis</i> (S. Saito 1934)	カラフトオニグモ	980428
	Clubionidae フクログモ科	
<i>Phurolithus claripes</i> (Dön. & Str. 1906)	イナズマウラシマグモ	980701
	Gnaphosidae ワシグモ科	
<i>Sernokorba pallidipatellis</i> (Börs. & Str. 1906)	マエトビトンビグモ	980701
	Thomisidae カニグモ科	
<i>Heriaeus mellottei</i> Simon 1886	アシナガカニグモ	980611 , 980715
<i>Misumenops kumadai</i> Ono 1985	クマダハナグモ	970818 y , 980425 y
	Philodromidae エビグモ科	
<i>Thanatus nipponicus</i> Yaginuma 1969	ヤマトヤドカリグモ	980408
	Salticidae ハエトリグモ科	
<i>Harmochirus insulanus</i> (Kishida 1914)	ウデプトハエトリ	980708
<i>Phintella bifurcilinea</i> (Börs. & Str. 1906)	キアシハエトリ	980728
<i>Synagelides agorformis</i> Strand 1906	アメイロハエトリ	980708

補足 . この他に 980611 に小型で全身は艶のある黒色 , 腹背後部に一対の円状黄色斑のあるヒメ

グモ類の幼体 (フタホシヒラタヒメグモ?), コモリグモ幼体が2種 (カガリビコモリグモ? 980611 y y, キシベコモリグモ? 971006 y y) が採れている.

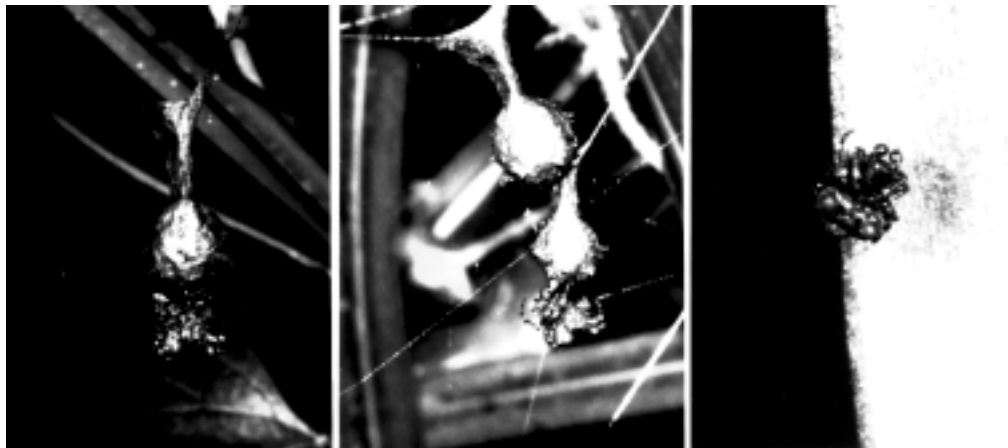


図1.

図2.

図3.

図1. マメイタイセキグモと卵囊. 970825 撮影. 地上1 m位の処のブッシュに卵囊を吊していた. 卵囊数は1個でその下にはぶら下がっていた.

図2. 同上. 970907 撮影. 約十日後であるが卵囊数は2個になっていた. 最終的には3個産んだ.

図3. 同亜成体の . 980611 撮影. 前年産卵した場所で採集した.

夏の神津島のクモ

池田博明・伴 満

Spider Fauna of Kodzushima Island, Tokyo

Hiroyoshi Ikeda and Mitsuru Ban

1995年7月26日夕方から27日午前にかけて、伊豆七島のひとつである神津島の各所(神津小学校付近、よたね会館付近、物忌名神社、秩父山、只苗島)で、クモを採集した。種数は42種と多くないが、一記録として報告する。なお、神津島の属島として知られる只苗島は多幸湾の沖に浮かぶカコウ岩質の岩塊で、ここで採れた1雌をもとに、1942年に仲辻耕次氏がヒロセハエトリを新種記載したが、今回の調査からヒロセハエトリはヤハズハエトリの雌であったと判断した(池田1998)。

本目録中、只苗島で記録した種には*を付した。

略号は F=Female adult, f=female subadult, M=Male adult, m=male subadult, n=nymph, E=Egg cocoon.

報告に当り、文献に関してお世話になった小野展嗣博士に感謝申し上げる。

Theridiidae ヒメグモ科

1	<i>Anelosimus crassipes</i>	アシプトヒメグモ	n
2	<i>Achaearanea japonica</i>	ヒメグモ	f
3	<i>Achaearanea tepidariorum</i>	オオヒメグモ	Fn
4	<i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	n
5	<i>Dipoena mustelina</i>	カニミジグモ	M
6	<i>Dipoena mutilata</i>	コアカクロミジグモ	F
7	<i>Dipoena punctisparsa</i>	シモフリミジグモ	Fn
8	<i>Enoplognatha transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	n
9	<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	n
10	<i>Episinus nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	n
11	<i>Theridion subpallens</i>	ハイイロヒメグモ*	F

Linyphiidae サラグモ科

12	<i>Meioneta</i> sp.	ケシグモ sp	F
----	---------------------	---------	---

	Mimetidae センショウグモ科	
13	<i>Ero japonica</i>	センショウグモ F
	Araneidae コガネグモ科	
14	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ Fn
15	<i>Araneus ventricosus</i>	オニグモ* mF
16	<i>Argiope bruennichii</i>	ナガコガネグモ* FM
17	<i>Argiope minuta</i>	コガタコガネグモ mn
18	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ mn
19	<i>Cyclosa omonaga</i>	シマゴミグモ F
20	<i>Larinia argiopiformis</i>	コガネグモダマシ n
21	<i>Neoscona mellottei</i>	ワキグロサツマノミダマシ f
22	<i>Neoscona scylloides</i>	サツマノミダマシ F
23	<i>Poltys illepidus</i>	ゲホウグモ n
	Tetragnathidae アシナガグモ科	
24	<i>Leucauge subblanda</i>	コシロカネグモ Ffn
25	<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ n
	Agelenidae タナグモ科	
26	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ F
27	<i>Agelena opulenta</i>	コクサグモ n
	Lycosidae コモリグモ科	
28	<i>Pirata procurvus</i>	チビコモリグモ FE
	Heteropodidae アシダカグモ科	
29	<i>Heteropoda venatoria</i>	アシダカグモ FE
		卵のうを抱えていた(目撃)
	Thomisidae カニグモ科	
30	<i>Boliscus tuberculatus</i>	イボカニグモ MF
31	<i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ n
32	<i>Lysteles coronatus</i>	アマギエビスグモ n
33	<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ MFf
34	<i>Tmarus rimosus</i>	セマルトラフカニグモ n
	Philodromidae エビグモ科	
35	<i>Philodromus subaureolus</i>	アサヒエビグモ* n
	Salticidae ハエトリグモ科	
36	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ n
37	<i>Evarcha albalia</i>	マミジロハエトリ* M
38	<i>Hasarius adansoni</i>	アダンソンハエトリ M

39	<i>Marpissa elongata</i>	ヤハズハエトリ*	mFn
40	<i>Phintella linea</i>	メガネアサヒハエトリ*	Fn
41	<i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	F
42	<i>Siler cupreus</i>	アオオビハエトリ*	F

神津島のクモについては、仲辻（1942）が 24 種、大野・八木沼（1968）が仲辻の種を含めて 38 種を報告している。両者の調査日は 6 月または 7 月で、そのためこの時期に幼体であったジョロウグモは記録されていなかった。

今回の採集で新たに神津島のクモ相に追加された種は次の 27 種であった。

ヒメグモ、シロカネイソウロウグモ、カニミジグモ、コアカクロミジグモ、シモフリミジグモ、カレハヒメグモ、ヒシガタグモ、ムラクモヒシガタグモ、ハイイロヒメグモ、ケシグモの一種、センショウグモ、ハツリグモ、ナガコガネグモ、コガネグモダマシ、ワキグロサツマノミダマシ、ゲホウグモ、コシロカネグモ、ジョロウグモ、チビコモリグモ、アシダカグモ、イボカニグモ、アマギエビスグモ、セマルトラフカニグモ、アサヒエビグモ、ネコハエトリ、アダンソンハエトリ、メガネアサヒハエトリ。

また、大野・八木沼(1968)で記録されている種で今回採集できなかつた種は次の 17 種であった。なお、学名は原報のものを挙げた。

		Uroboridae	ウズグモ科
43	<i>Uloborus sybotides</i>		カタハリウズグモ
		Theridiidae	ヒメグモ科
44	<i>Ariamnes cylindrogaster</i>		オナガグモ
		Araneidae	コガネグモ科
45	<i>Neoscona scylla</i>		ヤマシロオニグモ
46	<i>Araneus fuscocoloratus</i>		ヤミイロオニグモ
		Tetragnathidae	アシナガグモ科
47	<i>Tetragnatha praedonia</i>		アシナガグモ
48	<i>Leucauge blanda</i>		チュウガタシロカネグモ
		Oxyopidae	ササグモ科
49	<i>Oxyopes sertatus</i>		ササグモ
		Lycosidae	コモリグモ科
50	<i>Pardosa T-insignita</i>		ウツキコモリグモ
		Hahniidae	ハタケグモ科
51	<i>Hahnia corticicola</i>		ハタケグモ
		Clubionidae	フクログモ科

52	<i>Chiracanthium eutittha</i>	アシナガコマチグモ
53	<i>Clubiona vigi</i>	ムナアカフクログモ
		Thomisidae カニグモ科
52	<i>Thomisus onustoides</i>	ウスジロアズチグモ
53	<i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ
54	<i>Xysticus tunicatus</i>	オオヤミイロカニグモ
		Salticidae ハエトリグモ科
55	<i>Jotus difficilis</i>	マガネアサヒハエトリ
56	<i>Hyctia Hiroseae</i>	ヒロセハエトリ
57	<i>Myrmarachne innermichelis</i>	ヤサアリグモ

これら 59 種のうち、52 ウスジロアズチグモはアズチグモ、56 ヒロセハエトリはヤハズハエトリである。したがって、仲辻以来、現在までに、神津島のクモは 57 種を記録したことになる。

引用文献

- 池田博明, 1998. ヒロセハエトリを求めて. *Kishidaia*, (75):14 - 18 .
- 大野正男・八木沼健夫, 1968. 新島・式根島・神津島の真正蜘蛛類. 東洋大学紀要, (10):17-29.
- 仲辻耕次, 1942. 伊豆七島産蜘蛛類に就て. 農学輯報, 1(4):287-328.

「神奈川県産クモ類目録」追記

池田博明

Kishidaia の 68 号に、熊田憲一・池田博明・谷川明男名義で「神奈川県産クモ類目録」が発表された。序文にあるように、1994 年 4 月 30 日までの記録を集大成したものであるため、目録の中にはいくつかの疑問種が含まれている。目録中の疑問種および註を要する種について、目録の整理番号、和名、疑問とする理由の順で記す。

33. イトグモ

小田原城内高校内のみの記録である。標本が無いので、シモングモを誤同定した可能性があると思っていたが、1995 年 10 月 2 日、池田の自宅で（神奈川県足柄上郡大井町）雌幼体が採れた。

43. ヒザブトヒメグモ

採集地は大山、丹沢となっており、同定者はたぶん熊田氏である。この種は南方系なので、著しく不自然である。記録はオオツリガネヒメグモ記載以前なので、オオツリガネヒメグモの網を見て即断したものと思う。

269. ミドリアシナガグモ

本種は山地性なので、採地に平地部分が含まれているのは不自然である。新海栄一氏から一部は熊田氏の誤同定と聞いている。

299. スジチャハシリグモ

正体不明種である。

304. ハヤテグモ

多摩センターのみ記録であるが、本種の分布からみて不自然である。おそらくイオウイロハシリグモの幼体を誤同定したものと思う。

325. カイゾクコモリグモ

平地部のものは分布からみて不自然である。誤同定であろう。

345. フクログモの一種 *Clubiona hummeli*

学名保留種であったが、林俊夫氏はカギフクログモ *Clubiona pseudogermanica* Schenkel 1936 と同定した。

422. ハモンエビグモ

採集地は座間市のみである。同定は幼体で池田が行った。その後、同種を相模川で木村知之氏が採集しているので、誤同定ではなかったかもしれない。

456. ムロテハエトリ

学名を *Phintella melloteei* (Simon 1888) としているが、正体不明種である。ポーダノヴィッチとプルシンスキーの「日本のハエトリ」(1987) で再記載された。彼らは、佐賀県と横浜の *Jotus difficilis* Bös. & Str. 1906 と佐賀県の *Sitticus pallicolor* Bös. & Str. 1906 のタイプ標本を検し、これらをシノニムとしている。所検標本はすべてのみである。また、佐賀県の *Euophrys aninotata* Bös. & Str. 1906 のタイプ標本は、*Phintella castriesiana* (Grube 1861) と同定されたが、この種はすべてのみである。多分これらは、マガネアサヒハエトリ (学名は *P. castriesiana* (Grube 1861) となる) の と (=ムロテハエトリ) であろう。

466. アカガネハエトリ

学名を *Siler cupreus* Simon 1889 としているが、正体不明種である。「日本のハエトリ」では、この学名はアオオビハエトリに当てられている。しかし、八木沼 (1990) はこれを認めていない。実体ははっきりしていない。

引用文献

- 熊田憲一・池田博明・谷川明男, 1995. 神奈川県産クモ類目録. *Kishidaia*, (68): 1 - 48.
Hayashi, T., 1994. *Acta arachnol.*, 57-64.

沖縄県産クモ類目録¹⁾

谷川明男²⁾・佐々木健志³⁾

A Check List of Spiders in Okinawa Prefecture , Japan

Akio Tanikawa²⁾ and Takeshi Sasaki³⁾

沖縄県産のクモ類の研究は、Strand (1907) が *Thomisus okinawensis* オキナワアズチグモを新種として記載したことに始まる。彼は1910年にも *Latouchia japonica* ミヤコジマトタゲモを新種として発表した。その後1930年代までは沖縄県産クモ類に関する研究発表はない。1930年代半ばおよび1950年代後半に発表された岸田久吉 (1936a, b, 1937) 植村利夫 (1937), 八木沼健夫 (1955, 1958) の論文に沖縄県産のクモ類が材料として使われていたり分布範囲として沖縄があげられたりしている。そして1959年、沖縄全体のクモ類目録が岸田久吉によって発表された。しかし、残念なことにこの目録中には沖縄あるいは日本に生息することが極めて疑わしい種が多く含まれていたり、記載が存在しない無効学名が多数掲げられており、沖縄のクモ相については日本のクモ相の研究に大きな混乱をもたらしてしまった。本報告では無効学名については一切取り上げなかった。1960年代に入ると、島あるいは群島単位の目録が多数発表され始めた(下謝名松栄 1963a, b, c, 大井良次 1963a, b, 八木沼健夫 1963, 1964, 1966 など)。そして、1967年にはこの時代の沖縄県のクモ相研究のまとめとして下謝名松栄氏 (1967) による“琉球列島のクモ相について”が発表された。この時代の各研究によって沖縄県のクモ相の概要が明らかにされ始めたのだが、これら初期の研究においては、沖縄に生息する種を本州・

1) この研究の一部は、沖縄島中北部米軍訓練場内動植物調査 (Legacy Project) の研究費によって行われた。

2) 神奈川県立七里ガ浜高等学校 〒248-0025 鎌倉市七里ガ浜東 2 - 3 - 1
Shichirigahama Senior High School, 2 - 3 - 1, Shichirigahama-higashi, Kamakura-shi, Kanagawa, 248-0025 Japan

3) 琉球大学資料館 〒903-0129 中頭郡西原町千原 1
University Museum of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa Prefecture, 903-0129 Japan

四国・九州産の近似別種に無理に同定してしまっている場合が少なからずあった。1970年代に入っても目録発表の流れは続き、多くの目録が発表されたが、1970年代後半からは、沖縄産クモ類に対して分類学的な再検討が加えられ、沖縄県産クモ類を材料とした分類学的研究が多数発表され始めた。1980年代に入るとそのような分類学的研究が非常に多く発表されると共に沖縄県のクモ類を材料とした生態学的研究も増加し、その流れは今日まで続いている。ここ20年ほどの間に発表されたいろいろな研究によって沖縄県のクモ類について多くの事が明らかになった。まだまだ未解決の問題点も数多く残されているが、筆者らは20世紀末のこの時期を捉え、現時点での沖縄県産クモ類目録を編むことにした。

本目録は1998年8月31日までに発表された沖縄県での採集記録や観察記録、沖縄県産クモ類に基づく分類学的研究、ならびに沖縄県をフィールドとした生態学的研究に発表されているクモ類の生息データを集成し、さらに筆者らが採集、同定した標本による記録を合わせて作成したものである。採集地は島ごとに整理し、()内に番号によって引用文献を示した。ただし、文献中の地名表示では島を特定できない場合には文献に示された地名のままを“ ”に入れてその種の末尾に掲げた。0番は筆者らの採集・同定による記録を示している。その場合の標本のうち大部分は谷川の個人的なコレクションか琉球大学資料館に保存されているが、基準標本に指定された標本など一部のものについては国立科学博物館に保存されている。過去の記録の中には誤同定の疑いのあるものや、現在は使用されていない和名や学名が使用されている場合があった。和名や学名の古いものについては可能な限りその後の変遷を追い、現在使用されている新しいものに変えてある。ただし、現在のどの種に同定されたものかを特定できない場合には発表当時のまま掲げた。また、誤同定の疑いがある場合やその他の問題があるもののうちいくつかについてはそれぞれの種の項目にコメントを入れた。同定のあやふやなものを生かしておいてもいつまでもあやふやなままなので、ここでいったん削除することにした。過去の各研究の著者にとっては大変不愉快なことかもしれないが、沖縄県のクモ相をできるだけ正確に把握していくために思いきった処置をとった。沖縄県産クモ類目録から削除すべきであると判断したものには整理番号を与えず、学名の前に“・”のみをつけることで区別した。判断基準は次のとおりである。1)筆者らが採集同定し、沖縄県での生息を再確認したもの。2)分類学的研究論文で沖縄県産の標本が基準標本に指定されていたり、所見標本として取り上げられているもの。3)その種を記載した著者自身の同定によるもの。4)図あるいは写真が掲載されていて、それによって同定が正しいことを再確認できるもの。5)そのグループを専門とする研究者による同定であることが文中に明示されている場合。以上の5つのいずれかに該当するものは確実に沖縄県に生息していると判断し、いずれにも該当しない場合は誤同定と断定して思いきって削除した。これでもなお誤同定による記録が残っている可能性があるし、筆者らの同定が誤同定である可能性ももちろんある。また、削除してしまった記録の中に同定の正しかったものがあった可能性もある。それらについ

7. *Ryuthela tanikawai* Ono 1997
西表島 (53)

イリオモテキムラゲモ

Ctenizidae トタテグモ科

南西諸島産のトタテグモ科のクモ類については今後さらに検討する必要がある。本報告では過去の文献に発表されているまま取り上げて掲げた。

8. *Latouchia japonica* Strand 1910

ミヤコジマトタテグモ

沖縄島 (61, 64) 宮古島 (58, 69, 83) “沖縄”(25)

9. *Latouchia swinhoei* Pocock 1901

オキナワトタテグモ

伊是名島 (70) 伊江島 (68) 沖縄島 (0, 15, 64, 67, 68, 74, 81) 古宇利島 (8)

宮城島 (67, 68) 浜比嘉島 (68) 屋嘉比島 (4) 久米島 (65, 67, 68, 60) 宮古島 (68, 69) 石垣島 (58, 63, 64, 68) 西表島 (0, 58, 64, 68, 95) 与那国島 (58, 68) “沖縄”(25)

10. *Ummidia fragaria* (Donitz 1887)

キノボリトタテグモ

伊是名島 (70) 沖縄島 (15, 67, 68, 74, 81) 屋嘉比島 (4) 久米島 (15, 65, 67) 宮古島 (58, 69) 西表島 (0, 95) 与那国島 (67, 68)

Hexathelidae ジョウゴグモ科

11. *Macrothele gigas* Shimojana & Haupt 1998

オオクロケブカジョウゴグモ

長い間ホルストジョウゴグモに誤同定されてきたクモである。Shimojana & Haupt (1998) によって新種として記載された。ここでは、過去の記録のうちホルストジョウゴグモとして報告されているものはすべてオオクロケブカジョウゴグモに変えてある。

宮古島 (69) 石垣島 (15, 58, 63, 64, 68, 73) 西表島 (0, 15, 58, 63, 64, 67, 68, 73, 95, 102) 与那国島 (58)

12. *Macrothele yaginumai* Shimojana & Haupt 1998

ヤエヤマジョウゴグモ

石垣島 (0, 73) 西表島 (0, 73)

Filistatidae カヤシマグモ科

・ *Filistata marginata* Kishida in S. Komatsu 1936

カヤシマグモ

沖縄島 (61, 64) “沖縄”(25)

Sicariidae イトグモ科

・ *Loxosceles rufescens* (Dufour 1820)

イトグモ

南大東島 (68) 沖縄島 (62, 64) 久米島 (68) “沖縄”(25)

Scytodidae ヤマシログモ科

13 . *Scytodes fuscus* Walckenaer 1837 クロヤマシログモ

本種の同定については、さらに検討を加える必要がある。

石垣島 (0, 15) 西表島 (0, 15, 58, 95, 134) “八重山群島”(57)

・ *Scytodes striatipes* (L. Koch 1872) ヤマシログモ

近似別種を誤同定したのであろう。

沖縄島 (62) 宮古島 (66, 69) 石垣島 (58, 63) 西表島 (58) 与那国島 (58) “八重山群島”(57) “沖縄”(25)

・ *Scytodes thoracicus* (Latreille 1804) ユカタヤマシログモ

近似別種を誤同定したのであろう。

北大東島 (68) 伊平屋島 (70) 伊江島 (67, 68) 沖縄島 (15, 61, 64, 67, 68, 74)
久米島 (65) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (58, 63, 64)
与那国島 (58) “八重山群島”(57) “沖縄”(25)

Leptonetidae マシラゲモ科

14 . *Leptoneta longipalpis* (Komatsu 1972) ウデナガマシラゲモ

伊江島 (67, 68) 沖縄島 (27, 67, 68) 古宇利島 (67, 68) 伊計島 (67, 68) 宮城島
(67, 68) 浜比嘉島 (67, 68) 渡名喜島 (67, 68) 久米島 (67, 68) 石垣島 (67, 68)

15 . *Leptoneta okinawaensis* (Komatsu 1972) オキナワマシラゲモ

沖縄島 (27, 67, 68)

Ochyroceratidae エンコウグモ科

16 . *Speocera laureata* Komatsu 1974 カンムリグモ

伊平屋島 (70) 伊江島 (67, 68) 沖縄島 (67, 68, 74) 伊計島 (67) 宮城島 (67, 68)
浜比嘉島 (67, 68) 津堅島 (68) 久米島 (67, 68) 宮古島 (69) 石垣島 (67, 68) 竹
富島 (67, 68) 小浜島 (67, 68) 黒島 (67, 68) 西表島 (0, 67, 68, 95) 与那国島
(67, 68)

Pholcidae ヨウレイグモ科

・ *Artema atlanta* Walckenaer 1837 タマユウレイグモ

“沖縄”(25)

17 . *Crossopriza lyoni* (Blackwall 1867) オダカユウレイグモ

沖縄島 (141)

・ *Pholcus crypticolens* Bösenberg & Strand 1906 ヨウレイグモ

南大東島 (7) 沖縄島 (64, 74) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65) 宮古島 (58, 69) 石垣島
(58, 63, 64) 西表島 (58) 与那国島 (58) “八重山群島”(57)

18 . *Pholcus nagasakiensis* Strand 1918 ミナミユウレイグモ

- 沖繩島 (0, 61, 64, 81, 133) 石垣島 (0) 西表島 (0, 95)
- ・ *Pholcus phalangoides* (Fuesslin 1775) イエユウレイグモ
 沖繩島 (57, 64) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (30, 58, 63, 64) 与那国島 (58) 八重山群島 (57)
19. *Physocyclus globosus* (Taczanowski 1873) ネットアイユウレイグモ
 沖繩島 (0, 81, 140)
20. *Smeringopus pallidus* (Blackwall 1858) ユウレイグモモドキ
 北大東島 (0) 南大東島 (0) 伊江島 (68) 沖繩島 (0, 61, 64, 67, 68, 81) 宮城島 (67) 久米島 (65, 68) 池間島 (66, 65) 宮古島 (66, 67, 68, 69) 来間島 (66) 多良間島 (66, 68) 石垣島 (63, 64, 67, 68) 小浜島 (0, 67) 西表島 (0, 63, 64, 67, 68, 95) 与那国島 (67, 68) 魚釣島 (59) 黄尾ショウ (59) “沖繩” (25)
21. *Spermophora junkoae* Irie 1997 ヒメユウレイグモ
 沖繩島 (0) 石垣島 (0, 16) 西表島 (0, 16)

Tetrablemmidae ジャバラグモ科

22. *Ablemma shimojanai* (Komatsu 1968) ジャバラグモ
 南大東島 (67, 68) 伊江島 (67, 68) 沖繩島 (26, 67, 68) 伊計島 (68) 宮城島 (67, 68) 浜比嘉島 (68) 津堅島 (68) 粟国島 (67, 68) 久米島 (65, 67, 68) 宮古島 (68, 69) 石垣島 (67, 68) 小浜島 (67, 68) 西表島 (0, 67, 68, 95) 与那国島 (67, 68)

Segestriidae エンマグモ科

- ・ *Ariadna lateralis* (Karsch 1881) ミヤグモ
 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58)

Dysderidae イノシグモ科

- ・ *Dysdera crocota* C. Koch 1838 イノシグモ
 ドイツの博物館に保存されている日本産の標本以外には日本からの確実な採集例は無い。
 “沖繩” (25)

Oonopidae タマゴグモ科

- 筆者らもダニグモ類の標本は採集しているが同定を保留している。
- ・ *Gamasomorpha cataphracta* Karsch 1881 ダニグモ
 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58) 魚釣島 (59) “沖繩” (25)
- ・ *Ischnothyreus narutomii* (Nakatsuji 1942) ナルトミダニグモ
 北大東島 (68) 伊江島 (68) 沖繩島 (67, 68) 宮城島 (67, 68) 南小島 (59)
- ・ *Opopaea syarakui* (Komatsu 1967) シャラクダニグモ

魚釣島 (59) 南小島 (59) 北小島 (59)

Mimetidae センショウグモ科

- 23 . *Mimetus ryukyus* Yoshida 1993 リュウキュウセンショウグモ
沖縄島 (0, 81, 116) 石垣島 (158) 西表島 (0, 115) 与那国島 (158)

Oecobiidae チリグモ科

- 24 . *Oecobius annulipes* Lucas 1846 チリグモ
硫黄島 (0) 沖縄島 (57, 64) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58) “八重山群島” (57)
- ・ *Uroctea compactilis* L. Koch 1878 ヒラタグモ
沖縄島 (57) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58) “沖縄” (25)

Hersiliidae ナガイボグモ科

筆者らも沖縄県におけるナガイボグモ科のクモの生息は確認しているが、種名を確定するにはいたっていない。

- ・ *Hersilia savignyi* Lucas 1836 ナガイボグモ
石垣島 (15) 西表島 (15) 沖縄 (25)

Uroboridae ウズグモ科

- 25 . *Hyptiotes affinis* Bösenberg & Strand 1906 オウギグモ
南大東島 (0, 7) 沖縄島 (0, 81) 伊良部島 (10)
- 26 . *Miagrammopes oblongus* Yoshida 1982 ミドリマネキグモ
石垣島 (0, 150) 西表島 (0, 95, 150)
- 27 . *Miagrammopes orientalis* Bösenberg & Strand 1906 マネキグモ
沖縄島 (0, 64, 81, 65) 古宇利島 (8) 久米島 (60) 宮古島 (58, 69) 西表島 (0, 95)
- 28 . *Otonoba grandiprojecta* Yoshida 1981 クメジマウズグモ
久米島 (147, 153)
- 29 . *Otonoba okinawensis* Yoshida 1981 オキナウズグモ
沖縄島 (0, 81, 147, 153) 渡加敷島 (153)
- 30 . *Otonoba rimosa* Yoshida 1995 イヘヤウズグモ
伊平屋島 (153)
- 31 . *Otonoba senkakuensis* Yoshida 1995 センカクウズグモ
魚釣島 (153)
- ・ *Otonoba sybotides* (Bösenberg & Strand 1906) カタハリウズグモ

その後のウズグモ類の研究成果から考えてすべて誤同定であろう。

久米島 (65) 宮古島 (58) 魚釣島 (59) 八重山群島 (57)

32. *Octonoba tanakai* Yoshida 1981 ミヤコウズグモ

宮古島 (147, 153)

・ *Octonoba varians* (Bösenberg & Strand 1906) ウズグモ

その後のウズグモ類の研究成果から考えてすべて誤同定であろう。

南大東島 (7) 伊江島 (67) 瀬底島 (5) 沖縄島 (1, 57, 64, 67, 74) 宮城島 (67) 浜比嘉島 (6) 屋嘉比島 (4) 久場島 (4) 久米島 (65) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 67, 69) 伊良部島 (10, 66) 来間島 (66) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (30, 31, 63, 64) 波照間島 (11) 与那国島 (58) 魚釣島 (59) “八重山群島” (57)

33. *Octonoba yaeyamensis* Yoshida 1981 ヤエヤマウズグモ

石垣島 (0, 147, 153) 西表島 (0, 95, 147, 153)

34. *Octonoba yaginumai* Yoshida 1981 ハマウズグモ

沖縄島 (147, 153)

35. *Philoponella prominens* (Bösenberg & Strand 1906) マツガエウズグモ

沖縄島 (0) 小浜島 (0) 西表島 (0, 106)

36. *Zosis geniculatus* (Olivier 1789) ミナミウズグモ

南大東島 (0) 伊是名島 (70) 伊江島 (67) 沖縄島 (0, 64, 67, 68, 74, 81) 宮城島 (67) クダカ島 (67) 粟国島 (67) 渡名喜島 (67) 久米島 (65, 67) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 67, 68, 69) 伊良部島 (66) 来間島 (66) 多良間島 (66) 石垣島 (58, 63, 64, 67, 134) 西表島 (58, 63, 64, 67) 与那国島 (58, 67) 南小島 (59) “八重山群島” (57)

Nesticidae ホラヒメグモ科

37. *Nesticus brevipes* Yaginuma 1970 コホラヒメグモ

与那国島 (138)

38. *Nesticus mogera* Yaginuma 1972 チビホラヒメグモ

南大東島 (138) 硫黄島 (0) 沖縄島 (138) 宮古島 (67, 68, 69, 138) 来間島 (67, 68, 138) 西表島 (0)

39. *Nesticus okinawaensis* Yaginuma 1979 オキナワホラヒメグモ

沖縄島 (138) 久米島 (138)

Theridiidae ヒメグモ科

・ *Achaearanea angulithorax* (Bösenberg & Strand 1906) ツリガネヒメグモ

沖縄島 (61, 64) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58)

・ *Achaearanea asiatica* (Bösenberg & Strand 1906) キヒメグモ

“ 沖縄 ”(25)

40. *Achaearanea culicivola* (Bösenberg & Strand 1906) カグヤヒメグモ
本種の同定についてはさらに検討する必要があるが、現段階では発表されたまま残しておく。
沖縄島(81)西表島(95)
41. *Achaearanea japonica* (Bösenberg & Strand 1906) ヒメグモ
南大東島(7)伊平屋島(70)瀬底島(5)沖縄島(0,61,64,74)浜比嘉島(6)久米島(65)宮古島(58,65,66,69)伊良部島(10)石垣島(0,58,63,64)西表島(0,58,63,64,95,134)波照間島(96)与那国島(58)
42. *Achaearanea tepidariorum* (C. Koch 1841) オオヒメグモ
次の記録すべてを確実な記録としては扱えない。筆者らは沖縄島における本種の生息を再確認することはできたが、沖縄県内には近似の別種が生息しており、それを誤同定している場合が多いと思われる。筆者らのうち谷川が西表から報告したものは、再検討の結果、近似別種を誤同定していたことが判明した。
伊平屋島(70)沖縄島(0,1,30,31,57,61,64,67,68,74,81,133)屋嘉比島(4)久場島(4)久米島(65)宮古島(58,65,66,68,69)伊良部島(10)石垣島(58,63,64)西表島(58,63,64,95)与那国島(58,68)魚釣島(59)南小島(59)“八重山群島”(57)“沖縄”(25)
43. *Anelosimus crassipes* (Bösenberg & Strand 1906) アシプトヒメグモ
伊平屋島(70)伊是名島(70)沖縄島(0,62,64,81,148)久米島(65)石垣島(63,64,68,148)小浜島(0)西表島(0,95,148)黄尾ショウ(59)
44. *Anelosimus exiguus* Yoshida 1986 コアシプトヒメグモ
沖縄島(0,81)石垣島(148)小浜島(0)西表島(0,95,148)
45. *Argyrodes bonadea* (Karsch 1881) シロカネイソウロウグモ
北大東島(0)南大東島(0,7)伊平屋島(70)伊是名島(70)瀬底島(5)沖縄島(0,1,61,64,67,74,76,78,81,133)古宇利島(8)浜比嘉島(6)久米島(65,68,60)宮古島(58,65,66,69)伊良部島(10,66)石垣島(58)小浜島(0)西表島(0,58,63,64,95,117)波照間島(11,96)与那国島(58)魚釣島(59)黄尾ショウ(59)“沖縄”(25)
46. *Argyrodes cylindratus* Thorell 1889 トビジロイソウロウグモ
沖縄島(81)久米島(65)西表島(0,95)
47. *Argyrodes cylindrogaster* (Simon 1888) オナガグモ
伊是名島(70)沖縄島(0,61,64,74,81)久米島(65,60)池間島(66)宮古島(58,65,66,69)石垣島(58,63,64)西表島(0,58,95)与那国島(58)魚釣島(59)“沖縄”(25)
48. *Argyrodes fissifrons* O. P.-Cambridge 1869 チリイソウロウグモ
南大東島(0,70)沖縄島(0,61,64,67,68,74,81,133)久米島(65,60)

- 宮古島 (58 , 65 , 66 , 69) 伊良部島 (10 , 66 , 58) 西表島 (0 , 58 , 63 , 64) 与那国島 (58) “ 沖縄 ” (25)
- 49 . *Argyrodes flavescens* O. Pickard-Cambridge 1880 ミナミノアカイソウロウグモ
南大東島 (0) 沖縄島 (0 , 78 , 81 , 125) 宮古島 (125) 石垣島 (125) 竹富島 (125)
西表島 (0 , 125)
- 50 . *Argyrodes fur* Bösenberg & Strand 1906 フタオイソウロウグモ
沖縄島 (0) 西表島 (0 , 103)
- 51 . *Argyrodes miniaceus* (Doleschall 1867) アカイソウロウグモ
次に掲げる記録のうちほぼすべては前出のミナミノアカイソウロウグモを本種に誤同定したものであると思われる。しかし、最近の研究の結果、少数ながら本種も沖縄県に生息することが判明しているので、はなはだ不正確にはなってしまうが、過去の記録のままをここに掲げておくことにする。
- 伊平屋島 (0) 伊是名島 (70) 瀬底島 (5) 沖縄島 (61 , 64 , 74 , 76 , 133) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65) 宮古島 (65 , 66 , 68 , 69) 伊良部島 (10) 石垣島 (58 , 63 , 64) 西表島 (0 , 58 , 63 , 64 , 125) 与那国島 (58) “ 沖縄 ” (25)
- ・ *Argyrodes saganus* (Dönitz & Strand 1906) ヤリグモ
近似別種を誤同定したものであろう。
- 伊是名島 (70 , 58) 沖縄島 (74) 宮古島 (69) 石垣島 (58) 西表島 (30 , 31 , 58 , 63 , 64) 与那国島 (58)
- 52 . *Argyrodes xiphias* Thorell 1887 ハナナガイソウロウグモ
石垣島 (156) 西表島 (0 , 115) 与那国島 (156)
- 53 . *Chrosiothes sudabides* (Bösenberg & Strand 1906) ヨソコブヒメグモ
“ Okinawa Islands ” (146)
- ・ *Chryssso argyrodiformis* (Yaginuma 1952) オダカグモ
次種を誤同定したものであろう。
- 沖縄島 (64 , 74) 久米島 (65)
- 54 . *Chryssso pulcherrima* (Mello-Leitao 1917) ミナミオダカグモ
南大東島 (0) 沖縄島 (0 , 81 , 155) 西表島 (0 , 115 , 155)
- 55 . *Chryssso spiniventris* (O. P.-Cambridge 1869) アシナガヒメグモ
石垣島 (0) 石垣島 (144) 小浜島 (0) 西表島 (0 , 95)
- ・ *Chryssso venusta* (Yaginuma 1957) コガネヒメグモ
沖縄島 (64)
- 56 . *Chryssso viridiventris* Yoshida 1996 リュウキュウミドリヒメグモ
沖縄島 (0 , 81) 久米島 (160) 石垣島 (160) 西表島 (160)
- 57 . *Coleosoma blandum* O. P.-Cambridge 1882 サヤヒメグモ
北大東島 (68) 沖縄島 (67) 石垣島 (145) 小浜島 (0) 西表島 (0 , 95 , 104 , 106)

- 58 . *Coleosoma floridanum* Banks 1900 ヨシダサヤヒメグモ
西表島 (0 , 104 , 106)
- ・ *Coleosoma octomaculatum* (Bösenberg & Strand 1906) ヤホシサヤヒメグモ
ヨシダサヤヒメグモかあるいはヤマトミジグモのうち黒点のあるものを誤同定したのであ
らう .
沖縄島 (64) 宮古島 (58 , 69)
- 59 . *Coscinida japonica* Yoshida 1994 トガリクサチヒメグモ
西表島 (0 , 115)
- 60 . *Dipoena amamiensis* (Yoshida 1985) アマミミジグモ
沖縄島 (0) 石垣島 (152) 西表島 (0 , 103)
- 61 . *Dipoena flavmarginata* Bösenberg & Strand 1906 ケベリミジグモ
西表島 (0 , 106)
- 62 . *Dipoena japonica* (Yoshida 1985) ヤマトミジグモ
沖縄島 (81) 西表島 (0 , 115 , 152)
- 63 . *Dipoena mustelina* (Simon 1888) カニミジグモ
沖縄島 (0 , 81) 西表島 (0 , 30 , 31 , 63 , 64 , 95) 魚釣島 (59) 黄尾ショウ (59)
- 64 . *Enoplognatha transversifoveata* (Bösenberg & Strand 1906) カレハヒメグモ
沖縄島 (0) 黄尾ショウ (59)
- 65 . *Episinus affinis* Bösenberg & Strand 1906 ヒシガタグモ
沖縄島 (0 , 39 , 64 , 81) 宮古島 (58 , 69) 石垣島 (39 , 58) 西表島 (0 , 39 , 58 ,
95) 与那国島 (39 , 58)
- 66 . *Episinus nubilus* Yaginuma 1960 ムラクモヒシガタグモ
沖縄島 (0 , 81) 西表島 (0 , 39 , 106)
- 67 . *Euryopsis taczanowskii* Keyserling 1886 シロカネヒラタヒメグモ
伊是名島 (154) 沖縄島 (154)
- 68 . *Latrodectus geometricus* (C.L.Koch 1841) ハイイロゴケグモ
北大東島 (0) 沖縄島 (0)
- ・ *Latrodectus hasseltii* Thorell 1870 セアカゴケグモ
次の記録はすべて、次々種アカオビゴケグモ (ヤエヤマゴケグモ) と称されている種名不明種
を誤同定したものであろう .
石垣島 (15 , 63 , 64) 西表島 (15 , 21 , 63 , 64)
- ・ *Latrodectus mactans* (Fabricius 1775) クロゴケグモ
次の記録は前種と同じく、次々種アカオビゴケグモ (ヤエヤマゴケグモ) と称されている種名不
明種を誤同定したものであろう .
石垣島 (129) 西表島 (129)
- ・ *Latrodectus* sp. アカオビゴケグモ

種名不明なので整理番号は与えない。(異名: ヤエヤマゴケグモ)

西表島(0, 119)

69. *Moneta tanikawai* (Yoshida 1991) ヤエヤマヒシガタグモ
沖縄島(0, 39) 石垣島(151) 西表島(0, 39, 106, 151)
70. *Pholcomma nigromaculatum* Yoshida 1987 クロボシカブトヒメグモ
沖縄島(0) 西表島(0, 95, 149)
71. *Phoroncidia ryukyuensis* Yoshida 1979 リュウキュウツクネグモ
沖縄島(0) 石垣島(146) 西表島(0, 95, 146)
72. *Argyrodes melanosoma* (Yaginuma 1957) クロマルイソウロウグモ
沖縄島(0, 81) 西表島(0, 103, 124)
73. *Steatoda cavernicola* (Bösenberg & Strand 1906) ハンゲツオスナキグモ
伊平屋島(70) 沖縄島(61, 64) 宮古島(58, 69) 石垣島(0, 58) 西表島(0, 58, 95) 与那国島(58)
74. *Steatoda erigoniformis* (O. P.-Cambridge 1872) ナナホシヒメグモ
西表島(0, 95)
75. *Theridion adamsoni* Berland 1934 サトヒメグモ
北大東島(0) 西表島(0, 95)
76. *Theridion lyricum* Walckenaer 1841 シモフリヒメグモ
西表島(0, 106)
77. *Theridion rapulum* Yaginuma 1960 ギボシヒメグモ
伊平屋島(70) 沖縄島(0, 61, 64, 81) 屋嘉比島(4) 久場島(4) 久米島(65, 60)
・ *Theridion riparium* Blackwall 1834 イワマヒメグモ
“ 沖縄 ”(25)
78. *Theridion rufipes* Lucas 1846 アカアシヒメグモ
西表島(0, 104, 106)
79. *Theridion yaeyamense* Yoshida 1993 ヤエヤマヒメグモ
石垣島(157) 西表島(0, 115, 157)
80. *Thymoites yaginumai* Yoshida 1995 ヤギヌマササヒメグモ
与那国島(159)

Anapidae ヨリメグモ科

81. *Conculus lyugadinus* Komatsu 1940 ヨリメグモ
沖縄島(0, 61, 64, 67, 68) 宮城島(67, 68) 久米島(67, 68) 石垣島(67, 68)
小浜島(67) 黒島(67, 68) 西表島(0, 67, 68, 95) 与那国島(67, 68)

Linyphiidae サラグモ科

- 91 . *Leucauge blanda* (L. Koch 1878) チュウガタシロカネグモ
北大東島 (0) 南大東島 (7) 伊是名島 (70) 瀬底島 (5) 沖縄島 (0, 1, 30, 31, 61, 64, 67, 74, 81, 130, 133) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65, 60) 宮古島 (58, 65, 66, 69, 58) 伊良部島 (10) 石垣島 (63, 64) 小浜島 (0) 西表島 (0, 30, 31, 58, 63, 64, 95) 波照間島 (11, 96) 与那国島 (0, 58)
- 92 . *Leucauge crucinota* (Bösenberg & Strand 1906) チビシロカネグモ
沖縄島 (61, 64, 133) 宮古島 (58, 69) 西表島 (0, 30, 31, 58, 63, 64, 103, 134)
- 93 . *Leucauge decorata* (Blackwall 1864) トガリシロカネグモ
西表島 (0, 98, 103)
- 94 . *Leucauge magnifica* Yaginuma 1954 オオシロカネグモ
伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 沖縄島 (0, 30, 31, 61, 64, 68, 81, 133) 久米島 (65, 60) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (0, 30, 31, 58, 63, 64, 95) 波照間島 (11) 与那国島 (58) 魚釣島 (59)
- 95 . *Leucauge subblanda* Bösenberg & Strand 1906 コシロカネグモ
南大東島 (7) 瀬底島 (5) 沖縄島 (30, 61, 64, 81) 久米島 (65) 石垣島 (0) 西表島 (0, 30, 63, 64, 95)
- 96 . *Meta reticuloides* Yaginuma 1958 ヤマジドヨウグモ
沖縄島 (0, 61, 64, 81) 宮古島 (58, 69)
- 97 . *Metleucauge chikunii* Tanikawa 1992 チクニドヨウグモ
西表島 (0, 108, 115)
- ・ *Metleucauge kompirensis* (Bösenberg & Strand 1906) タニマノドヨウグモ
チクニドヨウグモを誤同定したのであろう。
久米島 (60) 宮古島 (58, 69)
- 98 . *Nephila clavata* L. Koch 1878 ジョロウグモ
現在沖縄島南部から南の地域ではジョロウグモの生息は確認されていない。したがって、先島諸島からの記録は誤同定の疑いがあるが、ジョロウグモを誤同定することもまた信じがたいことである。オオジョロウグモの幼体でも見誤ったのであろうか。あるいは過去にははるか南まで分布していたのであろうか？
南大東島 (7) 瀬底島 (5) 沖縄島 (0, 15, 61, 64, 67, 68, 77, 78, 81, 133) 古宇利島 (8) 屋嘉比島 (4) 久米島 (65, st) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 伊良部島 (66) 石垣島 (58) 西表島 (58) 波照間島 (11) 与那国島 (58) “沖縄” (25)
- 99 . *Nephila maculata* (Fabricius 1793) オオジョロウグモ
南大東島 (7) 伊平屋島 (70) 瀬底島 (5) 沖縄島 (0, 1, 15, 61, 64, 67, 68, 74, 75, 76, 77, 78, 81, 130, 133) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65, 68, 60) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 68, 69) 伊良部島 (10, 66) 来間島 (66) 多良間

島 (66) 石垣島 (58, 63, 64, 68) 西表島 (0, 30, 31, 58, 63, 64, 95, 112, 122, 123) 与那国島 (58) “沖繩”(25)

・ *Nephilengys malabarensis* (Walckenaer 1841) マラバルジョロウグモ
“沖繩”(25)

100. *Tetragnatha bituberculata* L. Koch 1867 チョコアシナガグモ
西表島 (0, 118)

・ *Tetragnatha caudicula* (Karsch 1879) トガリアシナガグモ

誤同定であろう。おそらく、糸疣の位置(トガリアシナガグモの糸疣は腹部先端近くにあり、オナガアシナガグモの糸疣は腹部のほぼ中央にあるという見分け方)によって同定されたものと思われるが、筆者の研究ではオナガアシナガグモにも糸疣が腹部先端近くにあるものが存在する。次の各記録はオナガアシナガグモのうち、糸疣が腹部の先端近くにあるタイプのものをトガリアシナガグモと誤同定したのではないかと考えている。

南大東島 (35, 62, 64) 石垣島 (35) 西表島 (35, 63, 64)

101. *Tetragnatha ceylonica* O. P.-Cambridge 1869 セイロンアシナガグモ
石垣島 (33) 西表島 (0, 33, 35, 95) 与那国島 (33, 35)

102. *Tetragnatha chauliodus* (Thorell 1890) ヒルギアシナガグモ
西表島 (0, 98, 103)

103. *Tetragnatha iriomotensis* Okuma 1991 イリオモテアシナガグモ
沖繩島 (0, 116) 西表島 (0, 38, 106)

104. *Tetragnatha javana* Thorell 1890 オナガアシナガグモ
南大東島 (0) 伊是名島 (70) 沖繩島 (0, 35, 81) 石垣島 (35) 西表島 (0, 35, 95)

105. *Tetragnatha lautia* Yaginuma 1959 キヌアシナガグモ
沖繩島 (0, 36, 61)

106. *Tetragnatha makiharai* Okuma 1977 リュウキュウアシナガグモ
西表島ではリュウキュウアシナガグモとセイロンアシナガグモとが両種とも生息している。
沖繩島 (0, 29, 34, 35) 久米島 (35) 西表島 (0, 95)

107. *Tetragnatha mandibulata* Walckenaer 1841 オオアシナガグモ
北大東島 (0) 南大東島 (0) 伊是名島 (70) 沖繩島 (0, 81) 久米島 (65, 60) 西表島
(0, 95) “琉球列島”(36)

108. *Tetragnatha maxillosa* Thorell 1895 ヤサガタアシナガグモ
南大東島 (0) 沖繩島 (0, 61, 64, 81, 130) 久米島 (65, 60) 石垣島 (0, 63, 64)
西表島 (0, 30, 31, 63, 64, 95) 尖閣諸島 (0)

・ *Tetragnatha nepiformis* Doleschall 1859 タイワンアシナガグモ
“沖繩”(25)

109. *Tetragnatha nitens* (Audouin 1827) ヒカリアシナガグモ
北大東島 (0) 南大東島 (0) 伊是名島 (70) 沖繩島 (0, 32, 81) 久米島 (65) 石垣島

- ・ *Araneus pseudocentrodus* Bösenberg & Strand 1906 トガリオニグモ
 沖縄県産の標本が真のトガリオニグモであるか否かについては詳細に再検討する必要がある。
 筆者らもトガリオニグモ類似種の標本は所持しているが同定を保留している。
 沖縄島 (64, 81) 西表島 (30, 31, 63, 64)
- 117. *Araneus tartaricus* (Kroneberg 1875) コケオニグモ
 本種の分類学的位置に関しては今後更に研究する必要がある。
 沖縄島 (0, 30, 31)
- 118. *Araneus ventricosus* (L. Koch 1878) オニグモ
 伊平屋島 (70) 沖縄島 (0, 61, 64, 67, 68, 74, 78, 81) 久場島 (4) 久米島 (65, 60) 宮古島 (58, 66, 69) 伊良部島 (10) 石垣島 (58, 63, 64) 小浜島 (0) 西表島 (0, 58, 63, 64, 95) 魚釣島 (59)
- 119. *Araneus viperifer* Schenkel 1963 カラオニグモ
 沖縄島 (0) 久米島 (0)
- 120. *Araneus viridiventrtris* Yaginuma 1969 ハラビロミドリオニグモ
 沖縄島 (0) 沖縄島 (81) 西表島 (0, 103)
- 121. *Argiope aemula* (Walckenaer 1841) ナガマルコガネグモ
 北大東島 (0) 南大東島 (0, 7) 伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 伊江島 (67) 瀬底島 (5) 沖縄島 (0, 1, 22, 61, 64, 68, 74, 81, 130, 133) 古宇利島 (8) 久米島 (65, 60) 池間島 (66) 宮古島 (30, 31, 58, 65, 66, 69) 来間島 (66) 多良間島 (66) 石垣島 (13, 58, 63, 64) 西表島 (0, 58, 63, 64, 95, 117) 波照間島 (11) 与那国島 (58) “八重山群島”(56) “八重山”(22) “沖縄”(25)
- ・ *Argiope aetheroides* Yin et al 1989 ムシバミコガネグモ
 コガタコガネグモのうち大型の個体を本種に誤同定したのであろう。
 宮古島 (66) 石垣島 (22)
- 122. *Argiope amoena* L. Koch 1878 コガネグモ
 伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 沖縄島 (0, 61, 64, 81, 133) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 多良間島 (66) 石垣島 (63, 64) 西表島 (58, 63, 64) “沖縄”(25)
- ・ *Argiope arcuata* Simon 1887 ナナイボコガネグモ
 “沖縄”(25)
- ・ *Argiope boesenbergi* Levi 1983 チュウガタコガネグモ
 伊是名島 (70) 沖縄島 (61, 64) 久米島 (65) 宮古島 (65, 69) 石垣島 (63, 64) 西表島 (63, 64) “沖縄”(25) “琉球”(22)
- 123. *Argiope bruennichii* (Scopoli 1772) ナガコガネグモ
 伊是名島 (70) 沖縄島 (64, 81, 133) 久米島 (65) 宮古島 (58, 69, 65)
- ・ *Argiope lobata* Pallas 1772 ウスイロコガネグモ

- 133 . *Cyrtophora exanthematica* (Doleschall 1859) キヌアミグモ
 沖縄島 (0 , 64 , 81) 久米島 (65) 宮古島 (58) 石垣島 (58) 西表島 (0 , 58 , 63 , 64 ,
 95) 与那国島 (58) “ 沖縄 ” (25)
- 134 . *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall 1857) スズミグモ
 北大東島 (15) 南大東島 (15 , 7) 伊平屋島 (70) 沖縄島 (0 , 15 , 61 , 64 , 67 , 68 ,
 74 , 76 , 77 , 81 , 133) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65 , 60) 宮古島 (69) 多良間島 (15 ,
 66) 西表島 (0 , 30 , 31 , 63 , 64 , 95) “ 沖縄 ” (132)
- 135 . *Cyrtophora unicolor* (Doleschall 1857) ハラヒロスズミグモ
 南大東島 (0) 沖縄島 (15 , 74 , 76 , 77 , 81) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 宮古島 (65 ,
 66 , 69) 伊良部島 (10 , 15 , 66) 石垣島 (0) 小浜島 (0) 西表島 (0 , 95 , 113)
- ・ *Gasteracantha kuhlii* C. Koch 1837 トゲグモ
 沖縄島 (61 , 64 , 133) 久米島 (65) 宮古島 (69) 石垣島 (63 , 64) 西表島 (63 , 64)
 “ 沖縄 ” (25) “ 琉球 ” (24)
- 136 . *Gasteracantha mammosa* C. Koch 1844 チブサトゲグモ
 南大東島 (7) 伊平屋島 (0 , 70 , 96) 伊是名島 (70) 瀬底島 (5) 沖縄島 (0 , 1 , 15 ,
 61 , 64 , 68 , 74 , 76 , 81 , 96 , 130 , 133) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 久米島 (65 ,
 60) 池間島 (66) 宮古島 (30 , 31 , 58 , 65 , 66 , 67 , 69) 伊良部島 (66) 下地島 (66)
 来間島 (66) 多良間島 (66) 石垣島 (0 , 63 , 64) 小浜島 (0) 竹富島 (28) 西表島 (0 ,
 28 , 63 , 64 , 95) 波照間島 (0 , 11 , 96) “ 沖縄 ” (25) “ 琉球 ” (24)
- ・ *Herennia ornatissima* (Doleschall 1859) ケハイグモ
 “ 沖縄 ” (25)
- 137 . *Hypsosinga pygmaea* (Sundevall 1831) ヨツボシショウジョウグモ
 西表島 (0 , 95)
- 138 . *Hypsosinga sanguinea* (C. Koch 1844) シロスジショウジョウグモ
 沖縄島 (0) 西表島 (0 , 95)
- 139 . *Larinia argiopiformis* Bösenberg & Strand 1906 コガネグモダマシ
 伊是名島 (70) 沖縄島 (0 , 1 , 61 , 64) 古宇利島 (8) 池間島 (66) 宮古島 (58 , 69)
 多良間島 (66) 魚釣島 (59) 南小島 (59) 黄尾ショウ (59)
- 140 . *Larinia fusiformis* (Thorell 1877) ネットアイコガネグモダマシ
 沖縄島 (0 , 81) 西表島 (0 , 97 , 103)
- 141 . *Larinia onoi* Tanikawa 1989 ムネグロコガネグモダマシ
 西表島 (0 , 97 , 103)
- 142 . *Larinia phthisica* (L. Koch 1871) ミナミコガネグモダマシ
 西表島 (0 , 97 , 103)
- ・ *Neoscona adianta* (Walckenaer 1802) ドヨウオニグモ
 沖縄島 (64 , 133) 西表島 (30 , 31 , 63 , 64) “ 沖縄 ” (25)

- 154 . *Poltys columnaris* Thorell 1890 ツツゲホウグモ
久米島 (60) 西表島 (0 , 95)
- 155 . *Poltys illepidus* C. Koch 1843 ゲホウグモ
伊平屋島 (70) 沖縄島 (74 , 81) 久場島 (4) 宮古島 (69) 伊良部島 (10) 多良間島 (66)
小浜島 (0) 西表島 (0 , 95) 与那国島 (11) “ 沖縄 ” (25)
- 156 . *Zilla astridae* (Strand 1917) サガオニグモ
西表島 (0 , 64 , 95) 魚釣島 (59)
- ・ *Zilla sachalinensis* (S. Saito 1934) カラフトオニグモ
西表島 (63 , 64)
- Lycosidae コモリグモ科
- 157 . *Arctosa depectinata* (Bösenberg & Strand 1906) カガリビコモリグモ
石垣島 (92) 西表島 (0 , 92 , 95)
- 158 . *Arctosa japonica* (Simon 1888) ヒノマルコモリグモ
沖縄島 (0) 宮古島 (58 , 69) 石垣島 (58 , 64 , 135) 西表島 (0 , 58 , 90 , 95)
- 159 . *Arctosa laminata* Yu & Song 1988 ネットアイコモリグモ
沖縄島 (0 , 81 , 88 , 92)
- ・ *Arctosa subamylacea* (Bösenberg & Strand 1906) クロココモリグモ
沖縄島 (30 , 64) 宮古島 (58 , 69) 西表島 (64)
- ・ *Pardosa astrigera* L. Koch 1878 ウツキコモリグモ
沖縄島 (64) 宮古島 (58 , 69) 石垣島 (58 , 64) 西表島 (58 , 63 , 64) 波照間島 (11)
与那国島 (58) 魚釣島 (59)
- 160 . *Pardosa jambaruensis* Tanaka 1990 ヤンバルコモリグモ
沖縄島 (0 , 91 , 93)
- 161 . *Pardosa laevitarsis* Tanaka & Suwa 1986 タテスジハリゲコモリグモ
沖縄島 (0 , 81 , 93 , 94)
- 162 . *Pardosa okinawensis* Tanaka 1985 リュウキュウコモリグモ
沖縄島 (0 , 81 , 84 , 85)
- 163 . *Pardosa oriens* (Chamberlin 1924) ヒガシコモリグモ
硫黄島 (0) 沖縄島 (87 , 93) 石垣島 (87 , 93) 西表島 (0 , 87 , 93 , 103) 与那国
島 (87 , 93)
- 164 . *Pardosa pseudoannulata* (Bösenberg & Strand 1906) キクツキコモリグモ
伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 伊江島 (67 , 68) 沖縄島 (0 , 1 , 30 , 31 , 61 , 64 ,
67 , 68 , 81 , 133) 宮城島 (67 , 68) 久米島 (65 , 60) 宮古島 (58 , 65 , 66 , 68 ,
69) 多良間島 (66) 石垣島 (63 , 64 , 67 , 93) 西表島 (0 , 63 , 64 , 93 , 95) 波照間
島 (11) 与那国島 (93)

- 165 . *Pardosa takahashii* (S. Saito 1936) スナハラコモリグモ
 北大東島 (0, 93) 伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 沖縄島 (0, 1, 93) 屋嘉比島 (4)
 宮古島 (93) 石垣島 (58, 93) 西表島 (0, 58, 93, 95) 与那国島 (58) “八重山群島”
 (56)
- 166 . *Pardosa yaginumai* Tanaka 1977 キシベコモリグモ
 伊是名島 (96) 沖縄島 (0)
- 167 . *Pirata clercki* (Bösenberg & Strand 1906) クラークコモリグモ
 沖縄島 (81) 西表島 (0, 86, 95)
- 168 . *Pirata iriomotensis* Tanaka 1989 イリオモテコモリグモ
 沖縄島 (81) 西表島 (0, 89, 95, 103)
- 169 . *Pirata meridionalis* Tanaka 1974 ミナミコモリグモ
 西表島 (0, 95)
- 170 . *Pirata subpiraticus* (Bösenberg & Strand 1906) キバラコモリグモ
 沖縄島 (0)
- 171 . *Trochosa aquatica* Tanaka 1985 ナガズキンコモリグモ
 北大東島 (0) 南大東島 (0) 沖縄島 (0) 小浜島 (0) 西表島 (0, 95)

Pisauridae キシダグモ科

- ・ *Dolomedes okinawensis* Kishida 1924 オキナワハシリグモ
 正体不明種である。基準標本は幼体であり、しかも残されていない。
 沖縄島 (23) “沖縄” (25)
- 172 . *Dolomedes raptor* Bösenberg & Strand 1906 アオグロハシリグモ
 沖縄島 (15, 64, 67, 68) 久米島 (60) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (0,
 58, 63, 64, 95) 与那国島 (58)
- ・ *Dolomedes saganus* Bösenberg & Strand 1906 スジアカハシリグモ
 宮古島 (58, 69) “沖縄” (25)
- ・ *Dolomedes sulfureus* L. Koch 1878 イオウイロハシリグモ
 久米島 (60)
- 173 . *Hygropoda higenaga* (Kishida 1936) ヒゲナガハシリグモ
 沖縄島 (0, 23, 62, 64) 西表島 (0, 95) “沖縄” (25)
- ・ *Perenethis fascigera* (Bösenberg & Strand 1906) ハヤテグモ
 次種を誤同定したのであろう。
 沖縄島 (61, 64, 67, 68) 久米島 (65) 石垣島 (63, 64) 魚釣島 (59)
- 174 . *Perenethis venusta* L. Koch 1878 ミナミハヤテグモ
 沖縄島 (0) 西表島 (0, 95, 136)

Oxyopidae ササグモ科

175. *Oxyopes macilentus* L. Koch 1878 シマササグモ
伊平屋島 (70) 沖縄島 (0, 61, 64, 81) 久米島 (65) 宮古島 (58, 69) 多良間島 (66)
石垣島 (63, 64) 小浜島 (0) 西表島 (0, 63, 64, 95)
176. *Oxyopes sertatus* L. Koch 1878 ササグモ
沖縄島 (64, 81) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 小浜島 (0) 西表島 (0, 58, 63, 64,
95, 134) 波照間島 (11) 与那国島 (58) “ 沖縄 ” (25)

Ctenidae シボグモ科

177. *Anahita fauna* Karsch 1879 シボグモ
伊是名島 (70) 伊江島 (68) 沖縄島 (0, 64, 67, 68, 74, 81) 宮城島 (68) 津堅島
(68) 久米島 (68) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 67, 69) 伊良部島 (66) 多良
間島 (66) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (58, 63, 64) 与那国島 (58) 魚釣島 (59)
南小島 (59) “ 沖縄 ” (25)

Agelenidae タナグモ科

- ・ *Agelena limbata* Thorell 1879 クサグモ
筆者らもクサグモ近似種の標本は採集しているが、同定を保留している。同定が正しいか否か
についてさらに研究する必要がある。
宮古島 (58, 69) 西表島 (58) 与那国島 (58)
- ・ *Tegenaria domestica* (Clerck 1758) イエタナグモ
沖縄島 (57) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (58) 与那国島 (58) “ 八
重山群島 ” (57) “ 沖縄 ” (25)

Cybaeidae ナミハグモ科

- ・ *Cybaeus mellottei* (Simon 1886) ナミハグモ
沖縄島 (64)

Desidae ウシオグモ科

178. *Desis japonica* Yaginuma 1956 ヤマトウシオグモ
沖縄島 (15, 61, 64)
179. *Paratheuma shirahamaense* (Oi 1960) イソタナグモ
魚釣島 (59) 南小島 (59) 北小島 (59) “ 尖閣諸島 ” (142)

Dictynidae ハグモ科

- ・ *Cicurina japonica* (Simon 1886) コタナグモ

“ 沖縄 ”(25)

Amaurobiidae ガケジグモ科

- 180 . *Coelotes kumensis* Shimojana 1989 クメヤチグモ
久米島 (72)
- 181 . *Coelotes okinawensis* Shimojana 1989 オキナワヤチグモ
伊是名島 (72) 伊江島 (72) 沖縄島 (72) 宮城島 (72)
- 182 . *Coelotes urumensis* Shimojana 1989 ウルマヤチグモ
石垣島 (72) 竹富島 (72) 西表島 (0 , 72 , 95)
- 183 . *Coelotes yaeyamensis* Shimojana 1982 ヤエヤマヤチグモ
石垣島 (71) 西表島 (0 , 71 , 95)

Titanoecidae ヤマトガケジグモ科

- 184 . *Titanoeca laminata* (Thorell 1878) ミナミガケジグモ
西表島 (0 , 95 , 136)
- ・ *Titanoeca albofasciata* Strand 1907 ヤマトガケジグモ
南小島 (59) 北小島 (59)

Anyphaenidae イツツグモ科

- ・ *Anyphaena pugil* Karsch 1879 イツツグモ
沖縄島 (64 , 133) 宮古島 (58 , 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58)

Liocranidae ウエムラグモ科

- 185 . *Itatsina praticola* (Bösenberg & Strand 1906) イタチグモ
伊平屋島 (70) 沖縄島 (62 , 64 , 74) 久米島 (60) 宮古島 (69) 来間島 (66) 多良間島 (66) 石垣島 (58) 西表島 (0 , 30 , 31 , 58 , 63 , 64 , 95)
- 186 . *Orthobula crucifera* Bösenberg & Strand 1906 オトヒメグモ
久米島 (67) 宮古島 (66 , 69) 多良間島 (66) 西表島 (0 , 95) 黄尾ショウ (59)
- 187 . *Phrurolithus luna* Kamura 1994 ツキミノウラシマグモ
西表島 (18)
- 188 . *Phrurolithus lynx* Kamura 1994 ヤマネコウラシマグモ
沖縄島 (81) 西表島 (0 , 18 , 115)

Clubioniae フクログモ科

- 189 . *Cheiracanthium eutitha* Bösenberg & Strand 1906 アシナガコマチグモ
南大東島 (15) 伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 沖縄島 (0 , 15 , 81) 久米島 (15 , 65)

- 西表島 (0, 95) 南小島 (59)
- *Cheiracanthium japonicum* Bösenberg & Strand 1906 カバキコマチグモ
 近似の別種を誤同定したのであろう。
 伊平屋島 (70) 沖縄島 (64, 133) 屋嘉比島 (4) 宮古島 (58, 66, 69) 多良間島 (66)
 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58)
 - *Cheiracanthium lascivum* Karsch 1879 ヤマトコマチグモ
 近似の別種を誤同定したのであろう。
 沖縄島 (61, 64) 久米島 (60) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 石垣島 (58, 63, 64) 西
 表島 (58) 南小島 (59)
 - *Cheiracanthium unicum* Bösenberg & Strand 1906 ヤサコマチグモ
 近似の別種を誤同定したものであろう。
 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (30, 31, 63, 64) “ 沖縄 ” (25)
 - 190. *Clubiona cirrosa* Ono 1989 マキヒゲフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)
 - 191. *Clubiona insulana* Ono 1989 シマフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)
 - *Clubiona japonicola* Bösenberg & Strand 1906 ハマキフクログモ
 沖縄島 (1)
 - 192. *Clubiona jucunda* (Karsch 1879) ヤハズフクログモ
 沖縄島 (0, 64) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (0, 30, 31, 58, 63, 64,
 95) 与那国島 (58) “ 沖縄 ” (25)
 - 193. *Clubiona kurosawai* Ono 1986 クロサワフクログモ
 沖縄島 (0) 西表島 (0, 103)
 - 194. *Clubiona ryukyuensis* Ono 1989 リュウキュウフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)
 - 195. *Clubiona tanikawai* Ono 1989 タニカワフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)
 - 196. *Clubiona ultramarina* Ono 1989 アオミフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)
 - *Clubiona vigil* Karsch 1879 ムナアカフクログモ
 “ 沖縄 ” (25)
 - 197. *Clubiona viridula* Ono 1989 クサイロフクログモ
 西表島 (0, 49, 103)

Corinnidae ネコグモ科

- 198. *Humua takeuchii* Ono 1987 ヒメバチグモ

石垣島 (47) 西表島 (0, 95)

Zodariidae ホウシグモ科

- ・ *Asceua japonica* (Bösenberg & Strand 1906) ドウシグモ
近似の別種を誤同定したのであろう。
沖縄島 (61, 53) “ 沖縄 ” (25)
- 199 . *Mallinella fulvipes* (Ono & Tanikawa 1990) ヒアシホウシグモ
西表島 (0, 55, 103)
- 200 . *Mallinella shimojanai* (Ono & Tanikawa 1990) ヤエヤマホウシグモ
西表島 (0, 55, 103)

Trochanteriidae ヒトエグモ科

- ・ *Plator nipponicus* (Kishida 1914) ヒトエグモ
“ 沖縄 ” (25)

Prodidomidae イヨグモ科

- ・ *Prodidomus imaidzumii* Kishida 1914 イヨグモ
“ 沖縄 ” (25)

Gnaphosidae ワシグモ科

- 201 . *Cladotela auster* Kamura 1997 ハエミノチャクロワシグモ
石垣島 (20) 西表島 (20) 波照間島 (20)
- 202 . *Cladotela oculinotata* (Bösenberg & Strand 1906) チャクロワシグモ
硫黄島 (0) 伊平屋島 (70) 伊江島 (68) 沖縄島 (61, 64, 67, 68) 津堅島 (68)
久米島 (68) 宮古島 (58, 66, 68, 69) 多良間島 (66)
- 203 . *Cladotela parva* Kamura 1991 ヒメチャワシグモ
西表島 (0, 106)
- ・ *Drassodes serratidens* Schenkel 1963 トラフワシグモ
魚釣島 (59)
- 204 . *Gnaphosa kamurai* Ovtsharenko, Platnick & Song 1992 カワラメキリグモ
沖縄島 (50)
- ・ *Hitobia asiatica* (Bös. & Str. 1906) シノノメトンビグモ
“ 沖縄 ” (25)
- ・ *Hitobia unifascigera* (Bösenberg & Strand 1906) ヒトオビトンビグモ
“ 沖縄 ” (25)
- 205 . *Hitobia yasunosukei* Kamura 1992 フタオビトンビグモ

沖縄島 (17)

- 206 . *Trachyzelotes kulczynskii* (Bösenberg 1902) ナンゴクケムリゲモ
北大東島 (0) 石垣島 (20) 西表島 (20) 与那国島 (20)
- 207 . *Zelotes iriomotensis* Kamura 1994 イリオモテケムリゲモ
西表島 (0, 19, 115)

Selenopidae アワセゲモ科

- ・ *Selenops bursarius* Karsch 1879 アワセゲモ
宮古島 (58, 69) 石垣島 (58) 西表島 (58) 与那国島 (58) “沖縄”(25)

Heteropodidae アンダカゲモ科

- ・ *Heteropoda aulica* (L. Koch 1878) ニノテアンダカゲモ
正体不明である .
“沖縄”(25)
- ・ *Heteropoda forcipata* (Karsch 1881) コアンダカゲモ
近似別種を誤同定したものである .
伊是名島 (70) 沖縄島 (1, 61, 64, 67, 68, 74) 古宇利島 (8) 屋嘉比島 (4) 久場
島 (4) 久米島 (65) 宮古島 (58, 65, 66, 67, 69) 伊良部島 (10) 多良間島 (66)
石垣島 (67, 68) 小浜島 (67, 68) 西表島 (58, 63, 64, 67, 68) 波照間島 (11,
58, 67, 68)
- 208 . *Heteropoda tokarensis* Yaginuma 1961 トカラアンダカゲモ
沖縄島 (64, 133)
- 209 . *Heteropoda venatoria* (Linnaeus 1758) アンダカゲモ
北大東島 (0) 南大東島 (0) 伊是名島 (70) 沖縄島 (0, 15, 64, 67, 68, 81) 久米
島 (65) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 石垣島 (58, 63, 64) 西表島 (0,
58, 63, 64, 95) 与那国島 (58) 魚釣島 (59) “八重山群島”(57) “沖縄”(25)
- ・ *Heteropoda villosa* (L. Koch 1875) ムクゲアンダカゲモ
正体不明である .
“沖縄”(25)
- 210 . *Thelcticopsis severa* (L. Koch 1875) カマスゲモ
伊是名島 (70) 沖縄島 (0, 62, 64, 74, 81, 133) 古宇利島 (8) 久米島 (65, 60)
宮古島 (66, 68, 69) 伊良部島 (10, 66) 多良間島 (66) 石垣島 (63, 64) 西表島 (0,
58, 95) “沖縄”(25)

Philodromidae エビゲモ科

- ・ *Philodromus roseofemoralis* Karsch 1879 モモアカエビゲモ

正体不明である .

“ 沖縄 ”(25)

- 211 . *Philodromus subaureolus* Bösenberg & Strand 1906 アサヒエビグモ
硫黄島 (0) 伊是名島 (70) 沖縄島 (61, 64, 74, 81) 宮古島 (58, 69) 石垣島 (58)
西表島 (58) 魚釣島 (59) 黄尾ショウ (59) “ 八重山群島 ”(57) “ 沖縄 ”(25)
- *Philodromus spinatarsus* Simon 1895 キハダエビグモ
魚釣島 (59)
- 212 . *Thanatus miniaceus* Simon 1880 ヤドカリグモ
尖閣諸島 (0) 南小島 (59)
- *Tibellus tenellus* (L. Koch 1876) シャコグモ
宮古島 (58, 69) “ 沖縄 ”(25)

Thomisidae カニグモ科

- 213 . *Alcimochthes limbatus* Simon 1885 ズダカカニグモ
西表島 (0, 48, 106)
- 214 . *Boliscus tuberculatus* (Simon 1886) イボカニグモ
沖縄島 (0, 43, 81) 宮城島 (43) 久米島 (60) 宮古島 (58) 石垣島 (43) 西表島 (0,
43, 95)
- *Coriarachne fulvipes* (Karsch 1879) コカニグモ
沖縄島 (74) 宮古島 (58, 65, 66, 69) “ 沖縄 ”(25)
- *Cupa typica* Bösenberg & Strand 1906 タルグモ
原記載以外で唯一の記録である . おそらく次種を誤同定したのであろう .
“ 沖縄 ”(25)
- 215 . *Cupa zhengi* Ono & Song 1986 ミナミタルグモ
沖縄島 (0, 46, 48, 81)
- 216 . *Diaea subdola* O. P.-Cambridge 1885 コハナグモ
沖縄島 (0, 48, 62, 64, 81, 133) 座間味島 (48) 久米島 (65) 池間島 (66) 宮古島
(58, 65, 66, 69) 伊良部島 (66) 下地島 (66) 石垣島 (48) 西表島 (0, 30, 31,
48, 63, 64, 95) 魚釣島 (59) 南小島 (59) 黄尾ショウ (59)
- *Heriaeus mellotteei* Simon 1886 アシナガカニグモ
“ 沖縄 ”(25)
- 217 . *Loxobates daitoensis* Ono 1988 ダイトウマルガタワカバグモ
北大東島 (48) 南大東島 (48)
- 218 . *Lysiteles miniatus* Ono 1980 ダイダイエビスグモ
沖縄島 (0) 西表島 (0, 48, 95)
- 219 . *Misumenops kumadai* Ono 1985 クマダハナグモ

- 沖繩島 (0, 44) 西表島 (0, 95)
220. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius 1775) ハナグモ
 北大東島 (0) 南大東島 (0) 硫黄島 (0) 伊平屋島 (70) 伊是名島 (48, 70) 沖繩島 (0, 1, 48, 61, 64, 74, 81) 古宇利島 (8) 浜比嘉島 (6) 久米島 (48, 65, 60) 池間島 (48, 66, 48, 58) 宮古島 (69) 石垣島 (58) 小浜島 (0) 西表島 (0, 48, 58, 63, 64, 95, 134) 与那国島 (48, 58)
221. *Monaeses aciculus* (Simon 1903) ドウナガカニグモ
 沖繩島 (0, 45) 座間味島 (45)
222. *Oxytate hoshizuna* Ono 1978 ホシズナワカバグモ
 南大東島 (0) 沖繩島 (0, 48, 74, 81, 137) 屋我地島 (48) 座間味島 (48) 久米島 (48, 60) 宮古島 (48) 石垣島 (48, 137) 小浜島 (0) 西表島 (0, 40, 48, 95, 137)
- ・ *Oxytate striatipes* L. Koch 1878 ワカバグモ
 前種ホシズナワカバグモを誤同定したものである。
- 沖繩島 (62, 64) 古宇利島 (8) 屋嘉比島 (4) 久場島 (4) 久米島 (65) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 伊良部島 (66) 下地島 (66) 石垣島 (58, 63, 64, 135) 西表島 (58, 63, 64) 与那国島 (11, 58) “沖繩”(25)
223. *Phrynarachne ceylonica* (O. P.-Cambridge 1884) ヘリジロツケオグモ
 石垣島 (48) 西表島 (0, 48, 95)
224. *Phrynarachne katoi* Tikuni 1955 カトウツケオグモ
 沖繩島 (48)
225. *Runcinia acuminata* (Thorell 1881) トガリシロスジグモ
 沖繩島 (0, 48, 81) 久米島 (60) 座間味島 (48)
226. *Runcinia albostrata* Bösenberg & Strand 1906 シロスジグモ
 沖繩島 (62, 64) 久場島 (4) 久米島 (48, 65) 池間島 (48) 宮古島 (69) 石垣島 (48, 63, 64) 小浜島 (0) 西表島 (0, 48, 63, 64, 95) 与那国島 (48) “沖繩”(25)
227. *Takachioa trunciformis* (Bösenberg & Strand 1906) コキハダカニグモ
 伊平屋島 (48) 沖繩島 (0, 41, 48) 宮古島 (48) 石垣島 (41, 48) 小浜島 (0) 西表島 (0, 48, 95)
228. *Thomisus kitamurai* Nakatsudi 1934 アマミアズチグモ
 沖繩島 (0, 48, 81) 石垣島 (48) 西表島 (0, 48, 95)
- ・ *Thomisus labefactus* Karsch 1881 アズチグモ
 前種あるいは次種を誤同定したものである。
- 伊平屋島 (70) 沖繩島 (1, 61, 64, 74) 久場島 (4) 久米島 (65) 池間島 (66) 宮古島 (58, 69) 下地島 (66) 石垣島 (58) 西表島 (58, 63, 64) 与那国島 (11, 58) 魚釣島 (59) “沖繩”(25)
229. *Thomisus okinawensis* Strand 1907 オキナワアズチグモ

- 沖縄島(0)池間島(48)宮古島(48)石垣島(48)西表島(0,48,95)与那国島(48)
 “Okinawa”(82)
230. *Tmarus komi* Ono 1996 コトラフカニグモ
 西表島(0,52)
- ・ *Tmarus piger* (Walckenaer 1802) トラフカニグモ
 近似別種を誤同定したものであろう。
 沖縄島(64)宮古島(58,69)石垣島(58)西表島(58,63,64)与那国島(58)“沖
 縄”(25)
231. *Tmarus shimojanai* Ono 1997 ヤエヤマセマルトラフカニグモ
 西表島(0,53)
- ・ *Xysticus atrimaculatus* Bösenberg & Strand 1906 ホンクロボシカニグモ
 “沖縄”(25)
- ・ *Xysticus croceus* Fox 1937 ヤミイロカニグモ
 次種を誤同定したのであろう。
 久米島(60)宮古島(58,69)石垣島(58,63,64)西表島(58,63,64)波照間島
 (11)与那国島(58)
232. *Xysticus ephippiatus* Simon 1880 シナカニグモ
 宮古島(48)多良間島(42,48)小浜島(0)西表島(0,42,48,95)
- ・ *Xysticus insulicola* Bsenberg & Strand 1906 アズマカニグモ
 “沖縄”(25)
- Salticidae ハエトリグモ科
233. *Asemonea tanikawai* Ikeda 1996 タニカワヨリメハエトリ
 西表島(0,14)
234. *Bavia sexpunctata* (Doleschall 1859) ムツボシハエトリ
 西表島(0,111,115)
235. *Bristowia heterospinosa* Reimoser 1934 マツモトハエトリ
 西表島(0,13)
- ・ *Carrhotus xanthogramma* (Latreille 1819) ネコハエトリ
 筆者らも沖縄県産のネコハエトリ類似種の標本は採集しているが同定を保留している。
 沖縄島(74)久米島(65)宮古島(58,69)石垣島(49,63,64,68)西表島(58,
 63,64,134)与那国島(58)
- ・ *Cosmophasis viridifasciata* (Doleschall 1859) クスミハエトリ
 “沖縄”(25)
- ・ *Evarcha albaria* (L. Koch 1878) マミジロハエトリ
 近似別種を誤同定したものである。

- 久米島 (65) “ 沖縄 ” (25)
- ・ *Harmochirus brachiatus* (Thorell 1877) ウデブトハエトリ
 近似別種を誤同定したものと思われる。
 宮古島 (58, 69) “ 沖縄 ” (25)
- 236 . *Hasarius adansoni* (Audouin 1827) アダンソンハエトリ
 北大東島 (0) 南大東島 (0, 68) 伊平屋島 (70) 伊是名島 (70) 伊江島 (68) 沖縄島
 (0, 1, 62, 64, 68, 74, 81, 96) 浜比嘉島 (6, 68) 津堅島 (68) 屋嘉比島 (4)
 久場島 (4) 久米島 (65) 池間島 (66) 宮古島 (58, 65, 66, 68, 69) 伊良部島 (66)
 多良間島 (66) 石垣島 (0, 58, 63, 64) 竹富島 (68) 小浜島 (0) 西表島 (0, 30,
 31, 58, 63, 64, 68, 95, 134) 波照間島 (11) 与那国島 (11, 58, 67, 68) “ 沖縄 ”
 (25)
- ・ *Marpissa dybowskii* (Kulczyński 1895) オオハエトリ
 沖縄島 (61, 64) 宮古島 (58, 69)
- 237 . *Marpissa elongata* (Karsch 1879) ヤハズハエトリ
 沖縄島 (0) 石垣島 (0) 小浜島 (0) 西表島 (0, 63, 64, 95)
- 238 . *Menemerus bivittatus* (Dufour 1831) アゴグロハエトリ
 本種および次種については分類学上問題があるが、未解決なので過去の文献に記録されている
 まま掲げる。
 西表島 (95) “ 沖縄 ” (25)
- 239 . *Menemerus confusus* Bösenberg & Strand 1906 シラヒゲハエトリ
 沖縄島 (81) 宮古島 (58, 65, 66, 69) 西表島 (0, 95) “ 沖縄 ” (25)
- ・ *Myrmarachne innermichelis* Bösenberg & Strand 1906 ヤサアリグモ
 久米島 (65)
- 240 . *Myrmarachne japonica* (Karsch 1879) アリグモ
 伊平屋島 (70) 沖縄島 (1, 61, 64, 67, 68, 81) 久米島 (65, 60) 宮古島 (58, 65,
 66, 69) 石垣島 (58) 西表島 (0, 58, 63, 64, 103) 与那国島 (58)
- 241 . *Onomastus kanoi* Ono 1995 カノハエトリ
 沖縄島 (0, 51)
- ・ *Orthrus bicolor* Simon 1900 ニシキリセイハエトリ
 “ 沖縄 ” (25)
- ・ *Phintella bifurcilinea* (Bösenberg & Strand 1906) キアシハエトリ
 宮古島 (58, 69) “ 沖縄 ” (25)
- ・ *Phintella castrisiana* (Grube 1861) マガネアサヒハエトリ
 近似別種を誤同定したものであろう。
 沖縄島 (64, 133) 久米島 (65) 宮古島 (58, 66, 69)
- ・ *Phintella linea* (Karsch 1879) メガネアサヒハエトリ

引用文献

1. Chigira, Y., 1976. Notes on the spider fauna at a coastal limestone area in Okinawa Island. *Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.*, **2**: 101 - 112.
2. 千木良芳範, 1978. ツシマトリノフンダマシの網について. *Atypus*, (72): 19 - 24.
3. 千木良芳範, 1978. ふたたび採集されたツシマトリノフンダマシの記録. *Biol. Mag. Okinawa*, **16**: 10.
4. 千木良芳範, 1978. 屋嘉比島と久場島(沖縄諸島)の真正クモ類. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集, p. 171 - 176.
5. 千木良芳範, 1988. 冬季の瀬底島における造網性のクモ類について. 沖縄県立博物館総合調査報告書 V. 瀬底島, pp. 23 - 32.
6. 千木良芳範, 1990. 浜比嘉島の造網性のクモ類について. 沖縄県立博物館総合調査報告書 VII. 浜比嘉島, pp. 33 - 42.
7. 千木良芳範, 1990. 南大東島の造網性のクモ類について. 沖生教研会誌, (23): 37 - 44.
8. 千木良芳範, 1991. 古宇利島のクモ類について. 沖縄県立博物館総合調査報告書 VIII. 古宇利島. p. 15 - 24.
9. 千木良芳範, 1992. ワクドツキジグモ *Pasilobusbufoninus* (Simon)の久米島からの記録. *Biol. Mag. Okinawa*, **30**: 59 - 60.
10. 千木良芳範, 1992. 伊良部島の真正クモ類について. 沖縄県立博物館紀要, (18): 19 - 24.
11. 千木良芳範・宮城邦治, 1981. 波照間島および与那国島の真正クモ類. *Heptathela*, **2**: 12 - 15.
12. Haupt, J., 1983. Vergleichende Morphologie der Genitalorgane und Phylogenie der liphistiomorphen Webspinnen (Araneae: Mesothelae). I. Revision der bisher bekannten Arten. *Z. zool. Syst. Evolut-forsch*, **21**: 275 - 293.
13. Ikeda, H., 1995. Two poorly known species of salticid spiders from Japan. *Acta arachnol.*, **44**: 159 - 166.
14. Ikeda, H., 1996. A new species of the genus *Asemonea* (Araneae: Salticidae) from Japan. *Acta arachnol.*, **45**: 113 - 117.
15. 池原貞雄・下謝名松栄, 1975. 沖縄の陸の動物. 143pp. 風土記社. 那覇.
16. Irie, T., 1997. Two new species of the genera *Pholcus* and *Spermophora* (Araneae: Pholcidae) from the Kyushu, Japan. *Acta arachnol.*, **46**: 133 - 138.
17. Kamura, T., 1992. Two new genera of the family gnaphosidae (araneae) from Japan. *Acta arachnol.*, **41**: 119 - 132.
18. Kamura, T., 1994. Two new species of the genus *Phrurolithus* (Araneae: Clubionidae) from Iriomotejima Island, Southwest Japan. *Acta arachnol.*, **43**: 163 - 168.
19. Kamura, T., 1994. A new species of the genus *Zelotes* (Araneae: Gnaphosidae) from Iriomotejima Island, Southwest Japan. *Acta arachnol.*, **43**: 159 - 162.
20. Kamura, T., 1997. Two species of the genera *Cladothela* and *Trachyzelotes* (Araneae:

- Gnaphosidae) from Yaeyama Islands , South West Japan . *Acta arachnol.*, **46** : 77 - 81 .
- 21 . Keegan , H . L . , R . E . Weaver , S . Toshioka and T . Matsui , 1964 . Some venomous and Noxious Animals of East and Southeast Asia . 406th Medical Laboratory , Special Report .
- 22 . 岸田久吉 , 1936 . 日本帝国産のコガネグモ属諸種に就て . *Acta arachnol.* , **1** : 14 - 27 .
- 23 . 岸田久吉 , 1936 . 日本帝国産のハシリグモ属諸種に就て . *Acta arachnol.* , **1** : 114 - 127 .
- 24 . 岸田久吉 , 1937 . 日本帝国産のトゲグモ属諸種に就いて . *Acta arachnol.* , **2** : 138 - 149 .
- 25 . 岸田久吉 , 1959 . 無角網 . In 沖縄産動物目録 , 沖縄生物教育研究会 .
- 26 . Komatsu , T . , 1968 . Two new cave spiders of genera *Tetrablemma* (Tetrablemmiinae , Oonopidae) and *Dolichocybaeus* (Cybaeinae) . *Acta arachnol.* , **21** : 35 - 38 .
- 27 . Komatsu , T . , 1972 . Two new cave spiders from Okinawa Island (genera *Falcileptoneta* and *Mastrana* , Laptonetidae) . *Acta arachnol.* , **24** : 82 - 85 .
- 28 . 胡沢 新 , 1992 . チブサトゲグモの網に見られる綿状の糸について . *Kishidaia* , (64) : 6 - 8 .
- 29 . 名護市教育委員会 , 1997 . 名護の自然 . 123pp .
- 30 . 大井良次 , 1963 . 大阪市立大学探検部採集の琉球列島の真正蜘蛛類目録 . 大阪市立大学八重山群島学術調査報告 , pp . 201 - 205 .
- 31 . 大井良次 , 1963 . 沖縄本島・西表島のクモ . *Atypus* , (29) : 15 - 17 .
- 32 . 大熊千代子 , 1968 . クモの新記録 2 種 . *Acta arachnol.* , **25** : 40 - 42 .
- 33 . 大熊千代子 , 1976 . 日本のクモの新記録 - *Tetragnatha ceylonica* Cambridge セイロンアシナガグモ (新称) . *Atypus* , (67) : 45 - 47 .
- 34 . Okuma , C . , 1977 . A new species of the genus *Tetragnatha* (Araneae : Tetragnathidae) from the Ryukyus , Japan . *Acta arachnol.* , **27** (spec . no .) : 27 - 32 .
- 35 . Okuma , C . , 1987 . A revision of the genus *Tetragnatha* Latreille (Araneae , Tetragnathidae) of Asia , part I . *J. Fac. Agr. , Kyushu Univ.* , **32** : 165 - 181 .
- 36 . Okuma , C . , 1987 . A revision of the genus *Tetragnatha* Latreille (Araneae , Tetragnathidae) of Asia , part II . *J. Fac. Agr. , Kyushu Univ.* , **32** : 183 - 213 .
- 37 . Okuma , C . , 1988 . Five new species of *Tetragnatha* from Asia (Araneae : Tetragnathidae) . *Esakia* , (26) : 71 - 77 .
- 38 . Okuma , C . , 1991 . A new species of the genus *Tetragnatha* (Araneae : Tetragnathidae) from Iriomotejima - Island , Japan . *Acta arachnol.* , **40** : 43 - 46 .
- 39 . Okuma , C . , 1994 . Spiders of the genera *Episinus* and *Moneta* from Japan and Taiwan , with descriptions of two new species of *Episinus* (Araneae : Theridiidae) . *Acta arachnol.* , **43** : 5 - 25 .
- 40 . Ono , H . , 1978 . Thomisidae aus Japan II . Das Genus *Oxytate* L . Koch 1878 (Arachnida : Araneae) . *Senckenbergiana biol.* , **58** : 245 - 251 .
- 41 . 小野展嗣 , 1978 . コキハダカニグモの再記載 . *Atypus* , (72) : 3 - 7 .
- 42 . 小野展嗣 , 1981 . シナカニグモの分布と系統 . *Kishidaia* , (47) : 69 - 75 .

- 43 . Ono , H . , 1984 . The thomisidae of Japan . IV . *Boliscus* Thorell , 1891 (Arachnida , Araneae) , a genus new to the Japanese fauna . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **10** : 63 - 71 .
- 44 . Ono , H . , 1985 . Eine Neue Art der Gattung *Misumenopus* F. O . Pickard - Cambridge , 1900 , aus Japan (Araneae : Thomisidae) . *Proc. Jap. Soc. syst. Zool.* , (31) : 14 - 19 .
- 45 . Ono H . , 1985 . The thomisidae of Japan . V . *Monæses* Thorell , 1869 and its new junior synonym , *Mecostrabus* Simon , 1903 (Arachnida , Araneae) . *Bull. Natn. Sci. mus, Tokyo, ser. A* , **11** : 91 - 97 .
- 46 . Ono , H . , 1986 . A new Sino - Japanese species of the genus *Cupa* (Araneae , Thomisidae) from the coastal areas of the East China Sea . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **12** : 25 - 29 .
- 47 . Ono , H . , 1987 . A new Japanese Castianeirine genus (Araneae , Clubionidae) with presumptive prototype of salticoid eyes . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **13** : 13 - 19 .
- 48 . Ono , H . , 1988 . A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnida , Araneae) of Japan . National Science Museum , Tokyo .
- 49 . Ono , H . , 1989 . New species of the genus *Clubiona* (Araneae , Clubionidae) from Iriomotejima Island , the Ryukyus . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **15** : 155 - 166 .
- 50 . 小野展嗣 , 1990 . カワラメキリグモを沖縄の海岸で採集 . *Kishidaia* , (60) : 28 .
- 51 . Ono , H . , 1995 . Four East Asian spiders of the families eresidae , araneidae , thomisidae and salticidae (Arachnida , Araneae) . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **21** : 157 - 169 .
- 52 . Ono , H . , 1996 . Two new species of the families liphistiidae and thomisidae (Araneae) from the Ryukyu Islands , Southwest Japan . *Acta arachnol.* , **45** : 157 - 162 .
- 53 . Ono , H . , 1997 . New species of the genera *Ryuthela* and *Tmarus* (Araneae , Liphistiidae and Thomisidae) from the Ryukyu Islands , Japan . *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A* , **23** : 149 - 163 .
- 54 . Ono , H . & H . Saito , 1989 . A new linyphiid spider from the Ryukyu Islands . *Bull. Natn. Sci. Mus, Tokyo, Ser. A* , **15** : 231 - 234 .
- 55 . Ono , H . & A . Tanikawa , 1990 . A revision of the Japanese spiders of the genus *Langbiana* (Araneae , Zodariidae) . *Mem. Natn. Sci. Mus, Tokyo* , (23) : 101 - 112 .
- 56 . 大利昌久 , 1975 . 八重山群島のクモ類 . *Kishidaia* , (39) : 32 - 33 .
- 57 . 大利昌久 , 1975 . 真正クモ類の生態資料 (南西諸島編) . *Kishidaia* , (39) : 33 - 35 .
- 58 . 大利昌久・樋山御理男 , 1976 . 先島諸島 (八重山群島・宮古群島) の真正蜘蛛類とその生息域 . *Atypus* , (66) : 15 - 23 .
- 59 . 琉球大学尖閣列島学術調査団 , 1971 . 尖閣列島学術調査報告 . 140p .
- 60 . 佐藤文保 , 1995 . 久米島の小動物 . 久米島総合調査 , p . 26 - 64 .
- 61 . 下謝名松栄 , 1963 . 沖縄本島のクモ () . *Atypus* , (28) : 22 - 34 .
- 62 . 下謝名松栄 , 1963 . 沖縄本島のクモ (II) . *Atypus* , (29) : 23 - 25 .

- 63 . 下謝名松栄 , 1963 . 先島 (石垣島 ・ 西表島) の真正蜘蛛類 . *Atypus* , (41 - 42) : 24 - 35 .
- 64 . 下謝名松栄 , 1967 . 琉球列島のクモ相について . *Biol. Mag. Okinawa* , **4** : 16 - 25 .
- 65 . 下謝名松栄 , 1971 . 奄美大島 , 久米島及び宮古島の真正蜘蛛類 . *Atypus* , (57) : 19 - 31 .
- 66 . Shimojana , M . , 1976 . The spider fauna of the Miyako Islands . *Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.* , **2** : 95 - 100 .
- 67 . Shimojana , M . , 1977 . Preliminary report on the cave spider fauna of the Ryukyu Archipelago . *Acta arachnol.* , **27** (spec. no.) : 337 - 365 .
- 68 . 下謝名松栄 , 1980 . 先島 (宮古諸島 ・ 八重山諸島) の洞窟動物 . 沖縄県洞窟実態調査報告 , 沖縄県教育委員会 .
- 69 . 下謝名松栄 , 1981 . 宮古諸島の真正蜘蛛類目録 . 沖生教研会誌 , (14) : 51 - 62
- 70 . 下謝名松栄 , 1981 . 伊平屋島・伊是名島の真正蜘蛛類目録 . *Atypus* , (79) : 1 - 6 .
- 71 . Shimojana , M . , 1982 . A new species of the genus *Coelotes* (Araneae , Ageleidae) from the Yaeyama Islands , Okinawa Prefecture , Japan . *Acta arachnol.* , **30** : 75 - 82 .
- 72 . Shimojana , M . , 1989 . Four new species of the genus *Coelotes* (Araneae : Ageleidae) from the Ryukyu Islands , Japan . *Arachnol. Pap. pres. Yaginuma , Osaka* . p . 75 - 82 .
- 73 . Shimojana , M . & J . Haupt , 1998 . Taxonomy and natural history of the funnel - webspider genus *Macrothele* (Araneae : Hexatheleidae : Macrothelinae) in the Ryukyu Islands (Japan) and Taiwan . *Species Diversity* , **3** : 1 - 15 .
- 74 . 下謝名松栄 ・ 新島義龍 ・ 真志喜文子 , 1982 . 知花城跡の動物 . 沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告書 , p . 41 - 68 .
- 75 . 新海 明 , 1985 . ジョロウグモとオオジョロウグモの網構造の比較によるジョロウグモ属の由来の一考察 . *Acta arachnol.* , **34** : 11 - 22 .
- 76 . 新海 明 , 1987 . 沖縄クモ観察記 . *Kishidaia* , (54) : 1 - 9 .
- 77 . 新海 明 , 1988 . 沖縄クモ観察記 (2) . *Kishidaia* , (57) : 13 - 18 .
- 78 . 新海 明 , 1988 . 沖縄クモ観察記 (3) . *Kishidaia* , **73** : 7 - 11 .
- 79 . 新海 明 , 1998 . 沖縄県での珍蛛の採集記録 . *Kishidaia* , **73** : 28 .
- 80 . 新海 明 , 1998 . ミナミノシマゴミグモによる円網の修繕 . *Kishidaia* , **74** : 7 - 10 .
- 81 . 新海 明 ・ 池田博明 ・ 谷川明男 , 1998 . 東京蜘蛛談話会 1997 年度合宿報告 沖縄県名護市周辺のクモ . *Kishidaia* , (74) : 23 - 32 .
- 82 . Strand , E . , 1907 . Sud - und ostasiatische Spinnen . *Abh. naturf. Ges. Gortitz* , **25** : 107 - 215 .
- 83 . Strand , E . , 1910 . Eine neue japonische Ctenizine (Araneae) . *Deuts. ent. Zeits* , **1910** : 441 - 442 .
- 84 . Tanaka , H . , 1985 . Descriptions of new species of the lycosidae (Araneae) from Japan . *Acta arachnol.* , **33** : 51 - 87 .
- 85 . 田中穂積 , 1986 . 日本から新たに得られたコモリグモ科 13 種について . *Atypus* , (88) : 15 - 23 .

- 86 . Tanaka , H . , 1988 . Lycosid spiders of Japan . I . The genus *Pirata* Sundevall . *Acta arachnol.* , **36** : 33 - 77 .
- 87 . 田中穂積 , 1989 . 日本から得られた *Pardosa* (オオアシコモリグモ属) の 2 新記録種および 1 新シノニム . *Arypus* , (93) : 10 - 15 .
- 88 . 田中穂積 , 1989 . 日本から得られた *Arctosa* (ミズコモリグモ属) の 1 未記録種 . *Atypus* , (94) : 10 - 12 .
- 89 . Tanaka , H . , 1989 . A new species of the genus *Pirata* Sundevall (Araneae : Lycosidae) from the Ryukyu Islands , Japan . *Bull . Biogeogr . Soc . Japan* , (44) : 109 - 110 .
- 90 . Tanaka , H . , 1990 . Lycosid spiders of Japan . IV . The genus *Tricca* Simon . *Acta arachnol.* , **39** : 21 - 26 .
- 91 . Tanaka , H . , 1990 . A new species of the genus *Pardosa* C . L . Koch (Araneae : Lycosidae) from Japan . *Proc . Japan . Soc . Syst . Zool.* , (41) : 23 - 25 .
- 92 . Tanaka , H . , 1991 . Lycosid spiders of Japan . VII . The genus *Arctosa* C . L . Koch . *Sonoda Women's College Studies* , (25) : 289 - 316 .
- 93 . Tanaka , H . , 1993 . Lycosid spiders of Japan . IX . The genus *Pardosa* C . L . Koch - *amentata* - group - . *Sonoda Women's College Studies* , (27) : 261 - 318 .
- 94 . Tanaka , H . & M . Suwa , 1986 . Descriptions of three new species of the *Pardosa laura* complex (Araneae : Lycosidae) based on their morphology and ecology . *Acta arachnol.* , **34** : 49 - 60 .
- 95 . 谷川明男 , 1989 . 西表島のクモ類採集記録 . *Kishidaia* , (59) : 25 - 44 .
- 96 . 谷川明男 , 1989 . 田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録 . *Kishidaia* , (58) 50 - 55 .
- 97 . Tanikawa , A . , 1989 . Japanese spiders of the genus *Larinia* Simon (Araneae : Araneidae) . *Acta arachnol.* , **38** : 31 - 47 .
- 98 . 谷川明男 , 1990 . 日本新記録種 *Tetragnatha chauliodus* (Thorell , 1890) および *Leucauge decorata* (Blackwall , 1864) について . *Atypus* , (95) : 8 - 13 .
- 99 . 谷川明男 , 1990 . マルゴミグモとトゲゴミグモについて . *Atypus* , (96) : 1 - 9 .
- 100 . Tanikawa , A . , 1991 . New record of *Arachnura melanura* Simon , 1867 (Araneae : Araneidae) , from Japan , with the first description of the male . *Acta arachnol.* , **40** : 11 - 15 .
- 101 . 谷川明男 , 1991 . マルゴミグモとトゲゴミグモの分布について . *Kishidaia* , (62) : 21 .
- 102 . 谷川明男 , 1991 . ホルストジョウゴグモにかみつかれた . *Kishidaia* , (62) : 23 - 24 .
- 103 . 谷川明男 , 1991 . 西表島のクモ類採集記録 . *Kishidaia* , (62) : 26 - 30 .
- 104 . 谷川明男 , 1991 . 日本新記録種 *Theridion rufipes* Lucas , 1846 および *Coleosoma floridanum* Banks , 1900 について . *Atypus* , (98/99) : 1 - 7 .
- 105 . Tanikawa , A . , 1991 . A new species of the genus *Dolichognatha* (Araneae : Tetragnathidae) from Iriomotejima Island , Southwest Japan . *Acta arachnol.* , **40** : 37 - 41 .
- 106 . 谷川明男 , 1992 . 西表島のクモ類採集記録 . *Kishidaia* , (64) : 44 - 52 .

107. Tanikawa, A., 1992. A revisional study of the Japanese spiders of the genus *Cyclosa* Menge (Araneae: Araneidae). *Acta arachnol.*, **41**: 11 - 85.
108. Tanikawa, A., 1992. A revision of the Japanese spiders of the genus *Metleucauge* Levi, 1980 (Araneae: Tetragnathidae). *Acta arachnol.*, **41**: 161 - 175.
109. 谷川明男, 1992. ポルティアの産室. *Kishidaia*, (63): 40.
110. 谷川明男, 1992. 日本新記録種 *Plexippus pococki* Thorell, 1895 について. *Atypus*, (100): 13 - 16.
111. Tanikawa, A., 1993. Two newly recorded spiders from Japan, *Bavia sexpunctata* (Doreschall, 1859) and *Rhene setipes* Zabka, 1985 (Araneae: Salticidae). *Acta arachnol.*, **42**: 13 - 19.
112. 谷川明男, 1993. オオジョロウグモの色彩変異について. *Kishidaia*, (65): 40 - 42.
113. 谷川明男, 1993. 触肢のフ節がないハラピロスズミグモの雄. *Kishidaia*, (65): 42 - 43.
114. 谷川明男, 1994. キオヒキグモの雄は幼体で出囊する. *Kishidaia*, (66): 54 - 55.
115. 谷川明男, 1996. 西表島のクモ類採集記録. *Kishidaia*, (70): 21 - 24.
116. 谷川明男, 1996. 沖縄島新記録のクモ4種: ヤセゴミグモ・ミツカドゴミグモ・イリオモテアシナガグモ・リュウキュウセンショウグモ. *Kishidaia*, (70): 65 - 66.
117. 谷川明男, 1996. ナガマルコガネグモの団居に侵入していたシロカネイソウロウグモ. *Kishidaia*, (70): 66 - 67.
118. Tanikawa A., 1996. New records of *Tetragnatha bituberculata* (Araneae: Tetragnathidae) from Japan. *Acta arachnol.*, **45**: 151 - 155.
119. 谷川明男, 1997. アカオビゴケグモの採集・観察・雑感. *Kishidaia*, (71): 23 - 24.
120. 谷川明男, 1997. ホシスジオニグモの変ったラッピング. *Kishidaia*, (71): 25.
121. Tanikawa, A., 1997. A description of the male of *Cyclosa angusta* (Araneae: Araneidae). *Acta arachnol.*, **46**: 29 - 31.
122. 谷川明男, 1998. オオジョロウグモの造網場所移動の観察. *Kishidaia*, 73: 17 - 20.
123. 谷川明男, 1998. 餌を引きずって網の上を歩いたオオジョロウグモの幼体. *Kishidaia*, 74: 22.
124. Tanikawa, A., 1998. The new synonymy of the spider genus *Argyrodes* (Araneae: Theridiidae) and a description of a new species from Japan. *Acta arachnol.*, **47**: 21 - 26.
125. Tanikawa, A., T. Chida & K. Kumada, 1996. New records of *Argyrodes flavescens* (Araneae: Theridiidae) from Japan. *Acta arachnol.*, **45**: 47 - 52.
126. Tazoe, S., 1992. 日本新記録種タイワンコブヌカグモについて. *Acta arachnol.*, **42**: 69 - 72.
127. Tazoe, S., 1993. A new species of the genus *Entelecara* (Araneae: Linyphiidae) from Iriomotejima Island, Southwest Japan. *Acta arachnol.*, **42**: 69 - 72.
128. Tazoe, S., 1994. A new species of the genus *Gongylidioides* (Araneae: Linyphiidae) from Iriomotejima Island, Southwest Japan. *Acta arachnol.*, **43**: 131 - 133.
129. 利岡静一, 1967. 有毒無脊椎動物に属する数種の人体被害例について. *衛生動物*, 18: 169 - 170.

130. 植村利夫, 1937. 蜘蛛研究室彙報. *Acta arachnol.*, **2**: 105 - 112.
131. 八木沼健夫, 1955. 日本産オニグモ類 *Mangora*, *Neoscona*, *Zilla* 属について. *Acta arachnol.*, **14**: 15 - 24.
132. 八木沼健夫, 1958. 日本産コガネグモ科の検討(2). II *Cyrtophora* 属. *Acta arachnol.*, **16**: 10 - 17.
133. 八木沼健夫, 1963. 沖縄のクモ. *Atypus*, (29): 18 - 20.
134. 八木沼健夫, 1964. 南西諸島のクモ. 関西自然文化研究会研究報告第1集, pp. 39 - 50.
135. 八木沼健夫, 1966. 島のクモ同定記録 - 隠岐島・対馬・奥尻島・屋久島・石垣島 -. *Atypus*, (41 - 42): 52 - 59.
136. 八木沼健夫, 1970. 分布資料. *Atypus*, (54): 27.
137. 八木沼健夫, 1978. ワカバグモの新種. *Atypus*, (71): 20.
138. Yaginuma, T., 1979. A study of the Japanese species of nesticid spiders. *Fac. Let. Rev. Otemon Gakuin Univ.*, (13): 255 - 287.
139. 八木沼健夫, 1980. オキナワキムラグモ *Heptathela nishihirai*. *Atypus*, (76): 44 - 45.
140. 八木沼健夫, 1982. 分布資料. *Atypus*, (80): 10.
141. 八木沼健夫, 1983. オダカユウレイグモ沖縄にいた. *Atypus*, (83): 38.
142. 八木沼健夫, 1990. イソタナグモの学名と分布. 南紀生物, (32): 1 - 6.
143. 八木沼健夫・新海栄一, 1975. 分布資料. *Atypus*, (63): 31.
144. 吉田 哉, 1977. 日本・台湾新記録のクモ - *Theridion spiniventre* O. P. Cambridge アシナガヒメグモ(新称) -. *Atypus*, (70): 9 - 11.
145. 吉田 哉, 1978. 石垣島で採集したサヤヒメグモ. *Kishidaia*, (43): 10.
146. Yoshida, H., 1979. Notes on the Japanese species of the genus *Phoroncidia* (Araneae: Theridiidae). *Acta arachnol.*, **28**: 45 - 51.
147. Yoshida, H., 1981. Seven new species of the genus *Octonoba* (Araneae: Uroboridae) from the Ryukyus, Japan. *Acta arachnol.*, **30**: 21 - 32.
148. Yoshida, H., 1986. The spider genus *Anelosimus* (Araneae: Theridiidae) in Japan and Taiwan. *Acta arachnol.*, **34**: 31 - 39.
149. Yoshida, H., 1987. A new species of the genus *Pholcomma* (Araneae: Theridiidae) from Taiwan and Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, (42): 29 - 32.
150. 吉田 哉, 1987. *Miagrammopes oblongus* Yoshida, 1982 日本に産する. *Atypus*, (90): 13 - 14.
151. Yoshida, H., 1991. A new species of the genus *Episinus* (Araneae: Theridiidae) from the Yaeyama Islands Japan. *Acta arachnol.*, **40**: 7 - 10.
152. 吉田 哉, 1991. 日本産ミジングモ属の2種. *Acta arachnol.*, **40**: 33 - 35.
153. 吉田 哉, 1991. 日本産のウズグモ属, ミナミウズグモ属, トウキョウウズグモ属およびヒメウズグモ属(クモ目: ウズグモ科)について. *Atypus*, (98/99): 21 - 26.

- 154 . Yoshida , H. , 1992 . Two species of the genus *Euryopsis* (Araneae : Theridiidae) from Japan .
Acta arachnol. , **41** : 139 - 142 .
- 155 . Yoshida , H. , 1993 . East Asian species of the genus *Chryso* (Araneae : Theridiidae) . *Acta arachnol.* , **42** : 27 - 34 .
- 156 . Yoshida , H. , 1993 . Notes on *Argyrodesxiphias* Thorell , 1887 (Araneae : Theridiidae) from South East Asia . *Acta arachnol.* , **42** : 83 - 85 .
- 157 . Yoshida , H. , 1993 . Two new species of the genus *Theridion* (Araneae : Theridiidae) from the Yaeyama Islands and Haha - jima Island of the Bonin Islands , Japan . *Acta arachnol.* , **42** : 109 - 113 .
- 158 . Yoshida H. , 1993 . A new species of the genus *Minetus* (Araneae : Mimetidae) from the Ryukyus and Taiwan . *Proc. Japan . Soc. Syst. Zool.* , (49) : 30 - 32 .
- 159 . Yoshida , H. , 1995 . Three species of the genus *Thymites* (Araneae : Theridiidae) from Japan .
Acta arachnol. , **44** : 113 - 116 .
- 160 . Yoshida , H. , 1996 . A new species of the genus *Chryso* (Araneae : Theridiidae) from the Ryukyus , Japan and Taiwan . *Acta arachnol.* , **45** : 139 - 141 .

編集後記

Kishidaia の 30 周年記念号 をお届けします。みなさんのお蔭で大部な冊子に仕上がりました。既に Kishidaia では 20 周年記念号 (58 号) を出していますので、それと同じにならないように注意しました。10 年前に私は「談話会をクモの博物学的研究のメッカに」と書きました。その後、クモの分類学や生態学は確実に深まったと思います。『クモ生理生態事典』も電子ファイルとして提供できるようになりました。欲を言えば、もっとガムシャラに研究する人が出て、人の環も広がればよいと思います。なお、今号の編集に当たりましては、新海栄一氏に協力していただきました。記して感謝申し上げます。続いて も編集集中で、萱嶋先生の玉稿を始め、目下、会員のみなさんの原稿が続々と寄せられています。〆切の 5 月まで奮って原稿をお寄せ下さい。編集 (受付事務) ・池田, 編集 (版下) ・谷川明男, 編集 (印刷発送) ・木村知之の体勢は変わりません。

1998・1999 年度運営委員

池田 博明・小野 展嗣・木村 知之・久保田 克哉・笹岡 文雄・高橋 登・高橋 祐子・
谷川 明男・萩本 房枝・平松 毅久・安田 明雄

会 長：萱嶋 泉 191-0062 東京都日野市多摩平 7 - 15 - 9

本 部：小野 展嗣 169-0073 東京都新宿区百人町 3 - 23 - 1 国立科学博物館動物研究部

会誌編集：木村 知之 215-0012 神奈川県川崎市麻生区東百合ヶ丘 4 - 38 - 12

(原稿送付先) 池田 博明 258-0018 神奈川県足柄上郡大井町金手 1099

電子メールアドレス fvgd9084@mb.infoweb.ne.jp

通信編集：笹岡 文雄 170-0004 東京都豊島区北大塚 3 - 12 - 21

事務局：平松 毅久 350-0816 埼玉県川越市上戸 91 - 3 瀬尾荘 202

会 計：安田 明雄 231-0861 神奈川県横浜市中区元町 5 - 219

郵便振替：00170-8-74885 東京蜘蛛談話会 (年会費 一般 2,800 円 学生 2,000 円)

会計監査：笠原喜久雄・鈴木成生

KISHIDAIA No.76 1999 年 3 月 1 日 印刷

編集者 木村知之

1999 年 3 月 1 日 発行

発行者 萱嶋 泉

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町 3 - 23 - 1 国立科学博物館動物研究部 小野展嗣方

印刷 有限会社 相模プロセス 神奈川県相模原市淵野辺 2 - 15 - 27

K I S H I D A I A

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.76, Mar., 1999

発刊 30 周年記念号

目 次

小澤 實 樹：表紙に寄せて	1
萱 嶋 泉：東京蜘蛛談話会発足の前後の事情	2
大河内哲二：[KISHIDAIA] 発刊の頃の思い出	6
松本 誠 治：談話会通信発刊のころの思い出	8
新海 栄 一：昭和 43 年 12 月 21 日（KISHIDAIA 発行を決定した日）	9
小野 展 嗣：いつかどこかで（4）編集，編集，また編集	11
新海 明：東京蜘蛛談話会の活動記録（1966～1999）	14
泉 宏 子：オオクマヒメドヨウグモの生態観察	24
加藤むつみ：トゲグモの卵のうと越冬	27
板倉 泰 弘：苦節 9 年，ハヤテグモの生息環境と婚姻給餌発見まで	30
船 曳 和 代：クモの網の展示標本の作り方	34
徳 本 洋：八丈島のジョロウグモ消滅か？	36
宮 下 和 喜：ハナグモの生活史	41
D R A G L I N E S	
八 幡 明 彦：コシロカネグモのクモ食い	49
平 松 毅 久：キンヨウグモの擬死	49
平 松 毅 久：オウギグモの求愛行動	49
伴 満・大川 秀 治：神奈川県津久井郡城山町のクモ	51
池田 博 明・伴 満：夏の神津島のクモ	55
池田 博 明：「神奈川県産クモ類目録」追記	59
谷川 明 男・佐々木健志：沖縄県産クモ類目録	61
編集後記	102